沈黙の恋

ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス著
鈴木滿訳

破の巻

この目に見えない道連れ〔守護天使〕と恋人の優しい祈りに守られ、フランツはアントウェルペン[1]で幾口かの貸倒れ売掛け金を回収しようと、ブラバント[2]の地へと旅を続けていた。ブレーメンからアントウェルペンまでの旅は、街道筋に追剝ぎがまだまだ出没、土地の領主が、通行許可証を持ち合わせない旅人に略奪行為を働き、その盗賊城の地下牢で飢渇のため衰死させる権利がある、と思い込んでいた当時にあっては、当節ブレーメンからカムチャトゥカへ行くより多くの危険と困難が付き物だった。なにしろ皇帝マクシミリアン[3]が布告した平和令[4]は確かに帝国一円に法律として施行されてはいたが、多くの地域ではまだ慣習法として認められていなかったのである。にもかかわらずこの独りぼっちの旅行者はたった一つの冒険に遭遇しただけで、巡礼行の目的地に到着した次第。

ある蒸し暑い日のこと、荒涼としたヴェストファーレン[5]の奥地で馬を進めていた彼は、とっぷりと暮れて夜になっても宿を見つけることができなかった。夕方頃雷雲がもくもくと聳え立ち、篠突くような俄か雨に肌までぐっしょり濡れ鼠。子どもの時から考えられる限りの快適さに慣れていた甘やかされ屋のこと、もう辛くってたまらない。こんな状態で夜をどうやり過ごしたものか、と大層困惑した。ほっとしたことに、夕立が降り止んだあと、遠くに灯火が一つ見えた。そうしてその後まもなく一軒のみすぼらしい百姓家の前に到着したが、様子がどうもあまり心丈夫ではない。この家、人間の住まいというより家畜小屋という風情。そのうえ無愛想な主人は浮浪人[6]かなんぞが相手でもあるかのように、水も火もくれようとせぬ。というのも、丁度この男、馬どもの脇で藁の上へ寝転ぼうとしかかっていたのだが、余所者なんぞのために、と不精を決め込んで、竈に火を再び焚きつけることも断ったのである。フランツはむっとして綿綿たる「我を憐れみたまえ」[7]を唱え始め、ヴェストファーレンの曠野を威勢の良い罵り文句で呪った。百姓の方はろくろくそれを気に掛けず、悠悠閑閑として灯火を吹き消し、それ以上余所者に構おうとしなかった。なにせ、この御仁、客人たる者それ相当のもてなしを受ける権利がある、という掟などにてんから不案内だったので。ところがこの旅の者、家の外で嘆き節[8]を歌い続けて彼を煩わせるのを止めなかったものだから、眠ることができない。そこで、うまい具合に厄介払いをしてしまうべ、と渋渋ながら口を切って、こう言ったもの。「国の衆、おめさまがのんびり体を休めて楽したい、と思うとるだら、ここじゃ欲しいもんは見当たらねえべ。けんども、はあ、あっちを左に折れて木の茂みん中さ馬で抜けると、その向こう側にエーバーハルト・ブロンクホルストちゅうお偉い騎士の城があるだ。この人はどんな旅人でも救護騎士修道会[9]の修道士さんが聖墓拝みの巡礼を迎えるように泊めてくれるだで。したれども、この殿様さ、どたまに癇癪虫が一匹いて、これが時時ちくちく刺しよると、必ず喧嘩をおっぱじめて旅人を追い出すだあよ。まあ、おめさまが、胴着[10]を青くされる（ぶんなぐられる）だか、なんどとぐずぐず考えたり

しねえだら、お城で気持ちよく愉しめるだ」。

スープと一ショッペン[11]の葡萄酒なんかのために肋骨を棒打ち刑[12]の犠牲に捧げるのは、もとよりだれでも好むことではない。居候や食客のたぐいは美味珍饈にありつけるとなったら、髪の毛をむしられようが、引っ張られようが、平気の平左、傲慢不遜な主人側の下したもうあらゆる災厄をご無理ごもっともと我慢するが。フランツはしばらく思案したが、どうしたらよいか途方に昏れる。それでもとうとう一番冒険をやってみよう、と心を決めた。いわく「ここの惨めったらしい馬の敷き藁の上で寝て、ぼくの背中が車裂きの刑[13]に処されようと、騎士ブロンクホルストに同じ目に遭わされようと、どんな違いがあるっていうんだ。棒で擦ってもらえば、この濡れた服を乾かすことができなけりゃ今にも出そうで、そしたらぼくの体をがたがたに揺さぶるに決まってる熱を多分追い出してくれるさ」。で、老耄れ馬に拍車を入れると、まもなく古ゴシック建築様式の城館の門前に辿り着く。良く聴こえるようにと鉄の門を叩けば、中からこれまた明瞭な「だれだ」の返辞が谺のように返って来る。凍りついてしまったこの旅行者に対しておこなわれたのは衛兵の訊問という煩わしい通過儀礼で、これは、げにもっともなことながら、

門番や税関吏の権柄づくを市門や腕木式遮断機のもとで嘆息したり呪ったりする当世の旅行者たちと同様、なんとも面倒。だが彼は慣習に従って、館の博愛家が、自分を客として迎えてから打擲してやろう、とのご機嫌か、あるいは、恐れ多くも畏くも、野天に一夜の宿を取れ、との御意なのか、辛抱強く待たねばならなかった。

この古い城砦の持ち主は若い頃から皇帝[14]の軍隊に仕えた練達の軍人で、勇猛果敢なゲオルク・フォン・フロンスベルク[15]の指揮下で勤務、ヴェネツィアの軍勢との戦いでは小旗部隊[16]を指揮したもの。のち退役してからは、所領に引籠もり、戦役で犯したかつての罪を懺悔、数多くの慈善をおこない、飢えた者には食べ物を、渇えた者には飲み物を恵み、巡礼を宿らせ、そして泊めてやった連中を家から叩き出すのであった。というのは、この男、粗野で荒削りな軍人で、長年静穏で平和な暮らしを送っているとは申せ、軍神マルスのしきたりをかなぐり捨てることができなかったからである。さて、手厚いもてなしと交換ならこの家の慣わしに喜んで従うつもりでいる新来の客人は長くも待たされなかった。門の内側からいくつもの門と錠ががちゃがちゃ鳴る音がして、やがて扉がきいきいきしみながら開いたが、中へ足を踏み入れたこの余所者に訴えるようなその響きを聴かせて、あたかも警告あるいは嘆きを伝えているかのよう。城門を潜った時、怯えた旅の者の背中を寒気がぞぞっと次次に走り下った。けれども彼は丁寧に迎え入れられたのだった。何人もの従者が急いで寄って来て、彼が鞍から降りるのに手を貸し、甲斐甲斐しく旅嚢を外し、黒馬を厩に牽いて行き、乗り手を明るく照らされた部屋にいる主人のもとへと案内した。

客に歩み寄って、こちらが大声で悲鳴を挙げたかったほど力強く手を握り、まるでこの余所者が聾者であるかのように、ステントール[17]のような声音で、ようこそ、と挨拶したのは、活気と行動力に溢れた盛りの年頃の筋骨逞しい男で、そのいかにも軍人らしい外貌に臆病な旅人は恐怖に襲われ、そのためびくびくした様子を隠すことができず、全身が戦慄した。「どうしたな、お若いの」と騎士は雷鳴のような声で訊ねた。「白楊の葉っぱみたいにぶるぶる震え

ておるではないか。それに死神に脅かされているとでもいう風に真っ青じゃの」。フランツは勇気を奮い起こした。そして、どうせそのうち自分の両の肩で飲み食いの勘定を支払わねばならない、と考えたので、彼の小心翼翼ぶりは一種の図図しさに変じた。「殿」と彼はくつろいだ調子で応えた。「ご覧のようにぼくは俄か雨でずぶ濡れになってしまいました。ヴェーザー河を泳ぎ渡ったみたいにです。服を乾いたのと取替えられるようにしてください。それからちょいと気付けにたっぷり薬味の効いた麦酒粥を運ばせてください。これはぼくの神経をずきずきさせている熱の震えを追っ払ってくれますから。そうすりゃ気分が良くなることでしょう」。「よろしい」と騎士が返答。「そなたに要りようなものをどんどん言うてくれい。ここが自分の家と思うてな」。

フランツはパシャ[18]のような奉仕を受けた。彼はいずれきっとぶんなぐられるに違いないと覚悟していたから、それ相当の報酬をもらおう、と思い、身の回りでせっせと働いている従者たちをいろんな具合に冷やかし、からかった。だって、と彼は心中考えた、皆勘定は同じだものね、と。いわく「この胴着は太鼓腹向きだよ。もっとぴったり体に合うのを持って来ておくれ。この上履き靴は魚の目に当たって火のように燃える。靴型に嵌めて来て。この襞襟は板みたいに硬くって輪縄みたいに頸を締め付ける。もっと柔らかい、糊を付けてないのを持っておいで」。

館の主はこうしたブレーメン流の遠慮の無さに不興を覚えるどころか、言いつけられたことをさっさとやれ、と従者たちを督励、彼らを、お客をもてなす術を知らぬばかものだ、と叱りつけた。食卓の準備が調うと、主人と客は食卓に就き、二人とも麦酒粥を賞味した。これが済むとすぐに主が訊く。「この後の食べ物に何かお望みがおありかな」。客の答え。「なんなりと有り合わせの品を運ばせてください。お城の厨房が行き届いたものかどうか、拝見いたします」。すぐさま料理番が現れ、伯爵様に出しても恥ずかしくないような善美を尽くしたご馳走を食膳に並べる。フランツはどんどん手を出し、勧められるまで待ちはせぬ。すっかり満腹すると、彼はこう言ったもの。「お台所の

状態は悪くはございませんでした。地下の酒蔵の方もこんな具合でしたら、おもてなしぶりを大いに吹聴しなければなりますまい」。騎士が給仕役に合図すると、給仕役はすぐさまありきたりの食事用葡萄酒で台つきの大盃[19]を満たし、恭しく主人に供すれば、こちらは賓客の健康を祝してそれを綺麗に空にする。それからフランツが同じく領主に乾杯のお返しをすると、領主いわく「のう、客人、この酒をどう思われる」。「いけません、と申し上げましょう」とフランツ。「これが貯蔵庫にお持ちの最上品でしたら。そして、ご所蔵の最下級品でしたら、けっこうな、と申し上げます」。「そなたは美食家だわい」と騎士は応じた。「掌酒子[20]、秘蔵の酒樽[21]から注いでまいれ」。掌酒子が一ショッペンを試飲用に持って来ると、フランツはそれを味わってみて、こう言った。「これは本当の年代物。ずうっとこれでまいりましょう」。

騎士は大きな把手付き壺を一つ取り寄せると、客と一緒に晴朗快活に差しつ差されつ酌み交わし、従軍した戦役談義を始め、ヴェネツィア軍と対峙し、敵の車陣[22]を突破し、南国の兵団を羊のようにひねりつぶした次第を説く。語りながら戦人らしくすっかり熱狂してしまったものだから、壜や酒盃を湾曲刀[23]のように打ち下ろし、食事用小刀を槍のように振り回し、食卓仲間の体すれすれにまで身を寄せるので、こちらは鼻や耳が心配でたまらぬ。

こうして夜も更け渡ったが、騎士は一向眠そうな目にならない。ヴェネツィア人との戦いの話になると、まことに英気潑剌となるあんばい。物語は彼が飲み乾す酒盃の数とともにぐんぐん精彩を放ち、フランツはこれが大立ち回りの発端で、その際自分が一番おもしろい役を振られるのではないか、と怖くなった。で、自分が夜を明かすのは城の中でなのか外でなのか知るために、もうおつもりの寝酒としてなみなみ注いだ一杯を所望。彼はこう考えたのである。まずこの酒を飲み乾せと強いられるかも知れない、で、もし乾杯を断ると、酒の上の争いといったふりで、この家の慣わしに従い、いつもの餞別付きでおっぽり出されるのだろう、と。ところが予期に反して騎士は突然談義を打ち切

り、「刻は大切、明日はこれに事欠かぬ」と言った。「申し訳ございませんが」とフランツ。「明日日が昇りましたら、ぼくは旅を続けねばなりません。ブラバントへの遠路を控えておりまして、こちらに逗留いたすわけにはまいりませんので。それで、今日のうちにお暇乞いをさせてください。明日お別れのご挨拶でご安眠をお妨げいたさぬよう」。

「なんなりとお気に召すままじゃが」と騎士は結論した。「わしが起き出すまで、そなたをここから出立させるわけには行かぬて。元気付けの朝飯にパンを一口、ダンツィガー[24]を一飲みしてもろうて、門までお見送りし、この館の慣わし通りおさらばを申し上げるのじゃ」。

この言葉、フランツには解説不要。彼としては、門まで随行してやる、という最後の鄭重さは御免蒙りたかったのだが、ご亭主殿には採用した儀式を回避する気は無いと見えた。騎士は召使たちに、客人にお召し替え願って、お客様用寝台でお休み戴け、と指図。フランツはここでのんびりくつろぎ、柔らかい白鳥の羽根布団ですてきな安息を楽しんだので、睡魔に襲われる前に、こんな素晴らしい歓待を受けたのだから、ほどほどに殴られるのであれば、別に高い買い物じゃないな、とひとりごちた次第である。まもなく彼の物思いは数数の楽しい夢の周りに羽ばたき始め、魅惑のメータが薔薇の生垣の中にいて、母親とうち連れてそこを逍遥、花を摘んでいるのを見かけた。厳しいお目付け役に見咎められまいと、彼はすぐさまぎっしりと葉の生い茂った垣根の蔭に身を潜めるのだった。そうかと思えば、空想力は彼をあの狭い小路に連れ戻した。そ

こで彼は鏡の中に愛しい乙女の雪白の手が花花の手入れをしているのを眺めた。それからすぐに彼は芝草の中で彼女の傍らに座って、熱烈な愛を吐露しようとするのだが、愚かな羊飼いはそれを語る言の葉を探しあぐねる始末。騎士の嚠喨と響き渡る声と拍車のがちゃがちゃいう音が彼を起こさなかったら、あかあかと日の照り映える真昼間まで夢を見続けていたことだろう。騎士はもう夜明け方に厨房と地下の酒蔵で査閲をおこない、上等な朝食をしつらえるよう命令、客人が眼を覚ましたら、身なりを整えてなにくれと世話をするべく、準備おさおさ怠らぬよう、従者にはそれぞれ任務を割り当てたのである。

幸せに夢を見ていた青年にとって、もてなしの良い安らかな寝床と別れを告げるのは大層な克己心を要し、ぐずぐずと転げ回っていたのであるが、厳格な城主の鋭い声に胸を締め付けられ、酸っぱい林檎をかじらざるをえなくなった。そこで羽根布団から起き上がると、すぐさま一ダースもの手が彼に甲斐甲斐しく服を着せにかかった。騎士は彼を食堂の小さいながらたっぷりとしつらえられた食膳に案内。しかし不安で胸がどきどきの旅人はろくに食欲を感じない。主人が彼を励まして「なにゆえ手を延ばされぬ。いとわしい霧を凌ぐためにいくらか召し上がられい」と言うのに、フランツは答えて「ぼくの胃袋は昨夜のご馳走でまだ一杯なのです。でも、ぼくの旅嚢は空っぽですから、これからお腹が減るのに備えて詰め込んでおきたいと思います」。彼はせっせと卓上を片付け、持ち運びのできる一番旨そうで上等な物を入れたので、旅嚢はどれもはちきれそうに膨れ上がった。自分の老耄れ馬が充分にブラシを掛けられ、馬勒をつけられて牽き出されたのを見ると、別れの挨拶にダンツィガーの小杯を飲み乾し、これが主人が彼の襟髪をひっつかんで、家法を思い知らせる合図になるのだろう、と思った。

しかしびっくりしたことに騎士は迎えた時と同様親しく彼と握手し、一路平安を祈ってくれて、門錠付きの門が開かれた。で、ためらうことなく黒馬を駆り立てる。するとざっくざっく、彼は髪の毛一本曲げられることなく城門か

ら外へ出たのである。

すっかり自由の身になったわけだから、今や胸から重石が取れた思いのフランツは、無事に切り抜けられたのを看て取ったものの、どうして主人が勘定を掛けにしてくれたのか合点が行かない。この勘定、彼の考えでは随分高い付けになったはず。拳骨や棍棒を使いこなすその腕をあんなに怖がったのに、手厚いもてなしをしてくれた男に、今や暖かい気持ちで一杯になったフランツだが、撒き散らされた噂に根拠があるものやら事実無根なのやら、その本家本元自体に問い質してみたくてたまらなくなった。そこで即座に駄馬の向きを変え、跑歩で引き返す。騎士はまだ城門にいて、自分のお得意の学問である馬匹学振興のため、従者たちを相手に、黒馬の血統、容姿、体格、およびそのぎくしゃくした跑歩を論評していたが、余所者が旅の荷物を何か忘れたのではないか、と思い違いをして、この迂闊者ども、とばかり従者たちをじろりと睨んだ。「何か足りない物がおありか、お若いの」と彼はこちらへ向かって来る相手に大声で呼びかけた。「引き返して来られたとは。先を急ぎたかっただろうに」。「ああ、ちょっと伺いたいことがございまして、高貴な騎士様」と旅人が応える。「ご威信とお名前を汚す悪い噂があります。そちらに身を寄せる余所者はだれでもちゃんと面倒を見て戴けるが、出立する時にはしたたかに拳骨を頂戴いたすとか。こんな話をぼくは真に受け、飲み食いのお代は体で返そうと、何一つご遠慮しませんでした。つまり、ぼくは考えたのです。殿がただで物をくださらぬなら、こちらもただでは差し上げまい、と。それなのに今ぼくを無事に行かせてくださる。喧嘩口論抜きで。それが不思議なのです。御前、どうかおっしゃってください。これにはなにがしかの理由か説明がございましょうか。それとも愚にもつかぬ放言で根も葉もないことと断罪すべきでしょうか」。騎士が応える。「その噂は決してそなたに嘘を教えたわけではない。噂話が民衆の間に広まる時には、中に真実が一粒はあるものじゃよ。どういう事情なのか、本当の話を聞くがよい。わしはこの家の屋根の下に来る余所の人間はだれでも泊めてやる。そし

て後生のためにわしの食い扶持を頒け合うのじゃ。さてわしは古風な躾を受けた昔気質の人間でな、気の向くままにしゃべるし、わしの客人にも、ざっくばらんで真っ当にふるまい、わしと一緒にわしの物を楽しみ、要りようの物を遠慮なく口に出してもらいたいもんじゃ、と思うとる。ところがの、ありとあらゆるたわけたことをしよって、わしを怒らせるたぐいの奴らがおる。こやつらは、跪いたりぺこぺこしたりして、わしをからかい、愚弄しおり、あやふやな言葉遣いをし、ただもう闇雲にしゃべり散らす。おべっかを使えばわしの機嫌が取れると思い込み、飯の時なんぞは洗礼式のご馳走にお呼ばれした女どもさながらといった振舞いよ。『遠慮なくやれい』とわしが言えば、へいこらしてわしなら飼い犬どもにもやらんようなちっぽけな骨を皿から取る。『返杯をな』と申せば、なみなみ注がれた杯からちょいと唇を湿すばかりで、神様からのせっかくの下され物をばかにするといった風情じゃ。どんなことにもうじうじ遠慮するばかり、便所なんぞに行くにつけても危なくこの始末よ。こういった忌忌しい奴ばらによくせき我慢がならなくなり、客をどうあしらったらいいものやら皆目見当がつかなくなると、とどのつまりわしは逆上して、戸主権を行使、その阿呆の襟髪をひっつかみ、したたかに怒鳴りつけ、扉から外へ放り出すというわけじゃ。こういうのがわしの所の慣わしでの、わしに厄介を掛ける客にはだれでもそういう扱いをしておる。だが、そなたのようなたぐいの男ならいつでも歓迎じゃ。そなたは心に浮かぶことをブレーメン流にはっきり率直

に言うた。またこちらを通りがかることがあったら、のんびりわしの家に泊まってくれい。ではご機嫌よう」。

さてフランツは心も軽くうきうきとアントウェルペン指して馬を駆り、どこでもエーバーハルト・ブロンクホルストなる騎士の元でのような良いもてなしが受けられればなあ、と考えた。かつてフラマンの諸都市の女王と謳われた市に入ると、彼の希望の帆は順風に膨らんだ。あらゆる街区で富裕と贅沢に出くわし、さながら困窮と窮乏とはこの活気溢れる都会から追放を命じられたかのよう。どうやら、と彼は心中考えた、父の昔の債務者たちのうちかなりはまた浮かび上がっていて、ぼくが合法的な要求を表明したら、喜んでちゃんと支払いをしてくれるだろう、と。旅の疲れが取れると、彼は、泊まっている旅籠で自分の債務者たちの状況について当座の情報を仕入れに掛かった。「ペーテル・マルテンスはどうしています」とある日彼は食事の際食卓仲間たちに訊ねた。「まだ生きていますか。そして盛んに商売をしていますか」。「ペーテル・マルテンスはしっかり者でな」と一座の一人が答えた。「運送屋をやってはって、よう儲けてはりまっせ」。「プリュールスのファビアンはまだうまくやっていましょうか」。「おお、あのひとの身代いうたら際限無いし、市参事会にも名あ連ねたはります。それにあのひとの羊毛工場はどこもえらい繁盛しとりますわ」。「ヨナタン・フリッシュキールの稼業のはかゆきはよろしいですか」。「ふう、もしマックス皇帝がフランス人どもに嫁さんを攫われはらへんかったら（1）、あいつも今頃は金持ちになっとったやろにな。花嫁衣裳にするレースのご用達を請け負うていたんや。そやけど、嫁さんが皇帝に約束を断らはったもんやさかい、皇帝も買うのを止めはった。もしあんたはんがレースを贈物にしたい思うてるええ女がいはるんやったら、あいつは半値で手放しまっせ」。「オプ・デ・ビューテカント商館は落ちぶれてしまいましたか、それともまだ保っておりましょうか」。「あこは何年か前屋台骨に罅が入ってな。けど、イスパニアの軽快帆船が控え壁をあてごうてくれたんで、今はあんじょう保ちこたえてはります」。

フランツは自分が債権を持っている数人の商人のことを問い質し、父親が在世していた時分散仕舞[26]をした連中の大半が繁盛していることを知り、そのことから、思慮分別のある倒産は昔から将来の利益の宝庫だったのだ、ということに気づいた。こうした消息に彼は気分がすっかり晴れやかになり、時を移さず書類を整え、裁判所に古い債務証書を提示したのである。ところがアントウェルペン人にとって彼は、小間物を売りながらドイツの町町を行商して廻っている同郷人たちと同じ。彼らは至るところで愛想良く迎えられるが、売掛け金を回収しに行こうものなら、どこでも面も見たくないというあしらいを受ける。何人かは、昔の負債なぞ寝耳に水、と主張、あれは破産財団物[27]、法的には五分の配当できちんと処理済みなのであって、支払いを受けなかったのは債権者の責任だ、と言うのだった。ある者たちは、ブレーメンのメルヒオールという人は思い出せない、として、彼らのこれっぽっちも間違いの無い帳簿を広げたが、この未知の名を記した借り方欄は見当たらなかった。かと思うと、強烈な対抗請求を持ち出した連中もある。かくして三日も経たないうちにフランツは、父親への信用貸しを賠償せよ、と債務者拘留所[28]に収監される身となり、最後の一ヘラー[29]まで支払わなければそこから出ることまかりならぬ、と宣告された。

アントウェルペン人が彼の幸福を後押ししてくれるものと希望と信頼を託していたのに、今は美しい石鹸玉が壊れて消えたのを目の当たりにした青年にとって、これは感心できる局面ではなかった。自分の小舟が岸に乗り上げ、嵐からようやく免れたと思い込んだのに港の真ん中で座礁してしまった今となっては、この狭苦しい拘置所にいるのは煉獄の魂の苦しみに満ちた状態と同じ。メータに思いを馳せるたびに胸がきりきり痛む。自分が呑み込まれた渦巻きからいつか再び浮かび上がって、彼女に手を差し伸べる可能性などもはやこれっぽっちもありはしない。それに仮に彼がまた頭を水面から出せたとしても、彼女の方で彼を陸地に引っ張り上げることはできっこない。フランツは押し黙った絶望に陥り、この呵責から一気に逃れるため死んでしまいたい、という気持ちにしかなれなかった。そして

本当に飢死にしようと試みたのである。けれどもこれは、消化器官がもう役に立たなくなっていた衰弱しきったポンポニウス・アッティクス[30]以外だれの意のままにもならない死に方なのであって、強健な胃の腑はそう簡単に頭や心臓の意図に従わない。この死にたがり屋さんは二日間食事を止めたが、横暴な烈しい食欲が突然意思に対する支配権を奪取して、通常精神に付随する全ての行為を操作した。この食欲、手に向かって、皿に突っ込め、口には、食物を中へ入れろ、顎には、動け、と命令、自分自身は自発的に消化の通常の機能を遂行。かくして、二十と七歳だと事実英雄的なところがあるが、七十と七歳だとまるきりそんなことはないこの決意は固いパンの皮で挫折したわけ。

もともと無情なアントウェルペン人の本意は、表向き債務者に仕立てた青年から金を搾り取ることではなく、彼の申し立てた請求を換金可能と認めなかったので、鉦一文彼に支払わない、というに過ぎなかった。さて、ブレーメンの教会での代理祈禱が本当に天国の前庭まで到達したためか、債権者に成りすましている連中が荷厄介な賄付き下宿人の面倒を生涯見る気がなかったせいか、とにかく、三箇月過ぎた時フランツは、二十四時間以内に当市を立ち去り、アントウェルペンの土地に二度と足を踏み入れぬ、という条件で禁錮から解放された。同時に彼は、乗馬と荷物を差し押さえ、それを売り払った代金である収益から裁判費用と食費を良心的に清算した司法の誠実な手から、旅費として五グルデン[31]を受け取った。巡礼の杖を手にした彼は憂愁に満ちた心を抱いて、しばらく前に希望に高揚して乗り込んだこの豊かな都市をすっかり悄然として後にした。落胆しきって、これからどうしたものやら心も決まらず、と言うよりか何も考えぬまま、ふらふらと街中を歩き、たまたま選んだ街道がどこへ通じているのか気にも留めず、最寄りの門から外へ出た。彼は、人間の助けが必要になって、教会の尖塔とか、あるいはその他の人家のある印がありはしないか、と目を上げて見回すよう、疲労か餓えかが強要するまで、旅人に挨拶したり、宿を訊ねたりすることはなかった。何日も何日も彼はあてども無くめったやたらにさまよい歩いた。もっとも、隠れた本能がそれと気づか

れずに、彼の健脚のお蔭で、彼がいわば重苦しい夢から目覚め、自分がどの道中にいるのか気づいた時、故郷を目指す順路に導いてくれていたのであった。

彼は一瞬、前進すべきか、それとも引返すべきか、思案しようと立ち止まった。自分が物乞いとして、侮蔑の烙印を捺されて生まれ故郷の町を歩き回り、以前には富と繁栄でだれをも凌いでいた同胞の恵みを懇願しなければならない、と考えるたびに、羞恥と困惑が彼の心を満たすのだった。それに麗しのメータが心に自分を選んだことを恥ずかしがらせることなく、どうしてこんな格好をおめおめ晒せようか。こんな悲しい絵を完成させる暇を自分の想像力にあたえるのを止めて、もうブレーメンの高い市門を前にしていて、横丁の餓鬼どもがどっと集まって来て、嘲り囃し立てながら街中彼の跡を跟いて来るかのように、急いで踵を返した。彼は心を決めたのである。ネーデルラントのどこかの海港まで行き着いて、イスパニア船に水夫として乗り組もう、新世界に船出して、故郷には戻るまい、金の値打ちがよくよく分かる前にあんなに無頓着に投げ捨てた富を、黄金のペルーで再び手にするまでは、と。こうした新計画の立案に際しては、確かに麗しのメータは遠く背景に退いてしまい、どんなに鋭い千里眼にも遥か彼方に揺曳するぼんやりした影に過ぎなくなってしまうが、それでも放浪の計画者は彼女がこうして再び自分の人生計画に組み込まれたことに満足し、大股に歩き出した。こんな風に急げばそれだけ一層早く彼女に逢えると思い込んでいるかのように。

またもや彼はネーデルラントの国境に舞い戻り、日没頃ラインベルク[32]から遠からぬ、ルンメルスベルクという名の

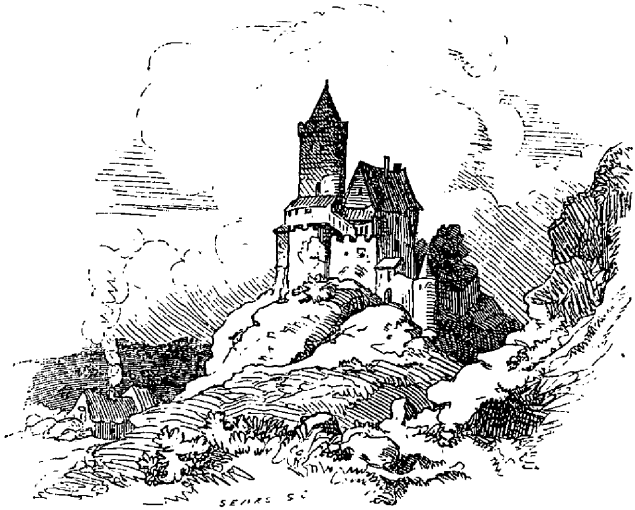
小さな村にやって来た。この村はその後三十年戦争[33]の間に完全に破壊されてしまった。レウク[34]の運送業者の一隊で既にここの旅籠（はたご）は一杯だった。そこで、旅籠の亭主には彼を泊める場所が無かったから、次の村へ行くように、と告げた。とりわけ、亭主の目下の放浪者観相学からすると、この青年に対して大いに信頼の念を起こす、というわけには行かなかったし、それに、レウクの運送貨物に下心を持つ盗賊の物見ではないか、と思われたので。フランツは疲労困憊（こんぱい）していたにも関わらず、巡礼行を続けるため身拵えをし、旅の荷物をまた背負わねばならなかった。

立ち去る折彼は、亭主の無情さについて幾言か痛烈な非難と呪詛をぶつぶつと吐き出したのだが、そのため亭主はこの余所者の境遇をいくらか気の毒に感じたと見え、戸口からこう呼びかけた。「聞きなされ、若い衆。言うておきたいことがある。もしあんさんがどうしてもこの村で休みたいちゅうなら、わしはあんじょう泊めてあげよう。あんさんに寂し過ぎなけりゃ、この村の丘の上にあるお城には空いてる部屋がたっぷりある。あそこには人が住んでいにゃあだし、鍵はわしが預かってるだでな」。フランツはこの申し出を喜んで受け、これは慈善行為だ、と褒め讃え、お城であれ、百姓の小屋であれ、ただ雨露を凌ぐ屋根と夕食さえあればいいのだ、と答えたもの。しかし実はこの亭主、飛んだ悪戯者で、余所者が小声で自分に対し二言三言罵り文句を口走ったのが癪に障ってたまらず、古い山塞に巣食っていて、住人を長年そこから追い出してしまった妖怪変化を使って、その仕返しをしてやろう、ともくろんだのであった。

城は村の近くの険しい巌山の上にあり、丁度旅籠の真向かいなので、街道と鱒の泳いでいる小さなせせらぎで隔てられているだけだった。絶好の場所にあるため、手入れは相変わらずきちんと行われており、家具調度のたぐいもことごとく備わっていて、持ち主は狩の館[35]として用い、しばしばここで一日中宴会を催すこともあった。けれども空に星が瞬（またた）き始めると、夜中に城内を暴れ回る騒霊（ポルターガイスト）[36]の狼藉（ろうぜき）を避けるために、従者共共逃げ出すのだった。というの

も、昼間幽霊が認められたことはなかったのである。領主にとって夜の化け物と城を共有するのは非常に不愉快だったが、盗賊除けには大いに安全ということを考慮すれば、幽霊はまことに有益だった。伯爵はこの上もなく大胆不敵な盗賊団さえ敬遠するこの夜のお化けほど忠実でよく見張ってくれる城番を雇うことはできなかったろう。そこで彼の財宝を保管しておくのに、ラインスベルク近郊のルンメルスブルク村なるこの古い山城より安全な場所はまたと無かった。

太陽が沈むと急に真っ暗な夜が始まった。その時フランツは片手に角灯（ランタン）を持ち城の脇門の前に辿り着いた。連れ立った宿の主人は籠に入れた食物を運んでおり、その他に一壜（びん）の葡萄酒もあった。これは主人の言うところでは、勘定に入れるつもりはにゃあだ、とのこと。これ以外に亭主は一対の燭台と二本の蠟燭を携えていた。なにしろ日暮れともなれば黄昏時よりも先までここに留まる者はいなかったから、城中探したって明かりも燭台もありはしなかったので。途中フランツはぎしぎし音を立てるずっしり詰め込んだ籠と蠟燭に気づき、要りもしないのに金を払わなければならないのか、と思ったので、こう口を切った。「宴会の時みたいなこんな贅沢で不要な物は何のためです。ぼくが寝床にひっくりかえるまでは、角灯の明かりで充分見える。そして目を覚ましたらお日様が高く上っているでしょうよ。だって、ぼくはとってもくたびれていて、ぐっすり眠りこけちまうもの」。「わしはあんさんに隠しておくつもりはにゃあ」と亭主は答える。「お城の中は妙な具合で、なんか幽的（ゆうてき）が棲んでるちゅう噂が広まってるだ。でも思い違いをしたらいけにゃあだよ。わしらは知ってのようにごおく近くにおるだで、万一なんぞおかしな目に遭うたら、わしらを呼ばったらええ。そしたらあんさんの加勢をするために奉公人と一緒に急いで駆けつけたる。下の家では夜っぴいて静かにはならにゃあら。で、だれかがずうっと起きてるちゅうわけ。これでわしは三十年からこの村に住んでるだけんど、それでも今まで何か見たなんて言えにゃあ。ときたま夜さりがたがたいう音がするけんど、あれは穀物



倉庫で猫や貂(てん)どもが騒いでいるだ。転ばぬ先の杖ちゅうつもりでわしはあんさんに明かりを用意した。なにせ夜が好きな人間はいにゃあし、この蠟燭は清められてるだから、もし何かがお城にいるなら、この光がきっと化け物を追っ払ってくれるずら」。

旅籠の主人が城の妖怪のことを何も知らない、と言ったのはまんざら嘘では無い。彼は夜は片足たりとも踏み込まぬよう用心していたし、昼間は亡霊は姿を見せないのだから。今だってこの悪戯者は境界を越えようとはしなかった。扉を開けると、彼は旅人に食料品の詰まった籠を手渡し、中のことを教えると、お休み、と言った。フランツは恐れ憚ること無く玄関の間に入り、幽霊話なぞ好い加減な駄法螺(だぼら)か、何か本当にあったことが誤って語り伝えられたので、そこから想像力が妙ちきりんな怪談をでっちあげたのだ、と思い込んだ。彼は勇敢な騎士エーバーハルト・ブロンクホルストに纏わる話を思い起こした。騎士の重い腕のことで彼は随分心配させられたのだが、にも関わらず騎士のもとで手厚いもてなしを愉しんだではないか。それゆえ彼は旅の経験からそんじょそこらの話から決まってその正反対を考えるようになっていたのであって、あの賢明な貴族の意見によればそんな中にも隠されているという一粒の真実を全く顧みなかった。

亭主の指示に従って、彼は石の螺旋階段を上がり、錠の下りた扉の前に来た。これを鍵で開く。跫音が反響する長い陰気な回廊が大きな広間に通じており、ここから脇扉で一連の部屋に入れるのだが、これらの部屋部屋にはどれも装飾と快適さのためにあらゆる家具が豊かにしつらえられていた。フランツはその中から一番居心地の良さそうな部屋を一つ寝室用に選んだ。ここにはふっくらと詰め物をした寝台があり、窓からは目の直下に旅籠が見え、そこで話されている言葉が一言一句聴き取れた。彼は蠟燭に火を点け、食膳を調えると、オタヘイティ[38]の貴族かなんぞのようにゆったりとくつろぎ、美味しく味わって食事をしたためた。胴の膨らんだ壜のお蔭で咽喉の渇きに苦しみもせぬ。歯がたっぷり仕事をしている間は、城に出るとか言う幽霊に思いをいたす暇は無かった。時時何かが遠くで動いて、臆病が彼に、お聴きよ、お聴き、さあ騒霊がやって来るぞ、と呼び掛けても、大胆が、ばかな、あれは噛み合ったり、取っ組み合ったりしている猫や貂さ、と答えたもの。けれども食後の腹ごなしの十五分になって、飢渇感という第六の官能がもう魂を支配しなくなると、魂は残りの五感のうち聴覚だけにその注意を向け、臆病は、大胆がそれに答える前に、ひっきりなしに三つの不安な考えを聴き手の耳に囁くようになった。

フランツは手始めに扉に錠を下ろし、夜の門を挿し、弓なりの窓の縁[39]という壁に囲まれた場所に撤退した。彼は窓を開き、何かで気を紛らわそうと星空を眺め、痘痕面の月に見入り、星がどれくらい瞬いているか数えた。目の下の街道はがらんと人気が無く、旅籠の夜の賑わいを自慢にされたのに、扉は閉ざされ灯火は消え、家の中は地下納骨堂さながら静まり返っていた。尤も夜警が角笛を吹き鳴らし、決まり文句の「さあ、皆の衆」を村中に響き渡らせ、フランツがおしゃべりをしかけようと思えば簡単にできるほど、窓の真下で甲高い夕べの歌[40]を朗唱し始め、まだちかちか輝く星星に目を据えていた怯えた天体観測者の気休めになった。実際彼は仲間欲しやなものだから、夜警が話に乗ってくれるかも、と推測できれば、喜んでそうしたことだろう。

蜂の巣箱のようにぶんぶん唸っている人口稠密（ちゅうみつ）な街の無数の群集の真っ只中だと、孤独について思索し、これを人間精神の最も好ましい相手と見做し、その有益な側面の数数を引き出し、これを味わいたいと渇望することは、思想家にとって快適な気分転換になるかも知れない。[41] しかし孤独が棲みついているところ、難船を免れた独りぼっちの隠者が長い歳月をこれと一緒に過ごしているファン・フェルナンデス島[42]とか、ぞっとするような夜の深い森の中とか、あるいはまた、荒廃した城壁や丸天井が戦慄を呼び起こし、崩れた塔の中では悲しげに啼く梟（ふくろう）以外には何一つ生命の息づかぬ無人の古城とか、そういう場所だと、全くの話、そこで一夜を過ごすびくびくした世捨て人（アナコレート）[43]にとって極めて愉快なお仲間とは言えぬ。特にいつ何時騒霊が出現するか覚悟していなくてはならない場合にはなおさら。夜警との窓からのおしゃべりが、この上もなく魅力的な孤独の頌（ほ）め歌に読み耽（ふけ）るより、精神と心には優れた楽しみを与えてくれただろう、とは容易に断言できる。もしツィンマーマン氏が我がフランツの代わりにヴェストファーレンの国境にあるルンメルスブルク城にいたとしたら、疑いもなく彼はこうした状況にあって、きっとそうだと思うのだが、煩わしい社交（アッサンブレー）の集いのせいで心底から孤独の賛美者になろうという気になったのと全く同様に、友垣との団欒（だんらん）についての興味深い著作の基本構想を引き出したことであろう。

真夜中というのは、粗野な動物的性情が深いまどろみの中に埋葬され、知的な世界が生命と活気を獲得する刻限である。だからこそフランツはこの思索の時間に目を覚まし続けるより、眠って過ごしたい、と思った。そこで彼は窓を閉め、もう一度部屋の中を歩き回って、怪しげな気配は無いか検分するため隅隅角角を覗き込むと、もっと明るく燃えるように蠟燭の芯を切り、[44] それから急いで寝台に転がったが、この寝床、疲れきった体にはこよなく柔らかい。にも関わらず、願ったほど早くは眠りに就けなかった。昼間の暑さで血がたぎっているせいにしたのだが、心臓がちょっとどきどきしてしばらくの間寝つけない。そこで彼はこの暇を利用して、もう何年にも唱えたことの無かった夕

べの祈りを唱えることにした。これは当然の効能を発揮して、唱えているうちすやすや眠りに落ちた。ところが、彼が思うに一時間ほど経った頃、突然何かどきっとして目が覚めたのである。こういうことは血が騒いでいる場合なにも異常なことではない。お蔭で彼は目が冴えてしまい、辺りが静まり返っているかどうか耳を欹てた。すると聞こえたのは折しも十二時を打つ鐘の音だけ。その後すぐに夜警が大きく朗唱してこれを村中に告げた。フランツはまだ暫く横に寝ながら片方の耳を澄ましていたが、やがてまたまさに寝入ろうとした時、遠くで扉がぎいと軋んだような気がした。その直後その扉は鈍い音を立てて閉まった。ああ、怖いよ、怖い、あれはきっと例の騒霊だよ、と臆病が彼の耳に囁けば、あれは風のせい、それだけのこと、と大胆がとりなす。けれどもずしりずしりという男の跫音が、近くに、ますます近くに寄って来るのだ。時時がちゃがちゃ音がして、まるで罪人が重い鎖を鳴らしているか、門番が鍵束を携えて城の中を歩き回っているかのよう。風の悪戯なんかじゃ無かった。大胆は黙り込み、怯えた臆病が血液をことごとく心臓に駆り立てたので、鍛冶屋の槌さながらどんどんどん。

さあ、事は冗談では済まなくなった。もし臆病が大胆にもう一度発言させたとしたら、後者は怖がり屋さんに旅籠の亭主と取り交わした後ろ盾条約を想い出させ、協定済みの支援を窓から大声で請求するよう励ましたことだろう。しかし決心はつかぬまま。びくびく怯えるフランツは、臆病者の最後の防壁である敷布団に逃げ場を求め、駝鳥が狩人からもう逃げられないとなった時ちっぽけな茂みの後ろに隠れるように、褥を頭の上に厚く載せた。

部屋の外では何者かが轟音を立てて扉を開いたり閉めたりしていたが、とうとうこの寝室にやって来た。その何者かは錠をせわしなくひねくり回し、たくさんの鍵を試していたが、やがて合うのを発見。けれども閂がまだ扉を固く閉じている。が、そのうち落雷のような凄まじい一撃で扉は開き、鋲も閂も吹き飛んだ。入って来たのは背のひょろ長い、痩せ衰えた男で、黒髯を生やし、古風な装束で容貌は陰鬱、眉は深刻に額から下がっていた。左の肩に猩猩緋の外套を纏い、頭に被っているのは尖った鍔付き帽。彼は重々しい足取りで黙りこくって三度部屋を往復し、聖別された蠟燭をじっと眺めると、もっと明るくなるように芯を切った。それから外套をかなぐり捨て、その下に隠していた理髪嚢の紐を解き、床屋道具を並べ、腰帯に下げていた幅の広い革砥[45]で素早くピカピカ光る剃刀を砥いだ。

フランツは敷布団の下でひどい冷や汗を流し、聖処女の庇護に身を委ね、このやり口がどういうことなのかどきどきしながら考えたが、目当てが喉頸なのか、それとも髯なのか見当が付かない。でも、ほっとしたことに、幽霊は銀の壜から銀の水盤に水を注ぎ、骨と皮ばかりの手で石鹸を軽く泡立て、椅子を一つきちんと直すと、厳かな身振りで、びくびくと様子を窺っている青年に隠れ場所から出て来るよう合図した。

この意味ありげな合図は、トルコ皇帝が流刑に処されている大臣に、死の天使であるカプジ・バシ[46]を絹の紐[47]とともに遣わして、その首級を要求する場合、峻厳な勅命に背けないのと同様、抗告を許さないものだった。こういう危なっかしい状況で取るべき最も分別のある態度は、仕方の無いことには譲歩し、厭な目に遭っても泰然と構え、冷静

に落ち着き払って、悠然と長い物に巻かれることである。フランツは指図に恐れ畏(かしこ)んで従った。褥が上がり始め、彼は急いで寝台から飛び起き、指し示された床几の上に座った。極限の恐慌から果敢この上も無い決意へのこうした急速な移行は不思議に思えるかも知れないが、それでもかの心理学の雑誌(ジュルナール)[48]はこうした現象をごく自然なものとして我我に説明しうるであろう。

幽霊理髪師は震えているお客様にさっと髭剃り布を掛け、櫛と鋏を手に取ると、髪と髯を刈り込んだ。それから、先ず髯に、次いで眉毛、最後に側頭部、頭頂部、後頭部と上手に石鹸を塗りつけると、喉頸から襟元まで、まるで髑髏(しゃれこうべ)のようにつるつるすべすべに剃り上げた。この作業が終了すると、理髪師はフランツの頭を洗い、綺麗に拭き乾かし、お辞儀をして、理髪嚢の紐を結び、猩猩緋の外套に身を包み、帰り支度に取り掛かった。清められた蠟燭はこの一部始終の間殊の外明るく燃えていたので、フランツはその光のお蔭で床屋が自分を中国の仏塔(パゴタ)みたいな姿に変えてしまったのを鏡の中に見た。彼は綺麗な褐色の巻き毛の喪失を心から遺憾に思ったが、この犠牲で何もかも済んで、幽霊はそれ以上彼をどうともしないことに気づいたので、再びほっと息をついた次第である。

実際事態はその通りで、赤外套は来た時と同様黙りこくって、辞去の挨拶もせず、扉へと向かい、饒舌なご同業の衆とは正反対の有様だった。けれどもやおら三歩後戻りをすると、しんとたたずみ、自分がきちんと手入れをしてやったお客を悲しげな面持ちで振り返り、掌でその黒髯を撫でたのである。全く同じことをもう一度、それからまさに扉から出ようとした時更にもう一度やった。そこでフランツは、妖怪が何かして欲しがっているな、と悟らされ、次いで、幾つもの考えがぱぱっと結びつき、こりゃもしかすると幽霊は先刻自分にしたのと同じ奉仕をしてもらいたがっているのじゃないかな、と思いついた。これは図星だったのであって、その点、領地管理官(アムトマン)[49]が罪人を審問するように、その名も高いブラウンシュヴァイクの亡霊[50]を取り調べたのに、こやつがその濫(みだ)りな出現によってそもそも何を主

張したいのか白状させるに至らなかった、今は故人の見霊者エーダー[51]より幸運だった。

幽霊は、その憂愁に満ちた顔にも関わらず、真面目くさっているよりもおちゃらけたい気分なようで、先刻お客に悪ふざけをしたのだが、乱暴な所業に及んだわけでは無いので、こちらはもうほとんど怖くはない。そこでフランツはあえて試してみることにして、自分が今しがた離れたばかりの床几に腰を下すよう、幽霊に合図した。幽霊は即座に従い、赤外套を脱ぎ捨て、卓上に床屋道具を並べ、椅子に座って、髯をさっぱりしてもらいたがっている人間の姿勢を取った。フランツは、さっき幽霊が自分に関して行ったのと同じ処置を執行、髯を鋏で短く切り、髪を刈り、首全体に石鹸を塗ったが、幽霊は頭巾掛け[52]同様おとなしくしている。不器用な若者は、これまで一度も剃刀なんか手にしたことが無かったことだし、手際がまずく、髯を毛並みとは逆に剃ったので、幽霊はエラスムス[53]の猿公が飼い主が髭剃りするのを真似た時と全く同様、なんとも奇妙奇天烈な顰め面をした。こうされてはいかに未熟な半端職人でもやはりおもしろくなかったから、彼は一度ならず、縄張り外にでしゃばるな、というあの含蓄のある金言を想い起した。そうこうするうち彼はなんとか急場を切り抜け、幽霊を自分同様つるつるに剃り上げた。

これまでのところ、幽霊と旅人との場面は身振り狂言で進行していたが、これから筋は戯曲的になった。「余所のおかた」と幽霊が愛想の良い物腰で口を切る。「手前にしてくだされた奉仕に御礼申し上げる。そなたのお蔭で手前を三百年間この壁の中に閉じ込めていた長い囚獄生活からようやく解放されましたのじゃ。手前の亡魂はある悪業のゆえにこうなるよう呪われておりました。だれか人の子が報復権を行使して、手前が生前他人にしたのと同じことをやってくれるまでの。

まあ、聴いてくだされ。昔ここに、僧俗をからかってばかりいる非道な僭上者が住んでおりました。ハルトマン伯爵というのがその名じゃったが、人間嫌いで、掟も君主も認めおらず、思い上がった悪ふざけやら嘲弄やらに明け

暮れ、客人権の神聖さを冒瀆しよりました。この城に入った余所者やお恵みを乞うた貧民には、悪事を働かずことなしには手から逃さぬ始末。手前は城付きの理髪師で阿諛追従[54]を事とし、伯爵の言うがままでした。通りすがりの信心深い巡礼を甘言で城に誘い込み、風呂の支度をしてやり、相手が良く世話をしてもらったと思い込んだところで、つるつるすべすべに剃ってしまい、嘲り笑って追い出したこと数多たび。ハルトマン伯爵はこれを窓から眺め、村から蝮の子らとも言うべき餓鬼どもが群がって来て、ひどい目に遭った人を嗤い者にし、昔生意気な童たちの一団があの預言者[55]に向かって叫んだように、禿げ頭、禿げ頭、と罵るのを、ほくそえんで見物したのでした。この他人の惨めさを喜ぶ男はこれを楽しみ、太鼓腹を抱えて、眼から涙を流しながら、悪魔のようにげらげら笑ったものです。

ある時遠くの土地から一人の聖人がやって

来ました。贖罪者のように肩に重い十字架を担ぎ、両手、両足、それから脇腹に五つの釘の跡が瘢痕になっていました。これは信心のせいでした。[56]頭には髪の毛があの茨の冠同様の冠の形になっておりましたのじゃ。この人はここで話しかけ、洗足の水と一切れのパンを求めました。手前はいつも通りの遣り口で奉仕しようと急いで風呂に入れ、聖なる剃髪部[57]に敬意を払わず、冠をすっかり頭から剃り落としてしまったのです。すると敬虔な巡礼は手前に恐ろしい呪いを掛けました。『よいか、呪われし者よ、天国も地獄も煉獄の堅固な門も死後そのほうの哀れな魂には閉ざされるであろう。そのほうの魂は悪霊となって末永くこの城の壁の中で荒れ狂うのだ。要求も命令もされずにだれか旅人がそのほうに報復権を行使するまではな』と。

その時から手前は虚弱になり、四肢の骨髄が涸れ果て、影さながらに衰えましたじゃ。霊魂が痩せ衰えた亡骸から離れると、あの聖人から命じられた通り、この場所に呪封されたままになりました。手前は自分をこの地上に繋いでいる苦痛に満ちた桎梏からの救済を待ち望みましたが無駄でした。というのも、よろしいかの、魂が肉体から訣別すると、これは安息の場所を求める、そして魂が本来の居場所でないところで苦しんでいる限り、この熱烈な憧れのため、歳月は永劫何回[58]にもなりますのじゃ。自身何とも辛い責め苦でしたが、手前は生前やっていた悲しい仕事を続けました。おお、間もなく手前が騒ぎ回るせいでこの館は荒廃しました。巡礼がここに宿りに来ることは滅多にありませんでした。手前は皆にそなたにやって見せたのと同じ身振りをしたのですが、これを理解して、手前の亡魂をこの奴隷状態から解き放ってくれる奉仕をそなたのようにしてくれようという者はだれ一人おらなかったのですじゃ。自今騒霊がこの城に出ることはございますまい。手前はこれから永らく待ち望んでいた安らかな眠りの床に就きますのでな。さて、お若い余所のお方、手前を救済してくださったことにもう一度感謝いたしまする。もし手前が深く隠された財宝の番人であれば、悉皆そなたに差し上げるのじゃが。したが、生前手前の運勢は富と縁がありませんでした

ので、この城に宝は埋まっておりませぬ。けれども一つ忠言をお聞きなされ。髯と髪がまた顎と頭を覆うまでここに滞在し、それから生まれ故郷の市へ戻られい。そしてヴェーザー河に架かる橋の上で、秋の昼と夜が等しくなる日に、そなたに出逢う友を待ちなさることじゃ。この御仁が教えてくれるじゃろう。どうすればそなたがこの世で幸せになれるかをのう。で、豊饒の黄金の角から[59]祝福と繁栄がそなたに流れ出したら、手前のことを心に銘記して、そなたが手前を呪いから解き放ってくだされたこの日が来るたびに、手前の魂の安息のためにそのつど三度ミサを挙げて戴きたいのじゃ。ではご機嫌よろしゅう、これでお別れですじゃ」。

縷縷とおしゃべりをしてルンメルスブルク城における宮廷の召使としてのかつての生活ぶりをたっぷり語り聞かせた幽霊[60]は、こう告げるなり姿を消し、この変てこな冒険にすっかり訳が分からなくなっている解放者を後に残した。フランツは長いこと凝然と立ち尽くし、この顚末が本当にあったのやら、重苦しい夢に謀られたのやら、なんともはっきりしなかった。けれどもつるつるに剃られた頸から上ですぐさまこれは実際あったことと納得させられた。それから彼はすぐさま横になって休み、怖いことを遣り過ごしたので、真昼間までぐっすり寝込んだ。騙し屋の旅籠の亭主は、旅人がつるつるに剃られた姿で現れるのを、上辺はこの夜の椿事に仰天した風情で、内実は嘲り笑って迎えてやろう、ともう朝早くから待ち構えていた。ところが出て来るのが愚図愚図し過ぎるし、もう正午が間近だというわけで、幽霊があの余所者の客人に何か穏やかならざる所業におよび、くびり殺したとか、あるいは、突拍子も無く怖がらせたので若者は驚愕のあまり頓死してしまったのではないか、と不安になり始めた。だとしたら、自分の気儘な意趣返しはやり過ぎもいいところなわけで、これはしかし彼の本意では無かったのである。亭主は鈴を鳴らして奉公人たちを呼び集め、下男下女を引き連れて大急ぎで城砦に向かい、昨夜明かりが見えた部屋の前へとやって来た。見知らぬ鍵が扉に挿さっているのを発見。しかし扉は中から閂が下りている。というのも来客がいなくなってからフ

ランツはまた戸締りをしたのである。亭主は心配でたまらず烈しく扉を叩いたので、七人の眠れる聖人たち[61]だってこの大音響で起き上がったことだろう。フランツははっきり目を覚まし、最初は狼狽して、幽霊がまた扉の外に来て、もう一度訪問しようとしているのか、と考えた。しかし、ひたすら自分の泊り客が生きている徴を見せて欲しい、とただそれだけを懇願している旅籠の主人の声を聞き分けたので、威勢良く起き上がると、部屋の扉を開けた。

亭主はびっくり仰天した態をつくろって両手を打ち合わせた。「神様とあらゆる聖者様の御名(みな)に掛けて。赤外套がここさ出たんずら（かの幽霊は土地の住民たちにこの名で知られていたのである）、それであんさんの頭をつるつるに剃ってしまったんずら。昔からの言い伝えがお伽話じゃにゃあちゅうことが、これではっきり分かったで。だけんど、わしに話してくんにゃあらか。あの騒霊はどんな格好だっただ。で、どんなことをしゃべくっただ。それから何をやらかしたずら」。質問する相手を完全に観察し尽していたフランツはこう答えた。「幽霊は赤外套を着た男の姿だったし、あれがやったことはご覧の通りですよ。で、何を言ったかはよおく覚えています。『余所のおかた』と幽霊は申しましたよ。『旅籠の亭主の言うことを信用しなさるな。良からぬわるさを企む御仁だでの。そなたの身に起こったことは、あの男、よくよく承知だったのじゃ。では、ご機嫌よう、さらばじゃ。わしは長居をしたこの場所から立ち去る。なにせわしの年季が明けたでな。自今ここに騒霊はもはや出没せぬじゃろう。わしはこれから静かな夢魔(アルプ)[62]になって、宿の主人をしたたかに責め苛(さいな)み、つねり、締め付け、押し潰してやるつもりじゃ。あれが己(おのれ)の所業を後悔して、そなたの頭に再び褐色の巻き毛がくるくると生え揃うまで、雨露凌ぐ屋根と無料の食事を提供しなければな』とね」。

宿屋の主人はこう聞かされて震え上がり、胸の前で大きく十字を切ると、聖処女の御名に掛けて、この冒険家が自分のところに滞在を望む限り旅籠賃を只にする、と誓い、相手を宿に連れて行き、精一杯世話を焼いた。この余所者

はすぐさま悪霊祓い師だと評判になった。なにせこの時からもう幽霊は姿を見せなかったのでね。彼はしばしば古城で夜を過ごした。村のある向こう見ずが勇気を出してフランツにおつきあいしたことがあるが、つるつる頭に剃られずに済んだ。領主は、恐ろしい赤外套がもうルンメルスブルクに出ない、と聞き及んだので、大層これを喜び、思うに魔物を祓ってくれたのだから、というわけで、その余所者を十二分にもてなすように、と申し付けた。

葡萄(ぶどう)が色づき、近づく秋が樹樹の林檎を紅く染める頃、褐色の巻き毛がまたくるくると縮れるようになったので、旅人は旅支度を調えた。夜の理髪師の約束通り、どうすれば運勢が開けるか教えてくれるという友だちを見つけようと、気持ちも考えもひたすらヴェーザー河に架かる橋に集中。旅籠の主人に別れを告げると、こちらは鞍と馬具を装備した馬を一頭厩から引き出して来た。これは領主が、自分の城を再び人が住めるようにしてくれた礼心から 鼻(はなむけ) にしたもの。それからまた、領主は充分な路銀も届けてくれたのである。そこでフランツは敏速かつ意気揚揚と、一年前に出発した生まれ故郷の市に向かって駒を進めて行き着いた。彼は狭い小路の元の宿を探し出したが、ごく静かに引き籠って暮らし、

ひそかに調べたのは、麗しのメータがどうしているか、無事息災か、まだ未婚でいるか、ということだけ。この問いに満足の行く答えを授かったので、差し当たってはそれで満足した。だって、運命の決着がつきもしないのに、彼女の前に姿を現すとか、自分がブレーメンに帰りついたことを彼女に悟らせるなんて、あえてしたくはなかったもの。

原注

（1）もしマックス皇帝が……嫁さんを攫（さら）われはらへんかったら　ブルターニュのアンナ Anna von Bretagne のこと。

（2）軽快帆船（カラヴェル）(63)　アメリカ大陸へ航行するイスパニアの船はかつてこう呼ばれていた。

訳注

（1）アントウェルペン Antwerpen.　日本では英語読みのアントワープが一般。フラマン語ではアントウェルペン、オランダ語・ドイツ語ではアントヴェルペン、フランス語ではアンヴェルスまたはアンヴェル。十七世紀まではアントルフと呼ばれていた。現在ベルギー王国有数の都市。住民の大多数はゲルマン系のフラマン人。航洋船の航行可能なスヘルデ河右岸、河口から八八キロ上流に位置する。木造帆船時代、このような淡水港は極めて価値が高かった。航洋船は銅板を船底に貼り付けても海産二枚貝船喰虫の侵食に悩まされるが、淡水港に繋留中はその被害が進行することは無いし、一、二ヶ月放置すれば船喰虫は自然に落ちてしまうからである。ちなみにこうした利点に恵まれた淡水港であることはブレーメンも同じ。アントウェルペンは現在ベルギー、西部ドイツ、およびヨーロッパの最も重要な海港の一つである。既に七世紀に言及されており、ドイツとの中継貿易の中心地、一四六〇年に創立された手形交換所の設置地として、カール五世〔神聖ローマ帝国皇帝・イスパニア国王。在位一五一六―五六年。イスパニア国王としてはカルロス一世〕の時代には西欧で最も豊かな商工業都市であった。

（2）ブラバント Brabant.　ネーデルラント・ベルギー低地の中央部。つまり現在のオランダ王国とベルギー王国にまたがる地方。ブルグント（ブルゴーニュ）大公国〔一三九〇年以降〕、ハプスブルク家〔一四八二年以降〕の支配下にあって、ブラバント地方は長いことネーデルラント〔現在のオランダ・ベルギー一帯〕の工業・商業・文化の中心地として繁栄した。

（3）皇帝マクシミリアン Kaiser Maximilian.　神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世（一四五九―一五一九）。在位一四九三―一五一九年。

（4）平和令　マクシミリアン一世は一四九五年ヴォルムス帝国議会において帝国等族全ての賛同により永久平和令を公布させた。これは帝国領内のいかなる私闘をも永久に禁止するものであった。これら諸改革は勿論すぐに崩壊し、平和令は帝国議会決議でしょっちゅう改めて提案し直

されねばならなかった。

(5) ヴェストファーレン Westfalen.　ドイツ北西地方。現在ノルトライン・ヴェストファーレン州の一部。フランツはブレーメンからニーダー・ザクセンを通って南西の方角に駒を進め、ヴェストファーレンを横切り、ネーデルラントに入ろうとしている。

(6) 浮浪人　正確には、法律の保護を奪われた被追放者。直訳すると「侮蔑されし者」。

(7) 「我を憐れみたまえ」　ラテン語旧約聖書詩篇第五十一篇冒頭の句 Miserere mei, Deus（主よ、我を憐れたまえ）から。また、第五十一篇はカトリック教会で聖歌として歌われるが、その聖歌を指す。

(8) 嘆き節（ラメント）　哀歌、悲歌。

(9) 救護騎士修道会　十字軍による支配がおこなわれていた「聖地」パレスティナで専ら活動していた当時、いわゆる救護騎士修道会、とりわけ聖ヨハネ騎士修道会やドイツ騎士修道会の成員は、エルサレムのキリストの墓（「聖墓」）に参拝するため巡礼している人人をだれでも手厚くもてなした。

(10) 胴着（クヴェット）　十四、十五世紀にヨーロッパの男子が着用したぴったり体に合った上着。

(11) ショッペン　葡萄酒や麦酒の液量単位。昔は二分の一リッター。現在は四分の一リッター。

(12) 棒打ち刑（バストナーデ）　〔特に足の裏に加える〕棒打ちの刑。イスラーム圏でおこなわれた。

(13) 車裂きの刑　もっぱら殺人罪に問われた男性に執行された最も恥ずべき不名誉な刑罰。ゲルマン古代から十八世紀まで適用された。罪人は両腕両脛を拡げた格好で地面に横たえられ、両手両足を短い杭に固縛され、四肢と胴体の下には横木が差し込まれる。従って全身が完全に地面から浮き上がることになる。死刑執行人は車輪を両手に持ち、これで罪人の四肢と背骨をことごとく突き潰す。突く回数は判決に規定されている。次いで、瀕死の、あるいは死んだ罪人はその車輪の輻に編み込まれる。つまり、四肢が輻の上に一回、下に一回来るようにされる。最後に車輪は柱か絞首架の上に水平に置かれる。刑執行の際まず脛が砕かれ、次いで腕その他が砕かれる場合、死は非常に緩慢に訪れるので、罪人が車輪に編み込まれる時ですらまだ生きていることがしばしばだった。それゆえ車輪の第一撃が頭に対して行われるのが慈悲の徴とされた。処刑のたびに新しい車輪が用いられた。これには九本か十本の輻が無ければならなかった。なお「車裂き」という訳語はこれまでの慣例に従ったが、「車折り」ないし「車砕き」とでもした方が適切と思う。

(14) 皇帝　神聖ローマ帝国皇帝。次の事項から察するに、マクシミリアン一世かカール五世に擬せられるが、「若い頃から」とあるので、ムゼーウスは前者を想定しているのであろう。それでも十五世紀末という時代設定では大分ずれが生じる。

(15) ゲオルク・フォン・フロンスベルク Georg von Fronsberg.　名うてのドイツの傭兵隊長（一四七三―一五二八）。マクシミリアン一世、カール五世の数数の戦役においてヴェネツィア共和国攻撃の部隊を率いた。「勇猛果敢」というのは、多分ヴィチェンツァの戦い（一五一三年）に

おける彼の勝利を回想しているか。

(16) 小旗部隊（フェーンライン）　傭兵隊長が指揮する連隊（レギメント）〔定員が充足していれば、の話であるが、現代の連隊より兵員数は遥かに大きい〕を構成する一〇―一六個の部隊で、兵士四〇〇（三〇〇―六〇〇との説明もある）から成る。部隊長は傭兵隊長が任命する。もとより老練・剛勇な点を買われるわけである。

なお、ドイツの傭兵（ランツクネヒト）については「急の巻」の訳注7で詳しく記した。

(17) ステントール Stentor.『イーリアス』に登場する声の大きい布告役（ふれ）。五十人に匹敵する声量の持ち主だった、という。

(18) パシャ　オスマントルコ帝国の文武高官の称号。ムゼーウスは「バッサ」Bassa と記している。

(19) 食事用葡萄酒　食事の際飲む辛口で軽い葡萄酒。近世に至るまでヨーロッパ人の好みは豊潤で蜜のようにとろりと甘い南国で採れる濃厚な葡萄酒だった。従って前者は、当時の酒に一家言ある者には軽視される。ギリシャのマルヴォアジー、さてはポルトガルのマディラなどのようにこってりしたのを、食後であれ、食中であれ、麦酒のように大杯でがぶ飲みするという酒の飲み方は、今日の感覚からすればあまりぞっとしないが。

(20) 台付き大盃（ヴイルコンメン）　歓迎（ヴイルコンメン）の際に用いられる大きな酒杯。

(21) 秘蔵の酒樽（ムスケフ）　直訳すれば「母の樽」。取って置きの極上酒を入れた樽。母親が秘蔵子に極上品を与えるところから。

(22) 車陣　古代・中世で荷車をぐるりと並べ、防御用の陣営としたもの。たとえばニコライ・ヴァシリーエヴィッチ・ゴーゴリの中編歴史小説『タラース・ブーリバ』（一八三五年）では、ポーランド騎兵と戦うウクライナのザポロージェ・カザークの合戦場面に出て来る。

(23) 食事用小刀（トランショアール）　トランショアールは食事用の（四角い）木皿〔これは元来木片に過ぎなかったわけである。平たいパンの上に料理が置かれたこともある。肉汁を吸い込んだパンは施しを求める物乞いや貧民に頒け与えられた〕。あるいは、そうした木皿に盛られた料理。

(24) ダンツィガー　多分ダンツィガー・ゴルトヴァッサー（ダンツィヒ黄金水）＝ダンツィガー・ラックス（ダンツィヒ鮭）であろう。それなら、十八世紀当時東プロイセンに属していた港湾都市ダンツィヒ（現在ポーランド北部のグダニスク。ここでヴィスワ河（ドイツ語でヴァイクセル河）がバルト海に流入している）産の甘く強いリキュール。オレンジ、レモンの皮、茴香（ういきょう）、胡荽（コリアンダー）、肉豆蔻（にくずく）、小豆蔻（しょうずく）などの実、肉桂（にっけい）の樹皮で香味をつけたもの。近代のそれは無色で金箔片が混入されているが、往古のそれはただ黄色なだけだったようだ。三十年戦争時代を背景としたグリンメルスハウゼン『阿呆物語』Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen : Der abenteuerliche Simplicissimus (1669) の記述（第三巻第九章冒頭）でそう類推される。北国では、朝にこうした強い酒を少量飲んで英気を養う風習があった。なお、十五世紀末にはダンツィヒは自らの意思でポーランドに属し（一四五〇年来）、多大な自由を保持しつつ、ポーランドの外国貿易を独占、大いに繁栄していた。

(25) 嫁さん　フランス王シャルル八世（一四七〇―九八）は一四九一年暮れアンヌ・ド・ブルターニュとの婚姻によりブルターニュ公国を獲得

する。アンヌは当時十四歳、ブルターニュ公フランソア二世の長女で、父の死後フランス北東部の辺境ではあるが独立国だった公領を相続していた。この結婚により公国の独立は事実上終焉を迎え、アンヌの死後フランス王国に正式に併合される。アンヌは神聖ローマ帝国皇太子マクシミリアンの許嫁だったのだが、フランス王権はブルターニュを虎視眈眈と狙って執拗な交渉を継続していたのである。確かに公領が編入されたことにより、フランス王領から成るフランスの国土統一がほぼ成就するのである。なお、マクシミリアンは一四九三年八月父フリードリヒ三世の跡を襲って神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世となる。これもムゼーウスがこの物語の時代背景としていつごろを考えていたかの材料になろう。

(26) 分散仕舞　江戸時代の法律用語で「破産」のこと。債務者が債権者全てに一定の割合で財産を「分散する」ところから。ムゼーウスの用いている bonis zedieren なる動詞が由来する名詞 Zedobonis はやはり古い法律用語なので、この語を当てて見た。「財産譲渡」としてもよいが。

(27) 破産財団　破産手続き上、総債権者に配当金として平等弁済するため、債務者の財産が委託され、選任された破産管財人によって管理される組織。

(28) 債務者拘留所　債務を弁済できないために逮捕された負債者が入獄前に収容される施設。英語の sponging〔spunging とも綴る〕house に相当するか。スパンジング・ハウスに拘留するのは、債務者に債務があることについて注意を喚起する手段に過ぎない。監獄収監とは異なるのである。債務者でないことが証明されるか、債務者であると証明されても債務を完済した場合は、拘留を解かれる。完済できない場合は、監獄で三箇月過ごした後、債権者に財産を譲渡することに同意すれば出所できる。

(29) ヘラー　一二七六年帝国直属都市シュヴェービッシュ・ハル〔現在バーデン・ヴュルテンベルク州〕で初めて鋳造されたプフェニヒ銀貨。まもなく南ドイツ、東ドイツにも拡がる。包含する銀の総量は次第に低下、十五世紀の最初の四半期にはおおむねヘラー二枚で一プフェニヒに相当するということになった。後に一ライヒスターラー〔一五六六年から十八世紀まで主としてドイツで用いられた銀貨〕はおおむね五七六ヘラーに相当した。これではもう銀貨ではなく銅貨である。従ってこの物語の時代でも既にヘラー貨は極めて価値の低い硬貨だった。もとよりここでは、実際のヘラーではなく、「最後の一文まで」くらいの意味。

(30) ポンポニウス・アッティクス Pomponius Attikus.　ローマの騎士階級の人ティトゥス・ポンポニウス（紀元前一〇九―三二）。アテネに長年滞在していたので、「アッティカ（アテネに帰属する中部ギリシャ地方の名）の」という添え名を付けられた。キケロの莫逆の友。近づく死を早めるため食事を摂らなかった。

(31) グルデン　十七世紀中葉以降は銀貨。それ以前となると金貨で、最初はフィレンツェで鋳造され、フィレンツェの紋章である百合が刻印されていたのでフローリン（花貨幣）と呼ばれた。けれども、裁判所が金貨五枚分の金額を返してよこした、とは思えないから、ムゼーウスはグルデン銀貨のつもりだったのであろう。一グルデンは最初六〇クロイツァーだったが、後に一〇〇クロイツァー。

(32) ラインベルク Rheinberg. デュイスブルク（現在ノルトライン＝ヴェストファーレン州の工業都市。いわゆるルール工業地帯の中心。ルール河とライン河の合流地点に位するヨーロッパ最大の内陸港）の北方、直線距離で約二〇キロにある。下（ニーダー）ラインから三キロほどしか離れていない。その下ラインはほどなくオランダに入る。人口の多いルール工業地帯から一変して、この辺は現代でも人影の少ない広野であり、中小の町村が点在するに過ぎない。

(33) 三十年戦争　ドイツを主戦場として三十年間（一六一八―四八年）荒れ狂った内戦。もっとも、イスパニア、ネーデルラント諸州、スウェーデン、フランスなど外国軍も介入したので、ヨーロッパ戦争という性格も帯びた。キリスト教の面で言えば、この戦争は反宗教改革によって惹起された。つまりトリエントの公会議のあと新たに組織されたカトリック教会が、従来の独占支配体制を取り戻そうと試みたのである。更にまた解決の必要なもろもろの政治的対立の存在も原因だった。一六一八年ボヘミアの首都プラハに起こった新教徒貴族の神聖ローマ帝国皇帝フェルディナント二世に対する反乱に端を発するボヘミア戦争（一六一八―二〇）に始まり、プファルツ戦争（一六二一―二四）、デンマーク・ニーダーザクセン戦争（一六二四―三〇）、スウェーデン戦争（一六三〇―三六）、スウェーデン・フランス戦争（一六三六―四八）と続いて、いわゆる「ヴェストファリアの和約」（ヴェストファーレン地方の二都市、ミュンスターとオスナブリュックに分かれ、三年にも亘り、列強の間で交渉されていたが、一六四八年十一月三日和議成立）で終焉を迎える。ドイツをカトリックで統一しようとした神聖ローマ帝国皇帝の意図は完全に打破され、ドイツの各領邦には完全な主権が認められ、皇帝は名目的存在に落ちた。また、神教（ルター派、カルヴァン派）が容認された。こうして政治的にも宗教的にもドイツは分断された。荒廃した国力が回復するまで極めて長い年月がかかったことは言うまでもない。〔J・K・A・ムゼーウス著・鈴木満訳『リューベツァールの物語―ドイツ人の民話』（国書刊行会、二〇〇三年）四〇一―二ページより引用〕。

(34) レウク Luik.　フラマン語。ムゼーウスは Lyk と綴っている。フランス語ではリエージュ Liege、ドイツ語ではリュッティヒ Lüttich。現在ベルギー王国東部に位置する。マース（ミューズ）河畔の美しい古都。壮麗な司教座聖堂がある。十四世紀以降代代の司教はドイツの諸侯の待遇を受け、ケルンの大司教の管下にあった。尤もこの町は一四六八年、フランスのルイ十一世と戦ったブルゴーニュ（ブルゴーニュ）の大公カール（シャルル）豪胆公に破壊され、その後も様様の軍隊に占領されている。

(35) 狩の館　王侯貴族の狩猟用の別邸。

(36) 騒霊（ポルターガイスト）Poltergeist.　特定の家に出没する姿を見せない精霊で、家具類、食器類を投げたり、家鳴り震動させたり、極めて騒がしい。乱暴なことが多く、これに憎まれる家人は怪我をさせられることもある。ロンドンの雄鶏小路（コック・レイン）のそれは有名。日本にも同種の現象が江戸随筆に残されている。たとえば、根岸鎮衛（やすもり）（一七三七―一八一五）著『耳嚢（みみぶくろ）』巻之二に見える「池尻村の女召仕（めしつかい）ふ間敷事（まじき）」には、この村出身の女性を使っていた幕府役人の家で、大石などが落ちるような音がしたり、臼や行灯が宙を飛んだり、天井裏が騒がしかったり、それを検分に登った男の顔に煤が塗られたり、といった怪奇現象が続き、くだんの女性を里に帰したところ、変事は止んだ、とある。ポルターガイストと少女の存在は

何か関係があるのでは、と前記イギリスで雄鶏小路の件を調べた者も考えている。〔J・K・A・ムゼーウス著・鈴木滿訳『リューベツァールの物語―ドイツ人の民話』四一二ページより引用〕。

(37) この蠟燭は清められてる　カトリック教会の祭壇に奉献される蠟燭は司祭によって聖別されている、つまり、祓い清められているので、宿の主人はこう言ったのである。

(38) オタヘイティ　「オ」はポリネシア語の定冠詞。今日のタヒティ。太平洋にあるフランス領ソシエテ諸島（フランス領ポリネシア）中最大で最も主要な島。「南海の楽園」と謳われ、画家ゴーガンの筆によってヴィジュアルな面で知られる。一六〇六年イスパニア人ドゥイロスによってヨーロッパに知られ、一七六七年六月イギリス人サミュエル・ウォーリス〔ドルフィン号とスワロウ号の二隻で。ただしフィリップ・カーテレット指揮の後者はマゼラン海峡の出口で前者とはぐれる〕により、一七六六年から六八年に掛けての世界一周航海の折に、一七六八年フランス人で始めて世界周航を行ったルイ・アントアーヌ・ド・ブーガンヴィユ（一七二九―一八一一）にウォーリスのタヒティ訪問後八ヶ月で、調査・探検された。後者は『世界周航記』Voyage autour du monde（一七七一年）〔ドイツ語での出版は一七八三年〕を著した。イギリスのジェイムズ・クック海軍大佐（一七二八―七九）は一七六九年と一七七三年に博物学者である二人のフォースター（ジョン・ラインホルトとその息子のジョージ）を乗艦させてより詳しく探査した。十八世紀のヨーロッパ人のタヒティに関する知識は専らこれらの航海について執筆された旅行記に拠る。そのうち有名な物はジョージ・フォースター George Forster（一七五四―九四）の『一七七二年から七五年にかけてのJ・R・フォースターの世界周航』〔ドイツ語での出版は一七七八―八八年〕。この本でとりわけタヒティはルソーの自然社会についての見解の生きた証拠とされた。

(39) 弓なりの窓の縁　城塞の分厚い石壁に開けられた窓なので、縁は人間が座り込めるくらいの幅があり、ここにいれば左右と頭上は壁だから、部屋の真ん中にいるより護られている感じがするわけである。

(40) 夕べの歌　夜警はたとえば「刻は十時、天気は晴、静かな夜」などと声を張り上げる。

(41) 思想家にとって　有名な医師ヨーハン・ゲオルク・リッター・フォン・ツィンマーマン Johann Georg Ritter von Zimmermann（一七二八―九五）が著した論文『孤独について』Über die Einsamkeit（四分冊。一七八四―八五）を指す。

(42) ファン・フェルナンデス島　太平洋にあるかつては人の住んでいなかった島。チリのヴァルパライソ管区に属する。首都サン・ティアゴ沖約六七〇キロにある。ダニエル・デフォーがロビンソン・クルーソーのモデルとしたスコットランドの海員アレクサンダー・セルカーク Alexander Selkirk（一六七六―一七二一）は、船長と喧嘩をしたためここに置き去りにされ〔つまり、難破して上陸したのでは無い〕、四年四箇月の間（一七〇四―〇九）孤独な生活を送った。一七〇九年二月二日ウーズ・ロジャーズ Woodes Rogers 船長指揮下の私略船〔敵国商船拿捕特許状を政府から与えられている私有の武装船〕により発見され、英国に戻った。この船長の書いた『世界周航記』A Cruising Voyage Round the

World（一七一二年）にある記事がデフォーに執筆の刺激を与えたのである。彼の著書（一七一九年）、およびこれに刺激されて夥しく出版されたロビンソン風物語（ロビンゾナーデ）については、「序の巻」の訳注8を参照のこと。

(43) 世捨て人（アナコレート）　元来は初期キリスト教の隠者を指す。たとえばエジプトの砂漠などに独り住まいして修練三昧に耽った。

(44) もっと明るく燃えるように蠟燭の芯を切り　「序の巻」に登場した「ホップの王様」が聖クリストフォルスに奉献した巨大な蠟燭は、高価で香の好い蜜蠟蠟燭に決まっているが、旅籠の主人がフランツに只で持たせてくれた二本の蠟燭は、多分ずっと安価な獣脂（羊の脂肪から作る。従って燃えるとかすかな臭気がする）蠟燭であろう。それでもこれは気前の良い話なのであって、普通庶民は灯心草（藺草）や、亜麻などからこしらえた灯心（こちらはもとより、そんじょそこらに生えている灯心草と違い、いくばくか金がかかる）を油脂に浸した物を用いたのである。灯心草は燃え尽きれば灰になってしまうが、灯心は時時特殊な道具（蠟燭鋏）で芯を切らないと、つまり、黒い燃え滓を挟み取ってやらないと、うまく燃えなくなる。蜜蠟蠟燭にはこうした手間はさほど要らなかった。

(45) 革砥　牛馬の革で作った砥。剃刀を研ぐのに用いる。

(46) カプジ・バシ　トルコの下級宮内官。

(47) 絹の紐　皇帝はその逆鱗に触れた大官に縊死用としてこれを下賜するわけである。

(48) かの心理学の雑誌（ジールナール）　心理学者・美学者・物語作家（ロマンスイエー）カール・フィリップ・モーリッツ Karl Philipp Moritz（一七五七―九三）によって刊行された雑誌「ΓΝΩΘΙ ΣΑΥΤΟΝ（グノーティ　サウトン（汝自身を知れ））あるいは、経験霊魂学のための雑誌……数人の真理愛好者の後援に拠る」（一七八三―九二年出版）を示唆。

(49) 領地管理者（アムトマン）　中世後期の代官。のち王や公侯に代わって一定の地域の行政を任された官吏。ムゼーウスの父ヨーゼフ・クリストフはザクセン＝アイゼナハ公国の高級領地管理者（オーバーアムトマン）だった。

(50) ブランシュヴァイク Braunschweig.　ドイツ北東部ニーダー・ザクセンの地方およびその首邑。ムゼーウスがこの物語を書いている十八世紀後期にはブランシュヴァイク＝ヴォルフェンビュッテル家の公爵たち、カール（在位一七三五―八〇）、カール・ヴィルヘルム・フェルディナント（在位一七八〇―一八〇六）の宮廷（一七五三年以降）があり、文化的にも経済的にも繁栄していた。その精神面での開花は同時代のヴァイマルにほとんど比肩するものだった。

(51) エーダー Oeder.　ブランウシュヴァイクの古典語高等学校（ギュムナジウム）カロリウムの数学および物理学教授で、ブランシュヴァイク公家の枢密顧問官兼財政局参議官だったヨーハン・ルートヴィヒ・エーダー Johann Ludwig Oeder（一七二六―七六）。ムゼーウスは不確実な逸話に基づいて、この枢密顧問官が地域伝説で語り伝えられていたブラウンシュヴァイクの幽霊とかつて対面したことがある、と思ったようだ。この幽霊をしゃべらせようという試みは失敗したに違いない。このような仄めかしは今日ではもはやいちいち解明することはできない。尤もムゼーウスは「ドイツ

人の民話』の、これに続いて一七八七年に出版された第五巻〔最終巻〕所載の物語「宝探し」Der Schatzgräber でまたこの話に立ち戻っている。同物語の著者による「読者諸賢へ」参照のこと。

(52) 頭巾掛け　頭巾の型を崩さないよう考案された頭の形の台。

(53) エラスムスErasmus.　ロッテルダムのエラスムスと言われたオランダの人文主義者デジデリウス・エラスムスDesiderius Erasmus、本名ゲルハルト・ゲルハルツ〔ゲルハルトの子ゲルハルト〕Gerhard Gerhards（一六四七―一五三六）であろうが、猿の逸話は不詳。

(54) 風呂の支度をしてやり　理髪師は髪や髯の手入れの他、入浴の世話もしたし、刺絡（しらく）（瀉血）などの外科的医療行為にも従事した。十二世紀にはドイツの都市に公衆浴場ができたらしいが、その所有者は理髪師だった。理髪師はやがて有能な外科医にも成る。

(55) あの預言者　エリシャのこと。旧約聖書列王記略二章二十三―二十四節参照。エリシャがベテルの町へ上って行くと、町から小さい子どもたちが出て来て、「禿げ頭、上れ、禿げ頭、上れ」とからかった。エリシャは振り向いて睨みつけ、子どもたちを呪った。すると森の中から二頭の牝熊が現れ、子どもたちのうち四十二人を引き裂いたそうな。この爺様、年の功にそぐわずあまりにも大人げない、と思いませんか。
なお、エリシャについての更に詳しい注は、J・K・A・ムゼーウス著・鈴木滿訳『リューベツァールの物語―ドイツ人の民話』三八四―三八五ページを参照のこと。

(56) これは信心のせいでした　イエス・キリストは両手・両足を十字架に釘付けにされ、脇腹を槍で突かれた。深い信仰を持つカトリック教徒で、このような跡が体の対応する箇所に出た例があったようだ。これを聖痕と称する。

(57) 剃髪部（トンスラ）　カトリックの聖職者は頭頂を剃って周りに毛を残していた、あるいは、いる。この苦行者はやはりそのようにして、イエス・キリストの受難にちなみ髪の毛を茨の冠のような形にしていたのである。

(58) 永劫（エオーン）　宇宙の一周期、永世、永劫。

(59) 豊饒の黄金の角　ギリシャ神話。ゼウスを懐胎した女神レアは、夫であり兄弟であるクロノスに飲み込まれないようこっそり産み落したが、レアの母である大地ガイアは幼子ゼウスをクレテ島に運び、牝山羊のアマルティアに哺乳させる。後にこのアマルティアの角は、あらゆる富を無尽蔵に湧出させる「豊饒の角（コルヌ・コピエ）」と見做されるようになった。

(60) 縷縷とおしゃべりをして……たっぷり語り聞かせた幽霊　理髪師は類型としてしばしば多弁とされる。この理髪師の亡霊は、生前やはり多弁だったのであり、それなのに呪いから解放されるまでは全て身振り手振りで意思を伝えねばならず、そのことも過酷な罰であって、大層な苦しみを耐え忍んだに違いない。ムゼーウスは言外にこうしたことも仄めかしている、と思われる。

(61) 七人の眠れる聖人たち　七人の聖人、マクシミアヌス、マルクス、マルティニアヌス、ディオニシウス、ヨハネス、セラピオン、コンスタンティヌス。さまざまな聖者伝説の一つによれば、彼らは皇帝デキウスのしもべだったが、キリスト教迫害時代の紀元二五一年、小アジアのギ

リシャ都市エフェスス（エフェソス、エペソ）近郊のある洞窟に隠れ、そこに閉じ籠ったところ、眠りに落ち、皇帝テオドシウス二世治下の四四六年になってようやくその睡眠から覚めた。皇帝とエフェススの司教マルティヌスの前でこの奇跡を実証したあと、永久の眠りについた。彼らの祭日は七月二十七日。〔J・K・A・ムゼーウス著・鈴木滿訳『リューベツァールの物語―ドイツ人の民話』三七六―三七七ページより引用〕。

(62) 夢魔 Alp. アルブとも。民間信仰の妖怪の一つ。英語のナイトメア nightmare〔ドイツ語のナハトマール Nachtmahr〕に当たる。古典時代には男の夢魔をインクーブス Incubus（淫夢男精）、女の夢魔をスックーバ Succuba（淫夢女精）と称した。ケルト人はこのような精霊を英雄（「ニーベルンゲン伝説」のハーゲン）や魔法使い（「アーサー王伝説」のマーリン）の父親に擬した。今日のドイツ語圏の伝承では、眠っている人間の上に重くのしかかる夜の変化。大麦、小麦、ライ麦、牧草の収穫期に野良で昼寝をしている田舎の人人を襲う夢魔は、真昼の魔物 Mittagsdamon とか 真昼の女怪 Mittagsfrau と呼ばれる。睡眠者が、大変な重さの化け物にのしかかられた、という悪夢を見る場合、その原因は、心臓や呼吸器官の疾患、あるいは詰め込み過ぎの胃袋、きつ過ぎる衣類などである。

(63) 軽快帆船 十四―十六世紀頃イスパニア、ポルトガル、トルコなどで用いられた軽快な帆船。五〇―一五〇トン。コロンブスが座乗したサンタ・マリア号はこの型。

急の巻

フランツは燃えるような憧れで昼と夜が同じ長さになるのを待ちもうけた。じれったさのあまりそれまでの間一日一日が一年に思える。とうとう長いこと待ち望んだ期日が到来。その前夜はこれから起こるはずのさまざまなことにわくわくして、目を閉じることもできない。ルンメルブルクの城で、騒霊の到来を予見した時のように、血が血管の中で滾り立って、どくんどくんと鼓動する。未知の友人をうっかり見逃さないように、彼はもう夜明け前から起き上がり、白白明けにヴェーザー河に架かる橋[1]に出掛けたが、まだがらんとしていて通行人などありはしない。独りきりで橋の上を何回も行ったり来たり。楽しい予感にうずうずしながら。こうした予感こそこの世のあらゆる至福を

本当に味わうということ。なぜなら、人間精神に最高かつ心からなる楽しみを与えてくれるのは、達成された願望ではなく、願望が達成されるかどうかという不確かな希望なのだから。フランツは、自分が期待される幸運をつかんだら、いとしいメータのもとにどんな風に登場しようか、たくさんの構想を練った。絢爛たる光芒に包まれて登場するのが得策か、これまでの真っ暗闇の人生から白み始めた暁の薄明の中に立って、自分の境涯が幸いにも変化したことをおもむろに彼女に知らせる方が賢明か、という具合。またこの折を捉えて好奇心が理性に向かって何千もの質問をぶつける。ヴェーザー河に架かる橋の上でぼくに出逢うことになっている友人というのはだれだろう。多分ぼくの昔の知人の一人かな。あの連中にはぼくが没落してこのかた、すっかり忘れられているんだが。その男はどうやってぼくに幸せへの路を拓いてくれるんだろう。それでこの路は短いのだろうか、長いのだろうか、楽なのだろうか、辛いのだろうか。どんなに思案、推量しても、理性はこうした質問にどれも答えられなかった。

一時間経つと橋の上は活気づき出した。騎馬、馬車、徒歩で人人が通る。たくさんの商貨も運搬されて往来。物乞いや窮民たちから成るいつもの日直の面面が、通行人の喜捨を頂戴するために、稼業に有利な持ち場の哨所をだんだんに占有した。救貧院[2]とか授産場[3]などを賢明な警察当局が当時まだ考案していなかったのである。さて、この襤褸を纏った部隊の中で最初に、楽しい希望が両の目から笑みこぼれているこの朗らかな散策者に施物を求めたのは、お祓い箱になった兵士で、木の義足という形で軍功賞を身に付けていた。この勲章、彼がかつて祖国のために戦った時、どこでも好きなところで物乞いをするがいい、との免許とともに、その勇敢さへの報償として与えられたものである。この御仁、観相学の徒[4]としてヴェーザー河に架かる橋の上で研究にいそしみ、大いに成果を挙げていたので、布施を拒絶されることなど滅多にない。フランツは心嬉しさにぴかぴか光る天使銀貨（エンゲルグロッシェン）（1）を相手の帽子に投げ込んだので、今回も廃兵[5]の観察眼は過たなかったわけ。

勤勉な職人連だけが活動していて、もっと身分の高い市民たちは怠惰な安らぎをこととしている朝まだきの数刻の間は、フランツはもともと約束の友の出現を当てにしてはいなかった。最下層の民衆層の中にそうした存在を探しはしなかったのであって、それゆえ道行く人にはほとんど注意を払わなかったのだ。しかし堂堂とした式服を着込んだブレーメンのお偉方たちが市参事会に赴く法廷時間、それから取引所時間になると、彼は全身目と耳に化して、近づく人たちを遠くからじろじろ観察、しかるべき人物が橋を渡って来ると、血が騒ぎ出し、自分の幸運の創り主ではないか、と思い込むのだった。そうこうするうち刻刻と時は過ぎ、日は高く昇って行った。間もなく正午になり生業は停止。雑踏は消え去り、待望の友人は相変わらず一向に到着しない。フランツはたった独り橋の上を行ったり来たりの散歩で、傍にいる仲間と言えば、居場所を離れずに冷たい食事をかっこんでいる物乞いたちだけ。彼も同じくそうしようと思ったが、食料を携えて来なかったので、いくらか果物を買い込み、ぶらつきながら昼食をしたためた。

朝早くから真昼間まで、だれともおしゃべりをせず、何か仕事をすることもなく、このヴェーザー河に架かる橋の上で張り番をしている若い男は、ここで饗宴を開いているクラブの面面の注目を引いた。一同、青年を暇人だと思い、彼ら全員がフランツの慈善行為にあずかったにも関わらず、揶揄の対象としたもの。つまり彼は戯れに橋代官と綽名されたのである。けれども、例の義足の観相学者は、彼の顔つきが朝ほど晴朗ではないことに気がついた。何かを深刻に考え耽っているようで、帽子をぎゅっと目深に被っていた。動作は緩慢でもの思わしげで、長いこと林檎の芯を齧っていたが、自分でも何をしているのか分からないという態。かような所見からこの人間観察者は、こりゃしめた、と思いつき、新参だという見かけをとりつくろい、もう一度喜捨を施してもらいに出かけた。この発見は上上の成功。深く物思いに沈んでいた哲学者は、相手を追い払おうと、機械的に財布に手を突っ込み、六グロート銀貨を一枚帽子に投げ込んだのである。

午後になると再びたくさんの新たな顔が現れた。待ちぼうけさんは未知の友人がなかなか来ないのにもううんざりしていたが、それでも希望が彼の注意力を依然として張り詰めさせていた。彼は通り過ぎる人全ての目の前に顔を突き出し、だれかが愛想良く自分を抱き締めてくれないか、と思った。けれども皆素っ気無く我が道を行くばかり、大部分は彼に全然注意を払わず、ほんの僅かな者だけが彼の挨拶にちょいと頷(うなず)いて応えただけ。日はもう傾いて、物の影は長くなり、橋の上の人通りは減る一方、物乞いの歩哨たちはだんだんにマッテンブルク(8)にある塒(ねぐら)へと引き上げて行った。期待を裏切られ、朝は目前にあった素晴らしい展望が夕方の今雲散霧消したのを見届けた青年は望みを失い、深い憂愁に襲われた。一種の不快な絶望に襲われた彼は、すんでのところ橋の欄干を飛び越え、橋からヴェーザー河に身を投げるところだった。しかしメータへの想いが彼を引き留め、もう一度彼女に会うまでこの計画は延期するよう説得した。彼は、もしメータがミサ聴聞に出掛けるなら、次の日彼女を待ち受けて、魅惑的なその目から最後の歓喜を飲み干し、それから急いで熱く燃える恋を冷たい水流で永遠に冷却しよう、と決意したのである。

いよいよ橋を後にしようとした時、彼は義足の退役傭兵(ランツクネヒト)(9)に出逢った。こちらは暇潰しのため、早朝から夕方まで橋を見張るなんて、この若者は何をもくろんでいたんだろう、と色色思索を凝らしていた。で、彼のためにいつもより長くここにぐずぐずして、とうとう待ち通してしまったわけ。けれどもあまりにも時間が掛かり過ぎたので、好奇心に駆られて矢も楯もたまらず、青年自身に問い合わせることにして、こう訊いたのである。「旦那、悪く思わねえで」と声を掛けて、「一つ伺わせておくんなさい」。毛頭おしゃべりなぞしたい気分ではなかった上、だれか友人から是非に、と願っていた呼び掛けを不具者の口から耳にしたフランツは、いくらか不機嫌に答えた。「ええ、何だね、白髯爺さん、言うがいい」。「わしら二人は」と相手は続ける。「今日この橋の上に一番乗りして、今はびりっけつでさ。わしと他のわしの仲間について言えば、施しを集めようちゅう稼業柄(がら)ここへ来るわけですがの、旦那はさ、まっ

こと、わしらの同業組合(ギルド)[10]の人じゃないが、ご同様ここに丸一日居さっしゃった。なあ、もし内緒ごとで無いなら、わしに打ち明けてくださらんか。どんなわけでここへござらしたのか。それとも、ここで転がし落としたいという石が何かお前様の胸にありますのか」。フランツは気難しく言った。「何の役に立つんだね、爺さん、ぼくの悩みが何なんだかあんたが知るかどうかがさ。あるいは、ぼくがどんな問題を心に抱えているか、あんたにゃろくに関係無いだろう」。「旦那、わしはお前様が好きなんですだよ。お前様はわしにお手を開いてくれて、二度もお恵みを下された。神様がお報い下さいますように。けれども、旦那のお顔は夕方には朝のように晴れやかではねえ。わしはそれが辛くてならねえだ」。人間嫌いになっていたフランツもこの年取った兵士が寄せてくれた親切な関心が気に入り、おしゃべりを始めたくなった。「そうさね」と彼は返事した。「なぜぼくがここで退屈を忍んでいたのか、あんたが知りたいなら教えるけど、ぼくは、ここへ来るように、と言ってくれた友だちを探していたんだが、結局待ちぼうけを喰らったのさ」。「ごめんなさいよ」と木の義足。「遠慮会釈無く言わせてもらうと、どこのどいつか知らないが、お友だちってのは、お前様をばかにしきったろくでなしでさ。わしにそんなことをしようもんなら、まっこと、そいつがわしの前に出て来おったら、この撞木杖(しゅもくづえ)で痛い目に遭わせてやるところだ。都合で約束が守れなくなったんなら、知らせてよこさなくっちゃ。お前様を小僧っ子みたいにからかわないでな」。「だけどぼくは」とフランツは言い訳した。「その男がやって来ないのを悪く取る事はできないんだ。ここで友だちに逢う、って保障したのは夢に過ぎないんだから」。例の怪談を相手に語って聞かせるのはあまりにも長たらしいので、夢ということでごまかしたのである。「夢を当てにしたてえなら、話はまた別でさ。見込みが外れてがっかりなすったのも不思議はねえだ。わしゃあこれまでの生涯でいろんなばかげた夢を見ました。でも、それを気にするような阿呆(あほう)はやったこたあねえ。わしが夢ん中で授かった宝をほんとに全部持ってりゃあ、ブレーメンの市(まち)が売りに出されるもんなら、それで買わせてもらいましょ、て

なもんで。でもわしは夢なんて一度も信じたこたあねえ。値打ちがあるやら無いやら試そうと手も足も動かしたこたあねえ。無駄骨折りだってことを、わしはよっくわきまえてただからね。へっ。埒も無い夢のために素晴らしい一日を無駄遣いしたなんて、わしゃ面と向かってお前様を笑わずにゃあいられねえだ。陽気などんちゃん騒ぎかなんかで過ごした方がずっと良かったになあ」。「結果を見ればあんたが正しいってことはよく分かる。だけどね」とフランツが弁解。「ぼくは本当にまざまざと、とても詳しく夢に見たんだ。三箇月以上前に。この日この場所でだれか友だちに逢うはずで、その友だちはうんと大事な事を話してくれるはずだ、と。夢が正夢かどうか知るだけの骨折り甲斐がある、とね」。「ああ」と木の義足が応じて「わしほどまざまざと夢を見る者はおらんて。なにしろある夢なんざ生涯忘れっこ無い。もう何年前になるやら分からんが、枕元にわしの守護天使が立っての。顔立ちは青年で、金髪の巻き毛、背中にゃ銀色の翼が生えとった。そしてわしにこう言うた。『ベルトルト、私のお告げをよくお聴き。一言も忘れてはいけません。そなたに宝が頒け与えられたのです。それを掘り起こして、のんびり余生を送るがよい。明日の夕方、シャベルと鋤を肩にして、マッテンブルクを出、ティーバー[11]を通って右に折れ、バルゲン・ブリュッケ[12]の方に向かい、聖ヨハネ修道院[13]の傍を通り、大ローラント[14]のところまで行くのです。それから大聖堂[15]広場[16]を渡り、シュリュッセルコルプ[17]を抜ける道を取ると、市外のとある庭園[18]に着きます。そこの目印は、通りから入り口まで降りている四つの石段の小路です。ここの脇にこっそり隠れて三日月が照らしてくれるまでじっと待ちなさい。月が出たら、力一杯扉を押すのです。軽く閉ざしてあるだけですから、ろくに保ちこたえないでしょう。安心して庭に入りなさい。そして拱廊に影を落としている葡萄棚の方を見ると、その後ろの左手に一本の高い林檎の樹が低い薮の上に聳えています。この樹の幹に歩み寄り、顔を真っ直ぐ月に向け、目の前三腕尺[19]の地面をご覧。そうすると、二本の梅花うつぎ[20]の木が目に触れるでしょう。そこに鋤を打ち込んで、三指尺[21]の深さまで掘ると、一枚の石の板が見つかります。そ

の下に宝が埋められているのです。黄金と値打ちのある物がどっさり入った一つの鉄の櫃がね。これは重くて扱いにくいけれど、穴から持ち上げる苦労を骨惜しみしてはなりません。くたびれるだけの事はありますよ。だって鍵は櫃の下に隠されているのですから』。

驚嘆のあまりフランツは夢見男をまじまじと見詰め、耳にした事柄に愕然とした。もし夜の薄暗がりが役に立ってくれなかったら、彼は狼狽ぶりを隠すことはできなかったろう。挙げられた全ての目印から彼は、それが父親から相続した自分自身の庭園であることが分かったのである。この庭は生前かの善良な男の道楽だった。けれどもそれだからこそ息子には気に入らなかった。経験則に照らすと、悪い習慣か何かならいざ知らず、父親と息子が一つ楽しみに共感するということは滅多に無い。悪徳の場合だと、よく言うように、林檎は滅多に幹から遠くには落ちない（＝蛙の子は蛙）のだが。父メルヒオールはこの庭園を全く自分の好みに合わせてしつらえた。己が至福の野を類稀な記述で不朽の物にした彼の末裔[22]のように多彩・珍奇に（2）。なるほど彼は絵に描いた動物園を展覧に供したわけでは無いが、それでも夥しい動物たちを園内に飼養した。すなわち、飛び跳ねる馬、翼の生えた獅子、鷲、有翼鷲頭獅子身獣、一角獣などなどの珍獣であって、全部黄金で鋳造し、用心深くだれの目にも触れさせず、地面の下に隠したのである。こうした父親のテンペ[23]を浪費家の息子はそのどんちゃか時代に法外な安値で投売りしたのである。

ここに至って木の義足はフランツにとって突然極めて興味ある存在になった。まさにこの男こそルンメルブルク城の夜の亡霊が自分のもとに差し向けた例の友だちに他ならないことに気づいたので。本当は相手を抱き締め、有頂天の最初の衝動で、友よ、父よ、と呼び掛けたくてならなかった。しかし彼は自制して、教えられた情報について木の義足を相手にこれ以上とやかく言わない方がより賢明だ、と思った。そこでこう告げたもの。「なんとも事細かな夢

だねえ。だけど、爺さん、朝目を覚ました時、あんたはどうしたの。守護天使がそうするよう勧めたことに従わなかったの」。「ふう、どうしてわしが」と夢見男は返事した。「そんな無駄骨折りをせにゃならん。だって埒も無い夢に過ぎないじゃないかね。守護天使がわしのところに現れたいんだったら、わしは人生で随分たくさん眠れない夜を過ごしたんだから、そういう時に出てくれりゃ、わしが起きているとこを見つけられたによ。だけんど、守護天使はどうやら一度もわしのことを気に掛けてくれたことは無さそうだで。さもなきゃ天使の面目丸潰れのこんな義足をつけてびっこを引いとりゃせんよ」。フランツは持っていた最後の銀貨を取り出した。「取っておくれ、とっつぁん」と彼は言った。「この贈り物をね。晩酌に葡萄酒一ショッペン飲んどくれ。あんたのおしゃべりのお蔭で憂さが晴れたよ。怠けないで、せっせとこの橋にやって来るようにね。また、ここで二人で話したいもんだ」。脚の悪い年寄りはもう長いことこの日ほどたっぷり施しを受けたことが無かった。そこで彼は慈善家を祝福し、撞木杖を突いて居酒屋に入り、一杯きこしめした。一方フランツは新たな希望に活気づいて狭い小路の住まいへと道を急いだ。

次の日彼は宝を掘るのに必要な物を全て準備した。呪文、神呪、魔法の帯、神秘な文字とか言った本質的ならざる小道具はまるきり無かったが、三つの必需品、すなわち、シャベル、鋤、それから何より大事だが、地面の下の宝、これらさえあればそんな物は無くてもがな。必要な道具類を彼は日没直前ただちに調達、差し当たってとある生垣に隠して置いた。宝その物に関してはと言うと、城の幽霊、それから橋の上の友だち、これらが彼に嘘をつくことなんかありっこない、と彼は確信していた。さて、彼は月が昇るのを切望していたが、これがその白銀の二つの角を茂みの中からひょっこり突き出すと、元気潑剌仕事に掛かり、老廃兵が教えてくれた事を全て正確に守り、無事に宝を掘り出した。その際何か変てこな目に遭わずに済んだ。黒犬に脅かされるとか、小さい青い火に照らされたりすること[24]は無し。

先見の明から非常貯蓄金をここに埋蔵して置いた父メルヒオールは、遺産のこの少なからぬ部分を息子から剝奪しよう、などという意図は毛頭無かったのであって、誤りはひとえに死神殿が、この財産遺贈者が考えていたのとは違ったやりかたで、この世から連れ去ったことにある。彼は、若い時そう告げられたように、自分が老齢になり、人生に倦み疲れ、ちゃんとした病床という形式を全てきちんと墨守して、娑婆(しゃば)におさらばするものとばかり思い込んでいたのである。そうなったら、教会の慣わし通り終油礼[25]を受けた後、愛息(まな)子を臨終の枕辺に呼び寄せ、周りの者たちをあらかじめ全部退出させてから、息子に父の祝福を与え、暇乞(いとまご)いに当たって、庭園に埋めた宝のありかをきちんと指示するつもりだった。もしこの善良な老人の命の灯火が、油が尽き出したランプの燃えている芯のようにじわじわと消えて行ったとしたら、万端うまく運んだことだろう。けれども死神は陰険にも宴会の席上でその芯をぱっと切って消してしまったので、彼は富の秘密を心ならずも墓の中へと持って行った。そこで、地中に埋蔵された父親の遺産が正当な相続人に渡るまで、あたかも司直の手によって裁判所に回されでもしたかのように、幸運な競り合いがうんとこさ必要だったわけ。

フランツは、鉄の櫃が膨大な数の他の種類の純良な貨幣とともに保管していてくれたイスパニアの不恰好な銅屑[26]を測り知れない嬉しさで我が物とした。最初歓喜にうっとりと陶酔したが、それがいくらか醒めると彼は、どうしたらこの宝を人目につかぬよう、安穏(あんのん)に、狭い小路に運搬しようか、とっくり思案を回(めぐ)らした。荷物は重過ぎて、だれか

に手伝ってもらわずには運び去ることはできない。かくして富の獲得とともにこれと結びつくありとあらゆる心配も目を覚ましたのである。成り立てほやほやのクロイソス[27]は他にどうしようもないので、庭園の背後の草地に立っている幹がうつろな一本の樹にひたすら信頼をよせて、これに財産を託すことにした。空っぽになった箱はまた薔薇の茂みに埋め、その上をできる限り平らに均した。三日経つうちに宝は樹の空洞から無事に狭い小路に港入りし、持ち主は、これまで身元を厳しく隠していたのを堂堂と明かすことができる、と考えた。彼は装いに身を凝らし、教会での代理祈禱を止めてもらい、代わりに、仕事をうまく果たして生まれ故郷の市に帰りついた旅人のための感謝の祈りを捧げて欲しい、と要請した。彼は、気づかれずにメータを観察することができる教会の一隅に身を潜め、彼女から片時も目をそらさず、その姿を眺めて恍惚とした。この予感があったればこそ、ヴェーザー河に架かる橋からハローレン[28]の跳躍をするのを思い留まったのだ。感謝の祈禱が唱えられると、彼女の全ての表情が心楽しい関心を示し、乙女の頬は喜びに燃え上がった。教会からの帰り道、いつものように二人は出逢ったが、この出逢い、もしこれに気づいた第三者が居合わせたらその男にもよく分かるほど、滔滔[29]と思いのたけを告げるものだった。

フランツは再び取引所に姿を現し、商売を始め、これは僅か数週間で大きなものになった。彼の裕福さは日毎に人目を引くようになったので、謗屋妬氏は、やっこさん、古い債権の取立てで随分運がよかったに違いない、と判断した。マルクト[30]のローラント柱の向かいに大きな家を借り、簿記係りと番頭を数人雇い入れ、一心不乱に稼業に励んだ。となると、またぞろ煩わしい寄食者連中がせっせと扉の呼び鈴を鳴らし、群れ集って来て、友情を誓うやら、身代を改めて盛り返したお祝いを述べるやらで、危うく彼を押し潰さんばかり。そして、貪婪な鉤爪でフランツをまたしても捕まえよう、と考えた。けれども彼は経験を積んで利口になっていた。そこで彼らにしっぺ返しをし、彼らの見せ掛けの友情をお世辞たらたらでいなしてしまい、空きっ腹のままお引取り願った。食いしん坊やおべっか使いと

いった厄介な屑どもを追っ払うこうした見事な手口は予期した効果を挙げたので、こやつらは顔を出さなくなった。

新たに浮上しつつあるフランツはブレーメン中の語り草で、彼が不可解な方法を用い外国で――と思われたのだが――つかんだ好運は、祝宴の席上や、裁判所の手摺[31]、さては証券取引所でのあらゆるおしゃべりの話題だった。けれども彼の幸と富の評判が増せば増すほど、麗しのメータの安穏平静は失われるばかり。こうなったら内緒のお友だち[32]は堂堂とお話しになる資格が多分おできになったでしょうに、と彼女は思ったもの。それなのに彼の愛は相変わらず沈黙したまま。教会への往復で出逢う時以外は何の音沙汰も無い。いやそれどころか、こうした形の表敬でさえだんだん回数が少なくなる。こうした兆の意味するところは恋の道では温暖ではなく寒冷な気候である。黄金の眠りがやっとこさメータの青い目を閉じようとするたび、陰鬱な女頭怪鳥ケレノ[33]である嫉妬というやつが夜毎彼女の小部屋をばさばさと飛び回り、目が覚めてしまっている彼女の耳に色色厭な予感を囁くのだった。「軽い球のようにどんな風にも吹き流されるむら気な男をとりこにしておこうなんていう、甘い希望は捨ててしまいなさいな。あの方はお前を愛してくださったし、お前に誠実だったわ。あの方のご運とお前の運が釣合っているうちはね。似た者同士だけがおつきあい（類は友を呼ぶ）。ああ。今は好運があの移り気屋さんをお前の遥か上に持ち上げた。こうなってはあの方、みすぼらしい格好をした清い気持ちなど小ばかになさる。だって、驕りと贅沢、それからお金がまたあの方の周りにわいわい集まって、気を惹こうとしているんですもの。あの方が惨めな暮らしをしておいでの時には門前払いをしたどこかの綺麗な高慢ちきが、手練手管でまた自分のところへおびき寄せようとしているかも知れない。もしかすると、あの方をお前から遠ざけているのはおべっかつかいの入れ知恵かな。甘い言葉でこんなことを言っているんだわ。『君の生まれ故郷のこの市には、君のために神様の庭が咲き誇っているんだよ。ねえ、君には今ありとあらゆる乙女が選り取り見取り。だからね、目だけじゃなく、頭を使って選ぶんだ。君をこっそり窺っている乙女はたくさ

んいるし、父親もたくさんいる。秘蔵の娘を君に拒むような者は一人もいやしない。飛び切りの美人と一緒に幸運と名誉、親族と財産も手に入れろよ。市参事会員の地位だって君から逃げて行きっこない。この市じゃあ友人知己の声というのはたくさんのことをやってのけるからねえ」なんて」。

嫉妬のなせるこうした思いつきの数数はメータの胸を間断なく不安にし、責め苛んだ。彼女はブレーメンの同世代の女性たちを綿密に点検、数多くの華やかな競争相手と、自分および自分の境遇との間にある大きな距離を推し量った。そしてその結果は彼女に思わしからざるものだった。恋人の運勢が変わった、と最初に耳にした時、彼女は有頂天になったのである。それも、大財産の共同所有者になれる、といった我欲からのものではなく、ご近所のホップの王様との縁談が壊れてからこの世の

幸せを悉く諦めてしまった善良な母親を喜ばせたい一心でのこと。でも今となっては、神様が教会の代理祈禱をお聴きとどけにならなければ良かった、旅人の事業の建て直しをあんなにうまく成功させてくださらなければ良かった、それよかあの方を塩とパンの暮らしに留めて置いてくださったならなあ、そうすれば、あの方は私と喜んでそうした生活を共にしたでしょうに、こうメータは物思いに耽るのだった。人類の美しい半分（女性）は心に懸かる内緒ごとを隠し通すのに巧みでは無い。ブリギッタ母さんは間もなく娘の憂鬱に気づき、その原因理由を推察した。それには洞察力など一向要らなかった。自分にかつて亜麻を供給した者が、今や立派で分別のある、精力的な商人の模範として賞賛の的であり、その幸運の星が再び昇った、という風評は、可愛いメータのその男に対する想い同様彼女には秘密でも何でも無かった。そこで、青年の愛が真剣なものなら、はっきり申し込みをしないで、こんなに長く躊躇う必要は無いはず、と彼女は判断したが、娘の気持ちを思いやって決してそれに触れないでいた。そのうちとうとうメータは胸が張り裂けそうになったので、優しい母親に自分が苦しんでいることを打ち明け、その苦しみの本当の理由をあからさまにした。なにせ利口な婦人ゆえ、だからといって既に察していた以上のことが分かったわけでは無い。けれどもこうしてすっかり告白したのがきっかけになって、母と娘はお互いに胸の内を吐露しあった。母は娘をこの件で非難を蒸し返したりしなかった。済んだことを言うならべた誉めに限る、と考えたからで。彼女は雄弁の才を全て、うちひしがれた娘を慰め、希望の挫折を毅然とした勇気で耐え抜かねば、と説き勧めるのに用いた。

こう考えてブリギッタ母さんはメータに向かって、極めて理性的な倫理上のいろはを綴ってみせたのである。「ねえ、お前、お前は、い、と言ったのだから」と母親。「今度は、ろ、と言わなきゃならない（＝乗りかかった舟には乗らなきゃならない）のだよ。お前は、自分の幸せが訪れた時、それをはねつけたんでしょ。だから、それがお前に二度とお目にかからない、って言うなら、従わなくっちゃ。経験に教えられたことだけど、この上なく確かな見込み

というのは真っ先に外れるものなの。だから、あたしの例にならって、良いことばかりほのめかしてだまくらかす甘い希望なんて諦めなさい。そうすりゃお前の心の平安は乱されやしない。運勢が良くなるなんて当てにしなさんな。そうすりゃ自分の境遇に満足できるでしょうよ。お前を養ってくれる糸車をありがたいとお思い。幸せや財産なんて無しで済ませることができりゃ、そんなものに煩わされたりはしないものね」。こうした心からの言葉には、おしゃべりによって失われた時間を取り戻すために、チョッキン糸巻き枠[34]や糸車のさらさら響く交響曲が続くのだった。実際ブリギッタ母さんが哲学的見解を開陳したのは心底からのこと。昔日の裕福な暮らしの再建構想が延期されてしまってからというもの、彼女は、運命にもはや引っ掻き回されないように、人生計画をごく単純化したのである。けれどもメータはこうした哲学的静謐に隔たることいまだ遼遠。そこでこのような教え、訓戒、慰藉は、意図されたこととはまるきり違った効果を齎した。良心的な娘は今や自分を母の甘美な希望の破壊者と看做すようになり、激しく己を責め立てて止まなかった。なるほど彼女は母親の結婚計画を受け入れず、将来の結婚生活に覚悟したのは塩とパンだけだったのだが、心の友が再び商売繁盛の身となり、豊かになった、と耳にしてからというもの、考えるようになったお料理の献立は六品にも増えたし、自分自身の選択によってお母様の望みを実現でき、もう一度昔の裕福な生活に戻してあげられる、と思ってわくわくしたのだったのに。

こうした楽しい夢は、フランツからもはや音信便りが無いので、段段に消えて行った。かてて加えてこんな噂が全市を駆け巡った。フランツは金持ちのアントウェルペン女との結婚を控え、その邸宅をこの上も無く壮麗に飾り立て、花嫁は目下こちらに来る途中だ、と。こうしたヨブの報せ[35]に可愛い乙女はすっかり動転した。彼女はその時からあの変節者に自分の胸からの追放令を宣告、もはや彼のことなど思うまい、と誓い、そうしながら引き出した糸に涙で湿りをくれたのである。[36]でもこの誓いに背き、心ならずも不実者のことを考えてしまう憂愁に満ちた何時間ものある一

刻(とき)のこと。なにしろ彼女は丁度織っていたスカート地を仕上げたばかりだったし、母親から以前せっせと仕事に励むよう、ある諺を教わっていたものだからね。その諺はこうだった。

紡げや、娘、紡いでいると、
求婚するひと、やって来る。

スカート地を一枚織り上げるたび、彼女はこの諺を思い出し、そうするとどうしてもあの浮気者が脳裡に浮かんでしまうのだった。――そうした憂愁に満ちた一刻のこと、ごく上品に一本の指が扉をほとほとと叩いた。ブリギッタ母さんが開けて見ると、求婚するひとが立っていた。――で、だれだったの、そのひと。――狭い小路のフランツ君に決まってるじゃありませんか。彼は素晴らしい晴れ着で盛装しており、綺麗に櫛目の通った淡褐色の巻き毛は良い香りを放っていた。この堂堂としたいでたちはもちろん亜麻の取引きなんかとは別の目的を示すもの。ブリギッタ母さんは肝を潰し、何かしゃべろうとしたが、言葉が出て来ない。メータは胸がきゅっと締め付けられるような気持ちで椅子から立ち上がり、深紅の薔薇のように顔を火照(ほて)らせ、無言のままだった。けれどもフランツは話すことができたので、かつてメータにラウテで弾いてみせた優しく情の籠もった緩徐曲(アダージオ)に、今度は礼儀作法に叶った歌詞を添え、自分の沈黙の恋を明明白白たる言葉で彼女に語ったのである。それから母親に向かい厳かに、お嬢様のお手を戴きたい、と求婚し、そうすることによって、彼の邸宅で行われている花嫁迎えの準備は魅惑のメータのためであることを証明したわけ。

格式ばったご婦人の方は、感覚の均衡を取り戻すと、この申し込みを慣わしに従って一週間考慮させて欲しい、と応えた。もっとも、喜びの涙が彼女の頬を転げ落ちていて、彼女としては何の故障も無く、それどころか賛成に決まっていることははっきりしていたのだが。でもフランツの求愛は焦眉の急だったので、ブリギッタ母さんは母親としての慣例と求婚者の要請との間に折衷案を探すことにし、可愛いメータは、母親の考え通りにこの件における決定を下すよう、全権を依託。フランツが部屋に入って来てから、乙女心には著しい変革が生じていたのである。彼が現れたということは、彼の無実をこの上も無く雄弁に実証するものであり、一見愛想尽かしと思われたのは、一部は商売を軌道に乗せるための、一部は予定された祝婚のために必要なものを調えるための、熱意と活動に他ならなかった、ということが話し合いの間に判明したので、ひそかな仲直りの妨げとなる躓きの石なぞありはしなかった。[37] メータは一旦追放令を宣告した彼に対し、ブリギッタ母さんが活動を休止させた糸紡ぎ道具に、教会の長子が流謫の身とされた議会に執ったのと同じ処遇を行い、[38] 高鳴るおのが胸に彼を栄誉をもって召還し、そこにおける以前の全ての権利を与えたのである。[39] 恋の成就を確証するあの決定的な二字から成る言葉が筆舌に尽くしがたい優雅さとともに彼女の柔らかな唇から滑り出たので、求愛を聞き届けられた恋人は火のような接吻でこれを迎え取らずにはいられなかった。[40]

優しいこの一組はようやく、内緒だった恋の全ての神聖文字を訳し、注釈する時間と機会を手に入れた。お蔭でおよそこれまで相思相愛の両人が交し合ったうちでこれ以上は無いという快いおしゃべりをしたもの。そして、願わくは我がドイツの訓詁学者もかくあって欲しいものだが、自分たちが原典を常に正しく理解・解明していたのであって、一度たりとも相互の交渉の真の意味を取り違えたことは無いのが分かった次第である。陶然とした恋人は魅惑溢れる許嫁と別れるのに大層な克己心を必要としたが、これはアントウェルペンへの十字軍遠征に出発したあの日と同じ。

けれども彼自らが果たさなければならないどうしても必要な用事があったので、とうとう暇乞いをする時となった。

この用事というのはヴェーザー河に架かる橋の上の、友である木の義足のもとへと赴くことだった。彼にした約束の履行を長いこと延ばしておりはしたが、この友のことを決して忘れてはいなかったのである。さて、目の鋭い白髪頭は、長いこと歩き回っていたあの気前の良い青年との出会いこのかた、あらゆる通行人に観相学的な狙いを定めて見たのだが、また来るよ、と言ってくれたにも関わらず、どうしてもその姿を見掛けることができないでいた。けれども青年の容姿はまだ記憶

から消え去っていなかったのである。美しく着飾った男を遠くから見つけるやいなや、木の義足は相手に近寄り、懇ろに歓迎した。フランツは年寄りの挨拶に応え、こう言った。「友よ、ある仕事を片付けなくちゃならないんだが、ぼくと一緒に新市街[41]に行ってくれないか。骨折りにはきっとお礼をするからさ」。「もちろんでさ」と爺さんは返事。「わしゃあ片足は木でできてるけんど、市の牧草地を這って廻ったあの脚奏えのちびすけ（3）みたいに達者に歩け

ますぜ。だってな、木の足ちゅうもんは、考えても見なせえ、金輪際くたびれない性分だでよ。だけんど、灰色上着の小男が通るまでちょっくら待ってくれさっしゃい。ありゃあ、昼と夜の間にきっと橋を渡って来よるでなあ」。「灰色上着の小男がどうしたって」とフランツ。「それにどういう事情があるのか、ぼくに言っておくれ」。「灰色上着の小男てのは毎日晩げにグロッシェン銀貨を一枚くれるだよ。どこから来るのやらわしゃ知らんがの。いちいち気を煩わすのは無用なことだで。だからわしゃそねえなことはせん。ときどきわしゃ、あの灰色上着の小男はわしの魂を金で買おうちゅう悪魔じゃねえか、と思うだ。けんど、あれがそうだろうと、なかろうと、わしにゃどうでもええこった。わしゃ、取引きには同意しねえだで、取り決めは成立しねえだもの」。「ぼくは思うんだが」と大口開けて笑いながらフランツは言った。「その灰色上着の小男は悪魔どんに追っかけられてるんだろう。ぼくに跟いておいでよ。だからといって、そのグロッシェン銀貨をあんたに損させはしないから」。

木の義足は出掛けることにして、案内人のあとをびっこを引き引き跟いて行った。先導役は通りから通りへと引き回し、やがて市壁間近の辺鄙な界隈に辿り着くと、新築の小さい家の前に立ち止まり、扉を叩いた。扉が開かれると、こう言ったもの。「友よ、あんたはぼくの人生の夕方を晴れにしてくれた。だから、ぼくがあんたの人生の夕方をやっぱり晴れにするのが物の道理というものさ。この家はね、家具家財もろとも、それから敷地の庭園を含めて、あんたの所有物だ。厨房も地下の酒蔵も一杯になっている。あんたの世話をするために召使を一人雇っておいた。それから例のグロッシェン銀貨だけど、毎日昼に食事のお皿の下に見つかるからね。この上秘密にしておくことは無いんで打ち明けるけど、あの灰色上着の小男というのはぼくの従僕

でね、ぼくがこの住まいをあんたのためにしつらえ終わるまで、毎日ちゃんとした喜捨を届けさせようと、ぼくが遣わしたのだ。あんたさえよければ、ぼくをあんたの善天使と考えておくれ。あんたの守護天使はあんたの思うようになってくれなかったのだから」。

それから彼は老人をその住まいの中に導き入れた。中には食卓の準備がしてあり、老人が快適安穏な暮らしができるようありとあらゆる物が備わっていた。白髪頭は幸運に不意打ちを喰らって、何が何だかさっぱり訳が分からなかった。金持ちがこんな貧乏人を思いやってくれるなんてとんと合点が行かず、危うく一切合財をまやかしだと思い込むところ。でもフランツは疑念をすっかり除いてやった。感謝の涙が年寄りの顔にどっと溢れ出たので、相手が衝撃から立ち直って自分に言葉で礼を言うのを待つまでも無く、彼の恩人はそれで満足し、こうした天使の役目を果たし終えるなり、天使の常として、爺様の目の前から姿を消し、彼が事の辻褄をできるだけ合わせるままにした。

次の日の朝、愛らしい花嫁御寮の住まいはさながら歳の市[42]のようになった。フランツが商人、宝石屋、女小間物屋、レース商、仕立て屋、靴屋、お針子の面面を、ありとあらゆる品物を提供するように、あるいは、なにくれとなく奉仕をするように、と彼女のもとに差し向けたのである。彼女は、花嫁衣裳のための布地、レース類、それからさまざまなその他の必需品を選び出し、新調のくさぐさの衣類の寸法を取らせるのに、丸一日を費やした。彼女の可愛い足、綺麗な形の腕、ほっそりとした胴回りは、技芸に巧みな彫刻家が彼女をモデルに愛の女神を作ろうとしているかのように、何度も何度も、そして極めて入念に測られた。婿君はその間に婚姻予告[43]を依頼に出掛けた。かくして三週間経たないうちに彼は、あの金持ちのホップの王様のきらびやかな華燭の典がすっかり翳んでしまうほどの盛大さで、花嫁を祭壇へと導いた。ブリギッタ母さんは淑徳高いメータを花嫁の冠で飾る、という歓喜を味わい、晩年の小春日和を安逸に送りたい、とのかねての望みを完全に果たした。彼女は身に備えていた賞賛すべき性格に対するご褒

美として大満足を手に入れたわけ。すなわち、彼女はこの上なく辛抱強い姑だったのである。

原註

（1）天使銀貨（エンゲルグロッシェン）[45] エルツゲビュルゲ[46]で鋳造されたが、ドイツ国中どこでも流通していた貨幣で、ほぼ四グロッシェンの値打ちがあった。

（2）己（おの）が至福（エリジウム）の野……多彩・珍奇に　一七八三年のヒルシュフェルト[47]の庭園カレンダー一二六ページ以降を参照。

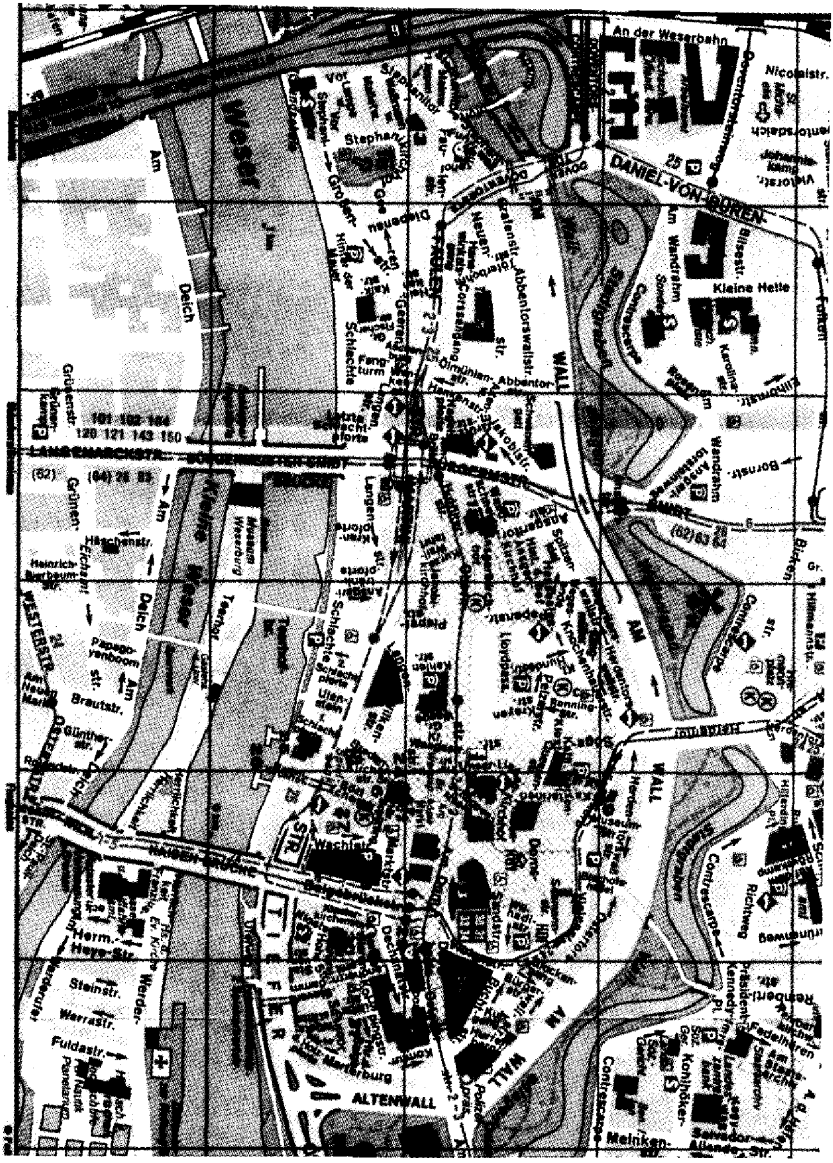
（3）市（まち）の牧草地を……脚萎えのちびすけ　ある古伝承によれば、近在の女伯爵がブレーメン市民に座興で、今しがた自分に施しを求めた不具者が一日で這い廻れるだけの土地を授けよう、と約束した。一同、彼女の言葉を真に受け、この不具者はうまく這ったので、市はこれによって広大な市民牧草地を手に入れた。

訳注

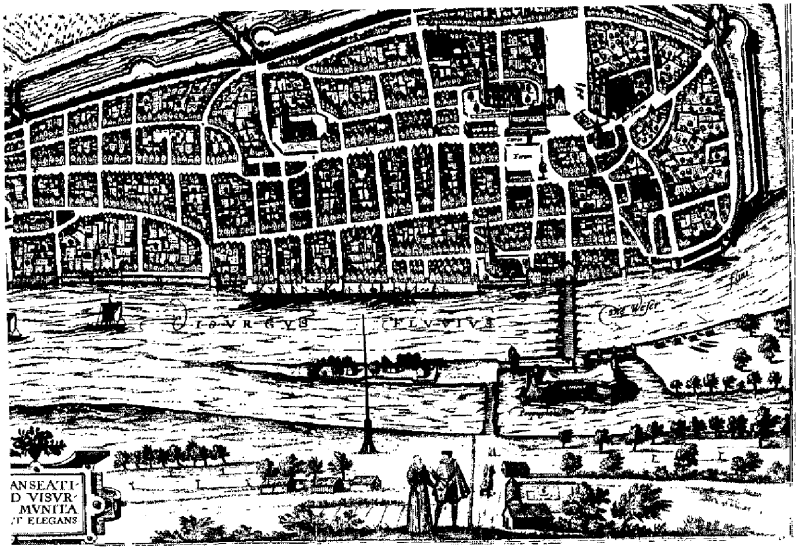
（1）ヴェーザー河に架かる橋 Weserbrücke. ヴェーザー河に架かる橋が何と呼ばれていたのか、今のところ未詳。ただし十五世紀末すでに橋が存在したとすれば、これは現在と同様、ヴェーザー河の中洲ヴェルダー島をいわば中継地として、旧市街〔河の右側〕と新市街〔河の左側〕とを繋ぐ橋であろう。旧市街の中心から走る通りの端からヴェルダー島に架かる方は大橋 Große Brücke、ヴェルダー島と新市街を結ぶ方は小橋 Kleine Brücke と二十世紀初頭の地図（Meyers Lexikon. Leipzig 1925 に拠る）には記されている。この大橋・小橋に当たると考えて見た。現在は大橋・小橋は一つの名称ヴィルヘルム・カイゼン・ブリュッケ（皇帝ヴィルヘルム橋）となっている。次のページにブレーメン市中心部の地図（Falk. Stadtplan Bremen）を掲げる。

更に一五九六年の鳥瞰図（ドイツ都市地図刊行会編「中世ドイツ都市地図集成」Stadtplansammlung von Deutschland〈1000-1657〉遊子館・二〇〇〇年に拠る）をご覧戴きたい。新市街はまだできていないが、大橋に当たると思われる橋は存在する〔小橋は大橋の延長ではなく、ずれている〕。尤も、大橋の左袂は堅固な角面堡で囲まれ、中洲への出入り口は塔門となっているので、橋上が交通繁華であったとは到底考えられない。しかも後に新市街として発展するはずのヴェーザー河左岸は人家もまばらな田園である。しかし、ムゼーウスに、彼が設定した時代のブレーメンのヴェーザー川に架かる橋はこのような状況だった、との知識を求めるのは酷と申せよう。

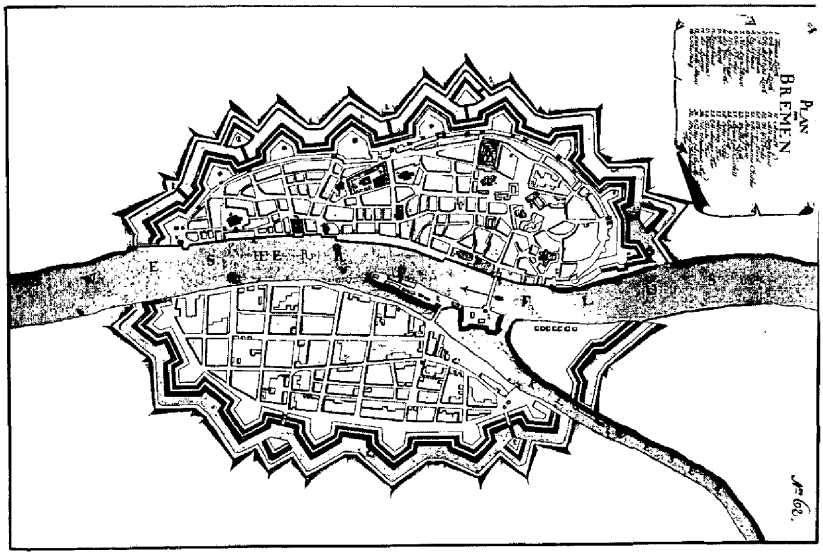
一五九六年の鳥瞰図の下に掲げたのは一七五〇年の平面図（ドイツ都市地図刊行会編「近世ドイツ都市地図集成」Stadtplansammlung von Deutschland〈1572-1860〉遊子館・二〇〇〇年に拠る）で、函館の五稜郭で日本にも知られている砲の死角を排除した市壁にぐるりを囲まれている。新市街はもちろん既に存在している。ムゼーウスの脳裡にあったのは時代から言ってこちらの方である。これなら、新旧両市外を結ぶ



ブレーメン市中心部。現代。



ブレーメン市鳥瞰図。1596年。



ブレーメン市平面図。1750年。

大橋（小橋は大橋の延長ではなく、ずれている）は絡繹（らくえき）として人馬が絶えなかっただろうから、物乞い稼業もそこそこに繁盛したわけである。

（2）救貧院 Armenanstalt　こうした施設がドイツでいつごろ作られたか未詳。英語の poorhouse に当たる。

（3）授産場 Arbeitshaus　こうした施設がドイツでいつごろ作られたか未詳。英語の workhouse に当たる。英国では一八三四年に貧民収容のために作られた。労役の代償に食物と寝場所を提供するのだが、自治体の維持費がかさむため、だれも入所を好まないように、単調で過酷な労働、刑務所より貧しい少量の食事、陰鬱な概観の建物が工夫された、と言う。これ以前の英国の施設については未詳。

（4）観相学の徒　人間の顔の線や比率から性格判断をするラヴァーターの理論の支持者や擁護者。ヨーハン・カスパール・ラヴァーター Johann Kaspar Lavater（一七四一―一八〇一）はスイス・チューリヒの神学者にして文筆家。

（5）廃兵　傷病のため退役させられた兵士。近世になるとヨーロッパでは、老廃兵養護施設（たとえばルイ十四世時代に作られたパリのオテル・ダンヴァリード（現在はナポレオンの墓があることで有名）、チャールズ二世によって創建されたロンドンのチェルシーにあるロイアル・ホスピタル（陸軍の施設。現在も古風な制服を纏った廃兵たちが身を養っている）、グリニッジにあったロイアル・ホスピタル（海軍の施設。現在海軍兵学校）など。後者二つはいずれも建築家サー・クリストファー・レンの設計に拠る壮麗な建物）が作られ、少数の廃疾兵はここに収容されるようにもなったが、それでも物乞いで日日の糧を得るほか手立ての無い人人の方がずっと多かった。ましてや十五世紀末では傷病の身の退役兵の生活はまことに惨めだった。

（6）ぶらつきながら ambulando.　ラテン語。

（7）六グロート銀貨　昔の北ドイツの銀貨。一グロートは一グロッシェンに同じ。

（8）マッテンブルク Mattenburg.　マッターブルク Matterburg はあるが、マッテンブルクは無い。ムゼーウスの誤記である。誤記はこの他にも三箇所ある。マッターブルクはもとより旧市街の一角。旧市街東端の古市壁（アルテンヴァル）Altenwall に沿って弧を描いている。いかにもかつて貧窮者が居住したであろう辺鄙な区域である。アルテンヴァルは現在は取り壊され、ブレーメン旧市街を取り巻く広い環状大通りの一部になっている。

（9）傭兵（ランツクネヒト）Landsknecht.　元来「田舎出の連中」の意。ボヘミアやスイスの傭兵であるゼルドナー Soldner（給金をもらう者）に対して、十五・六世紀のドイツの歩兵の傭兵。王侯など軍の最高司令官が百戦錬磨の軍人に傭兵隊長（フェルトハウプトマン、ないし、フェルトオーバースト）として「連隊（レギメント）を創設する」特許状を与える。傭兵隊長は副官一名と数人の部隊長（ハウプトマン）を任命する。傭兵志願者が契約手付金を受領すると、検閲簿（兵役簿）に記入される。武装は各自自前で調達しなければならない。特に良い装備の者は二倍の給料を受け取った。給金は主計官（これを「プフェニヒマイスター」と称する）が支払った。並みの兵士は毎月四グルデン、部隊長は四〇グルデン、傭兵隊長は四〇〇グルデンといった具合。作戦がうまく行った場合には合戦手当てとか突撃手当てが出た。部隊長は小旗部隊（フェーライン）（兵員四〇〇。ただしいつの時代もぴったりそうであったかどうかは疑問。三〇〇―六〇〇とする説もある）を指揮する。小旗部隊は連隊に一〇―一六個あった。従って「連隊」は近代陸軍の連

隊より遥かに大きかったわけである。ただし定員が満たされていれば。部隊長はそれぞれ副官としてロコナンテ＝ロイトナント〔現代では「中尉」と訳される〕を任命。各小旗部隊には傭兵隊長がじきじきに任命した旗手（フェーンリヒ）〔今日では「少尉」と訳される〕一名がいる。この旗手は軍事訓練に当たる義務がある。従って、「少尉」、すなわち、通常最も新参で、最も軍事的経験に乏しい士官が貴族出のため任命された他、老練な古参下士官が引立てられることもありえた、と考えて良かろう。フェーンリヒはまたの名フェルトヴァイベルというし、フェルトヴァイバーは今日「特務曹長」と訳されるから。この下に兵士たちに選ばれたゲマインヴァイベル〔「軍曹」に当たるか〕一名とロットマイスター〔兵員一〇名から成るロッテ（「分隊」と訳すか）の統率者。「伍長」に当たるか〕たちがいる。傭兵の武装は大部分、突撃用として長槍・矛槍（ヘレバルデ）・両手持ちの長大な剣、防御用として、弩（いしゆみ）、火縄銃だった。

(10) 同業組合（ギルド）　中世およびそれ以降の同業組合。比較的大きな都市ではさまざまな職種の手工業者が集まって職業別集団を構成、これからギルド〔北ドイツの呼称。中部ドイツではイヌング、オーストリア・ハンガリーではツェヒェ、西上部ドイツではツンフト〕が最終的に生まれることになる。これは初めは兄弟団であって参加は自由意志に基づくものだったが、やがて強制的同盟となり、中世の盛りには多くの都市で市政へも参画するようになる。ギルド・ツンフトは一種のカルテルの役割を果たし、商品の質を維持し、成員の生活を相互扶助し、徒弟（ヒーアリング）（見習い）の養成に配慮した。徒弟は幼少年期から親方（マイスター）と契約を結んで修行を開始、四―十二年技術を学び、やがてしかるべき吟味（職人試験）に合格して職人（ゲゼレ）になる。職人は一定の年限修行して、この年限を終えれば親方になるわけだが、全員がなれたのではない。なお、ギルド・ツンフトの会員は親方のみだった。

物乞いは都市の下級階層〔職人と徒弟の一部、修行を受けずじまいの単純労働者、日雇い、市民の使用人である下男下女。市民権は持っていなかったが、数――約四割ほどだったと推定される――の上から見れば都市住民の間で重要な役割を果たしていた〕のそのまた下に位置していた。彼らは社会的に不可避な存在として受け入れられてはいたが、他方蔑視を受けてもいた。

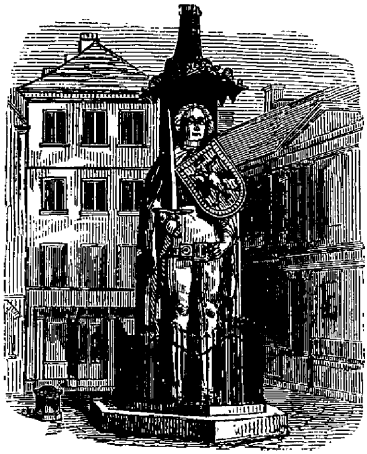
(11) ティーバー Tieber.　ティーファー Tiefer はあるが、ティーバーは無い。ティーファーという広い通りはヴェーザー河畔から西北に延びてバルゲ・ブリュッケ通り（シュトラーセ）と会う。この合流点で右に行けばバルゲ・ブリュッケ通りで、左に行けばヴェルダー島へと架かる大橋の袂に出た。

(12) バルゲン・ブリュッケ Balgenbrücke.　バルゲ・ブリュッケ Balgebrücke はあるが、バルゲン・ブリュッケは無い。なお、現在のバルゲ・ブリュッケ通りはヴィルヘルム・カイゼン・ブリュッケの右袂から大聖堂広場までの大通り。

(13) 聖ヨハネ修道院 Johanniskloster.　現存。

(14) 大ローラント großer Roland.　一四〇四年に建てられた五、六メーターの高さのローラント柱。現存のものは一九〇五年の再建。ローラント柱というのは片手に剣を握った無帽の男性を表す立像であって、殊に北ドイツの諸都市のマルクト・プラッツに立っている。その成立と意味〔カール大帝（シャルルマーニュ）伝説に登場する英雄ローラント（ローラン）らしい〕は長いこと論議の的だったが、今日ではおおむね、王

権によるマルクト・フリーデン（市が立つ期間だけ保障される平和）の徴であるマルクト・クロイツ（市の十字架）に代わって十三世紀以降登場した、都市に与えられた市の開催権・管理権とマルクト・フリーデンの象徴である、と看做されている。ブレーメンが市の権利を獲得したのは九六五年である。



ブレーメンのローラント像。
十九世紀の銅版画。

(15) 大聖堂　聖ペテロ大聖堂。一〇〇〇年頃建設が開始された。

(16) 大聖堂広場 Domhof.　Domshof は現存。もちろんこれを指していよう。旧市街中心部の北側。

(17) シュリュッセルコルブ Schlüsselkorb.　シュッセルコルブ Schüsselkorb はあるが、シュリュッセルコルブは無い。シュッセルコルブ通りは大聖堂広場の北西からブレーメンの北側旧市壁に通じている。なお、訳出底本に用いた Wissenschaftliche Buchgesellschaft の版では、Schüssel-korb と正しい綴りになっているが、手持ちのもう二つの版である左記の該当箇所では Schlüsselkorb. とちゃんと「間違っている」。一八三九年出版という極めて古い版でそうだから、テキストとしては間違っているのが正しいのであろう。

J. A. Musäus: *Volksmärchen der Deutschen.* Neue Ausgabe in sechs Bändchen. Drittes Bändchen. S.140. Verlag von Ed. Heynemann. Halle 1839.

Marquardt, Hans. Herausgegeben von. Johann Karl August Musäus: *Märchen und Sagen.* Bd.II. S.190. Kösel-Verlag. München 1972.

(18) 市外のとある庭園　シュッセルコルブ通りはかつてヘルデンストーア Heidenstor という名の市門まで延びていた。現在は無いこの市門を抜

けるとかつての市壁と市の北側の現存する濠の間の緑地帯に出たはずである。ここのどこかに父メルヒオールの庭園を置いたムゼーウスは正しい選択をしている。

(19) 腕尺（エレ）　前腕、つまり肘から指先までの長さを基にした昔の尺度。約五〇―八〇センチ。

(20) 梅花うつぎ（フィラムトローゼン）　フィラデルフス Philadelphus（＝Pfeifenstrauch）。バイカウツギ属。堂堂とした白い芳香を放つ花をつける。

(21) 指尺（ジョーンヂキ）　親指と小指を一杯に広げた長さを基にした昔の尺度。約二〇―二五センチ。

(22) 己が至福の野（エリジウム）を……彼の末裔（すえ）　この後の描写から察するに、自分の庭園にたくさんの動物の絵を展示した御仁がいたらしい。ただし「末裔」と言うのは、趣味の面での後継者を指すのであって、別段、メルヒオールの子孫が実在した、とムゼーウスは言いたかったわけではない。

(23) テンペ Tempe　ギリシャのテッサリア地方のオッサ山とオリュンポス山の間を流れる大河ペネイオスの牧歌的な谷。多くのアルカディアの物語の舞台となった。

(24) 黒犬に脅かされるとか、小さな青い火に照らされる　財宝を守護する精霊が黒犬の姿でその財宝を所有する資格の無い発掘者に襲いかかることがある。また、財宝が埋蔵されている地点には小さな青い火が燃えることがある。

(25) 終油礼　塗油式とも。カトリック教で信徒の臨終に際し、身体の苦痛を減じ、心に平安をもたらすため、信徒の身体に聖職者が香油を塗抹する儀式。

(26) イスパニアの不恰好な銅屑　これはイスパニアのペソ銀貨（一五三七年以降南アメリカで鋳造された粗雑で値打ちの低い銀貨）に対するネーデルラントの呼び方である。これでは宝とは言えまい。そこで、二十世紀初頭のドイツのメルヒェン研究家・編集者であるパウル・ツァウナートは、ムゼーウスが「最初は同様に大層不恰好な形をしていたドブローン、すなわち、極めて重要なイスパニアの金貨と取り違えた」のではないか、と推定している。本来のドブローン金貨は神聖ローマ帝国皇帝カール五世（一五〇〇―一五五八）の治世下（在位一五一九―一五五六）に鋳造された物だが、後に他のイスパニア金貨の名称にもされた。初期のスイスのドゥブローネ金貨はフランスではピストールと呼ばれ、七、六四八五グラムの重さがあった（現在純金一グラムは約一六〇〇円だから、ドゥブローネ金貨が純度一〇〇パーセントなら、一枚一万二千円余になる）。ダルタニャンと三銃士の時代、つまり十七世紀フランスでは一ピストールは一〇リーヴル（フラン）に相当していたようである。こうした昔の通貨がどれくらいの購買価値があったか現代の物価で算定することはできない。生活自体が違うからである。ちなみに『三銃士』では、ルイ十三世の時代、若きダルタニャンは僅か十五エキュー（約四十五フラン）の路銀で南仏ガスコーニュから長途パリへと志すし、その後盟友アラミスから軍馬一頭を八百リーヴルで譲ってもらい、また、別の折従者のプランシェに一回の飲み食いの費用として三リーヴルを与える、といった具合。ただし、「ダルタニャン物語」三部作（『三銃士』（時代背景一六二五―二八）・『二十年後』（同一六四八―四九）・『ブラジュロンヌ子爵』（同一六六〇―七三））の著者アレクサンドル・デュマが正しい歴史知識を持っていた、との確証は別に無い。

(27) クロイソス Krosus. 紀元前六世紀中葉のリュディアの王。その豪富で有名。

(28) ハローレン　ザーレ河畔のハレ Halle an der Saale の岩塩坑労働者。独特な郷土衣装と古風な習俗、特異な方言によって際立っていた。これらの特色のため彼らの出自はケルト系、あるいはスラヴ系と考えられた。

(29) 取引所　ブレーメンには十四世紀から取引所が置かれ、これもこの市の繁栄の原因の一つだった。取引所というのは、商人たちがそこに参集して、事業についての情報を交換、互いに取引を成立させる流通機構の中枢である。たとえば十六世紀半ばアントウェルペンは同地に設立されていた商品取引所のお蔭で、北ヨーロッパの商業と財政の中心地となっていた。この市の繁栄を身を以て体験したトマス・グレシャム（一五一九―七九）はロンドンに私費で取引所を開くことをエリザベス女王に請願する。その結果一五七六年建築が始まり、王立取引所（ロイヤル・エクスチェインジ）が設置される。一五七六年の「イスパニアの暴虐」（イスパニア軍により、アントウェルペン市民六〇〇〇人が虐殺され、八〇〇戸が焼かれた事件）後、アントウェルペンの栄華が傾くと、ロンドンとその取引所は北ヨーロッパで重要な地位を占めるに至る。

(30) マルクト　マルクト・プラッツ。市の立つ広場。ドイツの都市はここを中心に創設され、周辺に広がった。つまり目抜きの場所である。市庁舎やギルド・ホール（商工業者会館）も通常ここに面しているか、ここのごく近くにあるのが普通。

(31) 裁判所の手摺　裁判席と傍聴席を仕切る手摺。

(32) 内緒の（インペット） in petto.　ラテン語。胸の内での。秘密の。

(33) 女頭怪鳥（ハルピュイア）ケレノ　ハルピュイアはギリシャ神話のそこここに登場する、顔は処女、体は鳥の忌まわしい怪物。「アルゴー船（アルゴナウタイ）の遠征」の一齣（こま）にも登場する。この場合は、あまりにも正確に未来を予言したので神神によって盲目にされたサルミュデッソスの王ピネウスを苦しめた。これも神神の差し金。食事のたびに二羽でやって来て、彼の食卓から食べ物を攫い、残りの食べ物も汚してしまう、という苛めよう。アルゴー船乗組みの有翼の二人によって退治された。また、ハルピュイアのケレノは、彼女の島で略奪を働いたトロイア人を呪詛し、復讐の女神となって彼らに飢餓を予言した。

(34) チョッキン糸巻き枠（シュナップ・ヴァイフェ）　一定数回転したあと作動するチョッキンと切るための装置の付いている糸巻き枠。木製の機械で、その上を紡がれた糸がぴんと張られて走り、枠（かせ）錘（つむ）に取った糸を巻く道具）に巻かれる。

(35) ヨブの報せ　凶報。旧約聖書ヨブ記によれば、ヘブライの族長ヨブは神の試練に遭い、度重なる災厄に見舞われたが、その信仰は揺らがなかった。

(36) 糸に涙で湿りをくれた　糸玉から引き出した繊維を縒り合わせて強い糸にするのだが、その際唾で湿すのが普通だった。

(37) 躓きの石　憤りの原因、癇の種。旧約聖書イザヤ書八章十四節から。

(38) 教会の長子　フランス国王の名誉称号。フランス王国はカトリック教会の長女とされていたので。

(39) 同じ処遇　一七七三年フランス国王ルイ十六世は解散させられていた議会を回復した。これを示唆しているか。

(40) 二字から成る言葉　Ja.「はい」。

(41) 新市街　勿論十五世紀末はおろか、十六世紀にもブレーメンに新市街は無かった。新市街がヴェーザー河左岸にできたのは一六二〇年頃のこと。しかし、野暮は申すまい。

(42) 歳の市　今日ではおおむね市町村の民衆の祭と同義である。それゆえ教会堂開基祭（キルメス）とも呼ばれる。キルメス、キルヒヴァイ、キルヒタークは元来教会堂が奉献された記念日だったが、やがて世俗の祝祭が優位になり、大抵は秋に行われ、収穫祭とも結びついた。盛り沢山の催し物、そこへ集まる近郷近在の人人を当て込んだ数多くの店や商人で大いに賑わった。かつては一週間も続いた、という。今日では三日が普通。

(43) 婚姻予告　結婚に先立ち、これに異議のある者がいないかどうか確認するため、教会で司祭が婚姻予告を宣言する。

(44) 天使銀貨（エンゲルグロッシェン）　二本の剣がぶっちがいになっている盾を持っている天使を打ち出し像とした、十五世紀末から一六二二年までのザクセン侯のグロッシェン銀貨。ザクセンの上（オーバー）エルツゲビルゲの町アンナベルク近くのシュレッケンベルク産の銀で作られたのでシュレッケンベルガーとも呼ばれた。なお一グロッシェンは古くは一二ブェニヒに相当。「グロッシェン」とはラテン語の grossus（分厚い）に由来し、十三世紀フランスのトゥールで鋳造された良質な「グロ・トゥールノア」gros tournois（トゥールの分厚い貨幣）がやがてドイツで模倣されたもの。

(45) エルツゲビュルゲ Erzgeburge.　ムゼーウスはエルツゲビルゲ Erzgbirge をこう綴っている。

(46) ヒルシュフェルト Hirschfeld.　園芸家クリスティアン・カーユス・ラウレンツ・ヒルシュフェルト Christian Cajus Laurenz Hirschfeld（一七四二―一七九二）。一七七三年キール大学哲学教授、一七八四年以降はキール近郊デュスターブロークで果樹学校を経営、『園芸理論』Theorie der Gartenkunst（一七七七―八二。五巻）を著した。

解題

この物語のモティーフは三つある。一つはもとより相思相愛の男女が言わず語らずのうちに清らかな恋を貫き通し、紆余曲折のあげく、幸せな祝婚で大団円を迎えるげにもめでたき牧歌である。古来いくつかの創作文学の経糸（たていと）となっている。ただし、ここでは「言わず語らず」が文字通りで極端も良いところ、なんとも可憐素朴である。この点はム

ゼーウスの独創と思う。しかし、いずれにせよ民話種ではない。二つ目は、髪・髯剃りという相手の加害行為を相手に対してもやり返してやることにより、古城に憑依(ひょうい)した理髪師の霊の被魔(ふつま)を成就する話だが、これは民話AT三二六「ぞっとするとは何か覚えたがった若者」の冒険の中に登場する妖怪譚に出て来る、主人公が体験する奇怪な出来事の一つ、と解釈される。最後のモティーフである、夢で啓示された宝を、夢を見た本人ではなく、その夢のことを物語られた主人公が掘り当てる話は大層有名で、民話の型としてAT一六四五「宝は家に」に分類される。では以下にそれぞれについて解説をして見よう。

〔一〕

めでたき婚姻に至るこの清純な型の恋愛に関わるのは、以下の作品とその主人公たちである。悲恋に終わるもの、たとえばベルナルダン・ド・サン＝ピエール『自然研究』第四章『ポールとヴィルジニー』（一七八八年）などを入れればもっとあろうが、ハッピー・エンド型は意外と少ない。

ロンゴス作とされるギリシャ語で書かれたローマ文学『ダフニスとクロエー』（二世紀後半～三世紀初め？）では、レズボスの大島に山羊を飼う美少年ダフニスと羊飼いの美少女クロエー。どちらも実は良家の子女であり、父親が野に捨てて神神の裁量に任せた子どもたち。この作品が『ポールとヴィルジニー』成立に深い影響を与えたことは言うまでもない。

サミュエル・リチャードソンの書簡体小説『パミラ』（一七四〇年）の貞操堅固な美しい小間使いパミラ・アンドルーズとその「ご主人」。しかし、後者はもともと社交界の放蕩者であり、パミラを誘惑し続けるのだから、次第に行状が改まり、パミラと正式に結婚するとは言え、問題のテーマに属するか些か疑問。

リチャードソンと同時代のヘンリー・フィールディング『トム・ジョーンズ』（一七四九年）はなんともおもしろい長編小説で、主人公はさまざまの事件の後、初恋の女性と結婚する。この青年の感情過多だが善良な資質は疑えないが、本来精神的恋愛に没頭するタイプではない。従ってこれもこの範疇に入れるに相応しいかどうか。

ウォルター・スコット『アイヴァンホー』（一八一九年）では、勇気・寛容・礼節、いずれをとっても中世騎士の亀鑑ウィルフリッド・アイヴァンホーと、サクソン王家の直系である高貴なローウェナ姫。ただし、聡明で情細やかなユダヤの乙女レベッカがアイヴァンホーに恋心を抱いていることに単純な二人はとんと気づかない。

アーダルバート・シュティフターのいかにもビーダーマイアー調の小品『森の小径』では、資産家のテオドーア・クナイクト〔初期の「習作」に拠る。後の一八四五年発表のもっとずっと短いものでは、タイトルは同じだが主人公の姓はキングストンとなっている。なお、主人公は精神的に未発達な変人だったのを、聡明で常識豊かな少女との出逢い以来感化されて年齢相応の大人になるが、出逢った時には既に中年。けれども初初しい性質ではあるので、少年・少女、あるいは青年と乙女の恋物語に入れてよかろう。いや、ちょっとこじつけかな〕と温泉地近傍の山地に父親と住む農家の少女マリーア。

シャーロット・ブロンテ『ジェーン・エア』（一八四七年）では、作者の分身である女家庭教師ジェーン・エアと勤め先のお屋敷の主人ロチェスター。

チャールズ・ディケンズ『デイヴィド・カッパーフィールド』（一八五〇年）の主人公である孤児デイヴィドは、甘やかされて育った可愛いばか娘ドーラと結婚しはするが、雇い主の弁護士カンタベリーの娘、優しいアグネスと愛し合う。アグネスはドーラの死を待って倫理的に祝福された結婚を成就する。

アレクサンドル・デュマ『黒いチューリップ』（一八五〇年）では、黒いチューリップの栽培者コルネリウス・フ

アン・ベルル青年と、逮捕されて虜囚の身となった彼の牢番の娘である純情可憐なローザ・グリフィス。

テオフィル・ゴーティエ『キャピテン・フラカス』（一八六三年）では、ガスコーニュの貧乏貴族である雄雄しいシゴニャック男爵と彼が身を寄せた旅回りの劇団一座の娘役である清純な美女イザベル〔実はさる大公のご落胤〕。

レフ・ニコラーエヴィッチ・トルストイ『戦争と平和』（一八六八―六九年）のピエール（ピョートル）・ベズーホフと愛くるしく活発なナターシャ（ナターリア・ロストヴァ）はどうだろう。ナターシャは未成熟な少女期、美貌の青年アナトーリに誘惑されて駆け落ちを企て、阻止されると自殺を図る。また、ピエールにはエレンという妻がいた。けれどもやがて二人は真摯で謙虚な人生を旨とし、幸せな子沢山の結婚生活に入るのだから、これは相思相愛の純愛に入れても良いのではあるまいか。

ロバート・ルイス・スティヴンスン『黒い矢。二つの薔薇の物語』（一八八八年。中村徳三郎訳では『二つの薔薇』）の、百年戦争直後から三十年に亘って英国を荒れ狂ったヨーク公家とランカスター公家の抗争、いわゆる薔薇戦争の嵐の中で紆余曲折の末添い遂げる勇敢なディック（リチャード）・シェルトン〔後にサー・リチャード〕と健気なレイディ・ジョアナ・セドリイ。同じくR・L・S・の『キャトリオナ』（一八九三年。中村徳三郎訳では『海峡を渡る恋』）では、スコットランド低地（ロウ・ランド）の郷士である誠実なデイヴィド・バルフォア青年とスコットランド高地（ハイ・ランド）マグレガー氏族（クラン）の凜凜しい乙女キャトリオナ・ドラモンド。

ラファエル・サバチニ『スカラムーシュ』（一九二一年）の弁護士にして役者、かつ突然名剣士に変身するアンドレ・ルイ・モローとその名付け親である郷紳カンタン・ド・ケルカデュウ氏の姪アリーヌ・ド・ケルカデュウ。

もちろんいずれも、だんまりではなく適切な科白入りではあるが。

なお、サバチニは半ば以上いわゆる大衆小説作家の仲間に入ろうが、この分野になると、純愛・結婚型は沢山見つ

かる。

日本、朝鮮の古典には該当するものがあるかどうか。浅学非才なせいかどうも思いつかない。勿論悲恋はある。中国ならば、あれほど文学に富んでいる国だから、必ずある、と意気込んだが、今のところこれまた一向見つからない。貧しい書生、あるいは小商人が妓女に馴染み、お互いに誠意を貫いて幸せに結ばれる、というモティーフの物語は幾つか挙げられるにしても。素人娘は大家の深窓の令嬢でなくとも、そうそう人目に触れるわけではなかったから、目と目だけの恋愛でさえも成立しにくかったのであろうか。

〔二〕

AT三二六「ぞっとするとは何か覚えたがった若者」[1]は次のような話である。

ぞっとするとはどういうことか知らない若者が、ぞっとすることを発見しに世間に出掛ける。

彼はさまざまの奇怪な体験をする。これらは類話において適当に組み合わされる。

(1)教会で悪魔とカード遊びをする。

(2)ある幽霊から着ている物を盗む。

(3)夜、絞首台の下に行く。

(4)夜、墓地に行く。

(5)夜、幽霊屋敷に行く。そこで死人の体の一部が次次に暖炉の煙突を落ちて来る。これらはすぐにくっついて一体となる。

(6)夜、幽霊屋敷に行く。そこで化け物じみた猫どもをやっつける。

(7)夜、幽霊屋敷に行く。そこで死人の体の一部が次次に暖炉の煙突を落ちて来る。これらはすぐにくっついて一体となる。この男と九柱戯(きゅうちゅうぎ)遊びをする。

(8)夜、幽霊屋敷に行く。そこで理髪師の幽霊に剃られる。

(9)夜、幽霊屋敷に行く。そこで悪魔の指の爪を切る。

平然と怪奇を遣り過ごした主人公は財宝を手に入れる。

あるいは褒賞として王女と結婚する。結婚した後も主人公は怖いとは何か分からず、始終そのことを言い続けるので、我慢ができなくなった妻は、眠っている間に、冷たい水を彼に浴びせ掛ける。あるいは、ぬらぬらする鰻・ぴちぴち跳ねる小魚をたくさん彼の背中に乗せる。これで主人公は、ぞっとするとは何かを、なるほど心理的にではなく、肉体的にであるにしても、漸く学ぶことができる。

KHM四番「ぞっとすることを覚えるために旅に出掛けた男の話」[2]、ルートヴィヒ・ベヒシュタイン『全メルヒェン集』[3]所収三〇番「勇ましい笛吹き」[4]がまず手近に挙げられるこの種のメルヒェンである。後者はフランケン地方の口承がもとである。

「勇ましい笛吹き」の全文を試みに訳してみたが、原文は単調で、間接説話が多用されている。ただし二葉の挿絵は十九世紀ロマン派の画家ルートヴィヒ・リヒターの筆になる楽しいもの。

勇ましい笛吹き

昔むかし、笛を吹かせたら名人芸の音楽師があった。そこで世間を遍歴して回り、いろんな村や町で笛を吹いては、

それで暮らしを立てていた。この男はそんな具合で、ある日の夕暮れ時、とある小作人[5]の百姓屋敷に行き当たり、そこに泊めてもらうことにした。なにしろ夜にならないうちに次の村へ辿り着くことはできなかったので。小作人に親切に迎えられたのはいいが、一緒に食事をし、ご飯が済んだあとちょっと何曲か笛を演奏しなきゃならなかった。音楽師がこれを済ませて窓から外を覗くと、月明かりでほんの近くに古いお城があるのが見えた。どうやら一部は崩れている様子。「あれはどういうお館で、どなたの持ち物ですか」と小作人に訊くと、相手はこんな物語りをした。何年も何年も前のこと、あそこにとても金持ちだが、なんともごうつくばりの伯爵が住んでいた。伯爵は下下(しもじも)をひどく苛め、貧乏人に施しをしたためしも無し、とうとう跡継ぎが無いまま亡くなった。（けちんぼだからついぞ結婚しなかったせい）。その後一番近い親戚が財産を手に入れようとしたが、これっぽっちの金も見当たらなかった。だから、伯爵が宝を埋めてしまったらしい、それは今でもあの古いお城に隠されてるかも、ともっぱらの評判。もうたくさんの人間が宝探しのために古城に出掛けたのだが、帰って来る者がだれ一人いない。そこでお上(かみ)は古城への立入りを禁止し、国中の人間全部に厳しくこれを警告した、と。

音楽師は注意深く耳を傾け、小作人の話が終わると、自分もあそこに行きたくてむずむずする、自分は勇ましくて、ぞっとするって何のことだか分からないくらいだから、と言った。小作人は、若い命は大事にしなきゃならない、お城に行ってはいけない、と一所懸命、果ては跪(ひざまず)かんばかりに頼んだが、哀訴嘆願も役には立たず、音楽師はびくともしなかった。

小作人の二人の下男が二つの角灯(ランタン)に火をつけて、勇ましい音楽師を不気味な古城まで送って行く羽目になった。城に着くと音楽師は下男たちを角灯一つとともに帰してやり、自分はもう一つを手にして勇敢に高い階段を昇って行った。昇りきると大きな広間に入ったが、広間を廻って幾つもの扉があった。音楽師は最初の扉を開けて中に入り、そ

こにあった古風なテーブルに腰を下ろし、その上に灯りを置いて、笛を奏でた。小作人の方はというと一晩中心配で心配で眠れず、何度も窓から外を眺め、上で客人がまだ音楽をやっているのを聞くたびに、言いようも無く喜んだ。けれども自分の所の壁時計が十一時を鳴らし、笛の演奏が止んでしまうと、ひどくびっくりして、幽霊だか悪魔だか、あるいはその他の城に巣食っている代物がきっとあの好青年の頸根っこを捻ってしまったに違いない、と思い込んだ。音楽師はというと、怖さなんぞ感じないで演奏に耽っていたのだが、小作人のところであまり食べなかったので、とうとう空腹になってしまい、部屋の中をあちこち歩いて、見

て回った。すると生のレンズ豆が一杯入った鍋があるのに気付いた。別のテーブルには水をたっぷり湛えた容れ物、塩の入った容れ物、それから一壜の葡萄酒があった。彼は急いで水をレンズ豆に注ぎ。塩を加え、薪も傍にあったから暖炉に火を起こし、レンズ豆のスープを煮た。スープが煮える間、彼は葡萄酒の壜を空にし、それからまた笛を奏でた。レンズ豆が煮えると、彼はそれを火から下ろし、テーブルの上に用意されていた皿によそい、元気潑剌これにむしゃぶりついた。その時計を見ると十二時頃だった。すると突然扉が開き、二人ののっぽで黒装束の男たちが部屋に踏み込んで来たが、棺が一つ載っている棺台を担いでいた。こやつらはこれを一言も言わず、平然と食事を続けている音楽師の前に置くと、来た時と同様音も立てずに扉から外へ出て行った。二人がいなくなると、音楽師はぱっと立ち上がって、棺を開いた。中に横たわっていたのは、ちっぽけで皺くちゃ、白髪白髯の年取った小人だった。けれども若者はびくともせず、小人の体を引っ張り出すと、暖炉の前に置いた。そして、暖まったかなと思うと、生気が戻った。そこで音楽師はレンズ豆をあてがってやり、一所懸命この小人の面倒を見た。いやもう、おっかさんが子どもにうまうまさせてやるような具合に。すると小人は完全に元気になって、若者に「わしについて来い」と言った。こびとが先に立ったが、若者は角灯を手に取り、平気の平左で後をついて行った。小人は彼を案内して高い崩れた階段を下り、とうとう二人は地下深いぞっとするような丸天井の穴蔵に着いた。

ここには金が大きな山に積んであった。小人は若者にこう言い付けた。「この山を丁度真っ二つになるよう分けるのじゃ。したが、何も後に残らぬようにな。さもなくば、わしはおぬしの命を貰い受けるぞ」。若者はにっこりしただけで、すぐさま二つの大きなテーブルの上へ、あちらへ、またこちらへと数え始め、僅かの間にその金を大きく二つに分けた。が、しかし、最後にクロイツァー銅貨が一枚残ってしまった。でも音楽師はちょいと思案してから、懐中小刀を出すと、刃をクロイツァー銅貨の上に置き、ありあわせた槌を振るって二つに切り割った。さて、彼が半分

をこちらの、もう半分をあちらの山へ投げると、こびとは上上の機嫌になって、こう言った。「素晴らしい男だの、おぬし。おぬしはわしを救うてくれた。もう何百年もわしは貪欲な根性から掻き集めた自分の宝を見張らにゃならなんだ。だれかがこの金をうまく真っ二つに分けてくれるまではなあ。これまでだれ一人やってのけられた奴はおらんかった。それでわしは連中を残らず絞め殺さにゃならなんだ。さて、このうち一山はおぬしのもんじゃ。もう一山の方は貧民どもに頒けてやってくれい。ありがたい御仁だて、おぬしはわしを救うてくれたのじゃ」。そう言うなり小人は消え失せた。若者は階段を昇り、前の部屋に戻ると、自分の笛で幾つか楽しい小曲を吹いた。

音楽師がまた演奏しているのを聴いて小作人は喜び、翌日ごく早朝に城に上がって行き（というのも日中はだれでも入れたので）、嬉しさ一杯で若者を迎えた。こちらは相手に一部始終を物語り、それから自分の財宝のところに降りて行き、小人の指図通りにして、半分を貧民たちに頒け与えた。それから彼は古い城を取り壊させたが、間も無く元の場所に新しいのが建ち、金持ちになった音楽師がここに住んだ。

グリムの『ドイツ伝説集』では、さる貴族がシュレスヴィヒの港湾都市フレンスブルクの旅館の化け物が出るという大きな部屋で一夜を過ごし、そこで右の(5)のモティーフに属する怪奇に出逢う話、DS一七六番「亡霊の宴会」[6]ただ一つが辛うじて類話と言えよう。亡霊どもは大挙してこの部屋で宴会を行い、貴族に対しても、自分たちのもてなしを受けるように、と誘う。これを拒むと、返杯をするように、と銀の酒盃を持たされて無理強いを受ける。その際

神に祈ると、亡霊どもは消え失せ、後に銀の酒盃が残る。しかし、この貴重品も王の所有となってしまうので、主人公は宝を手に入れるわけではない。

理髪師の幽霊に頸から上をつるつるに剃られるが、お返しに相手にもそうしてやることで、彼を呪いから救済する、というモティーフについてはもっと考えて見なければなるまい。管見の及ぶ限りでは、グリンメルスハウゼンの『阿呆物語』（一六六九年）第六巻第十五章で語られている幽霊譚がこれの類話である。スイスの強欲奸悪な貴族が、生前不法な手段で手に入れた金のために呪われて子孫の屋敷の特定の部屋（ここの一隅にその金が隠してある）に出没、この金が変じた理髪道具でその部屋の泊り客の鬚を剃り、かつ責め苛む、というもの。しかし出現した亡霊の姿は堂堂たる貴族のそれで、理髪師の風采では無い。主人公ジムプリチウスは亡霊から事情の全てを打ち明けられ、毛一本剃られることなく祓魔に成功し、貴族の曾孫である貴族屋敷の当主から絶大な感謝を受ける。これ以外は今のところ心当たりが無い。

〔三〕

AT一六四五「宝は家に」[7]は次のような話である。

ある男がこんな夢を見る。ある離れた町に行けば、そこのこれこれの橋の上で宝を見つけるだろう、と。宝が見つからないまま、この男は橋の上で会った別の男に夢の話をする。すると相手は、自分もしかじかの町に宝がある、という夢を見た、と語り、詳細にその場所を描写する。これは最初の男の家である。最初の男は故郷に戻り、宝を発見する。[8]

これは中東から移入され、ヨーロッパ各地に広く定着した伝説・昔話である。[9]

ムゼーウスの『ドイツ人の民話』の注釈者であるノーバート・ミラーは次のように指摘する。

ムゼーウスはおそらく、オーストリアのバロック時代の説教師アブラハム・ア・サンタ・クララ[10]（一六四四―一七〇九）がその著『大悪党ユダス』で物語の枠組みとした話に素材を得ているのであろう。そこでは、債権者たちに怯えて自宅に閉じ籠っているのはホラント州のドルドレヒト[11]の若者である。夢は彼にケンプテン[12]に赴くよう指示する。彼はそこに辿り着き、自分の夢の話をしてくれた物乞いの描写から、それがドルドレヒトの父親の庭園であることに気づく。[13]

日本の民話としても酷似したものが知られており、その存在をどう解釈するか近年まで論議の対象であり、柳田國男も取り上げた岐阜県高山の「味噌買橋」の物語である。

一九九一年櫻井美紀氏〔「語り手たちの会」主宰〕が精緻・詳細な考証を重ねたあげく、以下の事実を見事に証明した。[14] イングランド民話「スウォファムの行商人」が、神話学者、童話研究家である松村武雄によって翻訳され、その義姉で小学校訓導、童話研究家の水田光〔結婚後山崎光子〕によって「夢の橋」と題して翻案された。また松村の翻訳は「世界童話大系」〔一九二四―二七年。全二十三巻。近代社〕の第七巻『蘇格蘭（スコットランド）・英蘭（イングランド）篇（蘇格蘭童話集・英蘭童話集）』（一九二六年）に収められ、それが一九三三年頃、当時高山西小学校の教師をしていた小林幹（みき）によって「味噌買橋」として書き変えられ、同小学校の教育活動の一環である冊子『郷土口碑伝説集』に入り、他の執筆者たちの手を経て、柳田國男の『昔話覚書』（一九四三年）で言及され、書承→口承→書承→口承となり、各種の昔話資料に混入した、[15]と。

グリム兄弟の『ドイツ伝説集』（DS）では二一一番「橋の上の宝の夢」[16]がこれに当たる。グリム兄弟の出典注記によれば以下の通り。

アグリコラ『格言』六二三「自信の無い薬剤師」。一三二ページ。
プレトリウス『占い棒』三七二、三七三。[17]

これはルター派の神学者で説教師ヨハンネス・アグリコラ[18]（一四九四―一五六六）の『七百と五十のドイツ格言集』[19]と、ヨハンネス・プレトリウス[20]（一六二〇―八〇）の『宝探シノ愉シミ。これぞ占い棒の亀鑑[21]』を指す。

次に「橋の上の宝の夢」の全文を訳載する。

橋の上の宝の夢

昔ある人がこんな夢を見た。レーゲンスブルク[22]の市の橋の上に行け、そうすれば金持ちになる、と。その人はやはりそこへ出掛け、一日、あるいは二週間もの間、その場所を歩き回った。すると、あの男、毎日橋の上で何をしているのだろう、と訝しく思った一人の裕福な商人が近づいて来て、何か探し物でも、と訊ねた。「私は夢を見たのです。レーゲンスブルクの橋の上へ行け、そうすれば金持ちになるだろう、って」と返事すると、「ああ」と商人は言った。「なんでまあ夢の話なんぞなさる。夢は儚いまやかしですぞ。わしもこんな夢を見たことがあります。あそこの大きな樹の下に（そう言ってその樹を指差した）金が一杯詰まった大きな釜が埋まっとる、とな。しかし、わしは一向に

頓着しませんのじゃ。夢は儚いものですからのう」。そこでこちらはそこへ向かい、その樹の下を掘ったところ、莫大な宝が見つかった。お蔭で彼は金持ちになり、夢は正夢だったことが分かった。

アグリコラはこう付け加えている。「私はこの話を何度も父上から聴いた」と。けれども他の都市だということになっている話もある。たとえばリュベック[23]（あるいはケンペン[24]）ではこうである。その市のパン屋の下働きが、橋の上で宝を見つけるだろう、という夢を見た。彼が何度も橋の上をあちこち歩き回っていると、一人の物乞いが話し掛け、その訳を訊いた。聴き終ると、自分はメルケン[25]の教会墓地の菩提樹の下（あるいは、ドルドレヒトのある茂みの下）に宝がある、という夢を見たが、そこに足を運ぼうとは思わない、と語る。パン屋の下働きは「そうさね、人はよくばかげた夢を見るもんだ。おいら、自分の夢を譲っちまわあ、そいでおいらの橋の宝物はあんたにくれてやるよ」と応える。けれどもその場所へ行って、菩提樹の下の宝を掘り出す。

ヤーコプ・グリムは『小論文集』に収められている論文の一つで「橋の上の宝の夢」について記している。[26]これは科学アカデミーで一八六〇年十二月六日朗読されたもの。彼は、一八三〇年代に幾つかの断片が発見され、講演の二年前に出版された叙事詩「カールマイネート」Karlmeinetから説き起こし、主人公である幼少時代のカール（後のカロルス・マグヌス＝カール大帝＝シャルルマーニュ[27]）を語るのに詩人は、ホデリヒ Hoderich[28]とハンフラート Hanfrat[29]という男たちのこの子に対する敵意から出発する、と紹介する。ホデリヒとハンフラートは元来パリ近傍の村バルドゥーフ Balduch[30]に住む農民であった。以下にヤーコプの語る粗筋により「橋の上の宝の夢」とその後日談を紹介する。

ある静かな真夜中一人の小人が長兄のホデリヒの寝台に歩み寄り、起こし始めたので、ホデリヒはびっくりして眠

りから覚めた。「ホデリヒ」と小人は言った。「夜が明けたらすぐに起きてパリなるかの橋[31]の上に行くがよい。かしこでそなたの身に楽と苦が生ずるであろう。以上じゃ」。ホデリヒはなにもかも幻想だと思い、寝返りを打ってまた眠ってしまった。けれどもなんということもなかった。次の夜小人がまた抜き足差し足で忍び寄り、こう告げた。「ホデリヒ、起き上がってパリなるかの橋の上に行け。そこでそなたはその身に起こる楽と苦を味わうはず。以上じゃ」。ホデリヒはこの不思議な要求に悩んだが、小人がいなくなると眠りが訪れたので、また寝込んだ。けれども小人は手を引かなかった。三晩目にも寝台の前にやって来て、眠っているホデリヒの脇腹を小突いたので、彼は憤慨して目を覚まし、小人がこう呼び掛けるのを耳にした。「聴け、明朝パリなるかの橋の上に行き、楽と苦を味わうのじゃ。これ以上のことは教えぬぞ」。ホデリヒはなぜこうしたなにやかやが起こるのか訳が分からなかったが、とにかく翌朝夜が明けると起床してパリを目指した。そして例の橋に到着すると、これからどうなるのか、と待ち設けながら一休みした。さて、何が起こったかお聞きあれ。橋を渡って自分の店に戻るところだった一人の両替商が、ホデリヒが座り込んでいるのを見て、おはよう、と声を掛けた。ホデリヒはお辞儀をしてやはり挨拶を返した。「どこから来なすったね、あんた」と両替商は訊ね始めた。「ああ、旦那」とホデリヒは言った。「おらあバルドゥフからめえりました。そいで、ほんとのことを申しますと、小人がもう三晩ちゅうものおらを寝かしてくれないんで。おらにここさ来て橋の上で立ちんぼしてろ、って言いつけたでがす。すぐと楽と苦を味わうだから、ってな。だもんで、ずうっとおらそれを待ってるだ」。「はあ」と両替商は応じた。「お前さんが阿呆だってことがわしにはようわかる。わしのところでも去年真夜中にせっかちな小人が寝床までやって来おって、わしに起きて、バルドゥフ村へ出掛けるよう命令したものじゃ。わしはそこの小川のほとりの緑の牧場で他のどこにも見当たらんほどの莫大な宝を見つけるはずだ、とな。もしこのわしが、小人の言うなり気なりにそんな無駄足を踏むほど阿呆だったら、したたかに杖でぶん殴られても仕

方が無いとこだ。うかうか惑わされて小人のたわごとに従うなんてえ間抜けなお前さんは、その報いにわしの手から横ずっぽうに一発もらうのが当然だわい」。あっと言う間にホデリヒはほっぺたに平手打ちを喰らい、こんな言葉を浴びた。「とっとと行っちまえ、このとんちき野郎、癲癇にとっつかれるがいい。訳の分からぬまやかしに唆されて道に踏み迷うつもりなら、きさまなんぞ決してのんびりできまいぞ。うちへ帰って自分の仕事に精出すんだな」と。商人はひどくかんかんになっていたので、もしホデリヒが逃げ出さなかったら、更にもっと苦がその身に起こったことだろう。さてこういう訳で横っ面をぶたれたホデリヒは予言された橋の上での苦を体験した。で、彼の身に起こるはずの楽の方はというと、よくよく知っているバルドゥフの牧場に約束の宝が埋まっている、との両替商の教えであって、これは聞き落としはしなかったのだ。ホデリヒは急いで家に帰り、彼ら二人の地所にある小川のほとりの牧場の納屋の横手[32]に埋まっている莫大な宝の発掘が自分たちに委ねられた次第を、弟にこっそり告げる。ハンフラートは即座にそれを掘り出そうと言い出し、次の夜兄弟二人は鍬と鋤を持ってしかじかと告げられた場所に出向き、掘り始めて間もなく一つの鉛の壺にぶつかり、その中に夥しい宝を見つける。（中略）。

この発見で兄弟の人生はただちに大転換した。彼らは村を引き払ってパリに赴き、利益の上がる金融業を営み、富を更に著しく増やした。王ピピン[33]と取引きするようになった彼らはピピンのために何度も重要な事業を行い、金を立て替える機会があった。こうした金を返却できない王は、その代わりに領地や城、町町を抵当に入れねばならなかったので、その結果彼らは王国でピピンに次いで最も強大、最も有力な男たちになった。けれども今や邪な性格になって来た彼らは不義非道にもますます高い栄誉を狙い始めた。その後間もなくピピンが死の床に就くと、彼は幼い息子のカールを彼らの手に託し、このがさつな百姓たちをフランス全土[34]を支配するムンマー Mummer、つまり、摂政、後見人にしたのである。

このようにしてカールマイネート伝説の導入部は極めて効果的に結ばれる。裏切り者どもはカールマイネートにまず帝王らしからぬ教育を施そうと試み、次いでその命すら狙い、こうして彼が王国から逃亡せざるを得ないように強いる。その後全ての公権力は彼らの手に帰すが、やがて若き英雄が赫赫たる勝利を遂げて帰国し、不忠な罪人どもにその数数の悪行を絞首架で償わせる。[35]

英国のグリムと自負したジョゼフ・ジェイコブズ[36]編『続英国お伽話』[37]には「スウォファムの行商人」[38]なる類話がある。大学、および、大学院同期の旧友名古屋工業大学工学部元教授渡辺正氏がかつてこれと「味噌買橋」を比較検討した折、その論考[39]で初めて原文を目にしたものである。そぞろ懐久の情に堪えず、氏が論考に引用・記載したテクスト全文を左に訳出して見た。

スウォファムの行商人

昔昔ロンドン橋（ブリッジ）が端から端までずらりと店に蔽われて、[40]鮭が橋脚（アーチ）の下を泳いでいた[41]頃のこと、ノーフォークのスウォファム[42]に一人の貧しい行商人が住んどった。この男、生計（たつき）のために、荷を背中に背負い、犬をお供に連れてとぼとぼ歩き、うんとこさ骨を折らねばならなんだ。その日の仕事が終わると、腰を下して眠るのがこの上ない楽しみで。さて、ある夜のこと、彼はある夢を見た。夢の中で目にしたのはロンドンの市（まち）のあの大きな橋。耳に響いたのは、もしお前がそこへ行けば良い報せを聞くだろう、ということ。彼はこの夢にろくすっぽ注意を払わなかったが、次の夜もまた同じ夢を見たし、三夜目もそう。そこで男は心中つぶやいた。「どういう成り行きになるか、なんとしても試してみなきゃなんねえ」。そうしててくてくロンドンの市まで出掛けたものさ。道は長かった。だからあの大きな橋

の上に立ち、右手と左手に幾つもの高い建物を見、水がごうごう流れ、何艘もの船が帆を上げて通り過ぎて行くのを眺めた時には本当に嬉しかった。彼は一日中往ったり来たり。けれども楽しくしてくれるようなことは何にも耳にしなかった。翌日もそこに立ってきょろきょろし、また改めて橋全体を往復したけれど、見ること、聞くこと、何も無し。

さて三日目になって男が相変わらず突っ立ってきょろきょろしていると、すぐ近くの店の主人が彼に話しかけた。

「なあ、あんた、わしゃ、あんたが何もせんで立ちんぼをやっとるのが不思議でたまらん。売る品物は持っていないのかの」。

行商人いわく「うんにゃ、ねえです、まったくの話」。

「それで物乞いをするわけでもないのだね」。

「我と我が身が養えるうちはやりましねえ」。

「それじゃ、ねえ、あんた、ここで何をしたいんだね、どんな用事があるんだね」。

「そうさね、親切な旦那。実を言うと、おら夢を見ただ。ここさ来れば良い報せがあるちゅうな」。

店の主人は心の底から大笑いした。

「これはしたり、お前さん、そんな愚かなことで旅をするなんてとんまもいいとこだて。言うてあげるがな、可哀そうなばかな田舎の衆、わし自身も夜さり夢を見る。昨日の晩わしゃ、スウォファムというところにいる夢を見た。とんとわしの知らん町だが、わしの間違いでなきゃあノーフォークにある。で、思うにわしゃ、ある行商人の家の後ろにある果樹園の中におった。それでこの果樹園には大きな英国樫（オーク）の樹があった。それからどうやら、わしが穴を掘れば、その英国樫の樹の下に莫大な宝が見つかるはずなんだがの。だが、わしがだ、ただもうそんなあほらしい夢の

ために退屈な長旅をやらかすほどの愚か者だ、と思うかね。いやあ、お前さん、お前さんより賢い人間から分別を学びなされ。うちへ帰って自分の仕事に励むこった」。

行商人はこれを聞いて一言もしゃべらなかったが、内心殊の外喜び、急いで家へ取って返すと、大きな英国樫の樹の下を掘り、途方も無い大財宝を発見した。彼はおっそろしい金持ちになったが、富み栄えるようになっても自分の義務を忘れなかった。というのは彼はスウォファムの教会を再建したのでね。そこで彼が亡くなると、皆は堂内にそっくり石で刻んだ、荷を背中に背負い、犬をお供に連れている彼の彫像を安置した。私が嘘をついているのでない証拠に、その石像は今日でもそこに立ってますよ。

伝説研究の権威レアンダー・ペッツォルトは「橋の上の宝の夢」についてこう簡単に纏めている。[43]

この伝説は東洋のある短い物語[44]に遡る。これは『千一夜物語』にあるので知られており、バグダードとカイロの間が舞台である。十字軍時代にこの話がヨーロッパに伝わった。一三〇〇年頃「カール・マイネート叙事詩」Karlmeinetepos[46]の中でパリの橋と地域限定され、そこから、ドイツ、オーストリア、スカンディナヴィアその他に広まり、その土地土地でそこの名高い橋が話題となる。このようにして一四〇〇年頃まずレーゲンスブルクのドナウ河に架かる橋が登場する。

なお、右の記述が記載されている彼が編纂した『ドイツ伝説集』には五二九番として、フンスリュック[47]の伝説である、その地の小村アルト・リンツェンベルク[48]とコーブレンツ[49]〔ライン河とモーゼル河の合流点にある有名な都市〕の

橋を舞台とする「橋の上の宝の夢」が収録されている。試みに全文を訳出した。

橋の上の宝の夢

フンスリュックのホッホヴァルトの縁にあるアルト・リンツェンブルクの住人で、姓をエンゲルという男が、ある時三夜続けてこんな夢を見た。

コーブレンツの橋の上、
そこでお前の運が開ける。

このことを親類たちにしゃべったところ、やいのやいのとうるさいので、とうとう彼は運を探しにコーブレンツへ旅立った。そこに着くなりすぐにモーゼル河に架かる、袂にトリーアの選帝侯の城[50]が建っているあの古い橋[51]の上へと出掛け、運が開けないかな、と期待しながら往ったり来たりした。でも、一向幸せが訪れそうになかった。無駄な出費と辛い長旅を考えてむしゃくしゃした男は、どんどん時刻が移るので、もう立ち去ろうとしたが、その時橋上で歩哨に立っていた一人の兵士が、そわそわ橋を往復している百姓の奇妙な行動に注意を惹かれて、言葉を掛け、一体ここで何を探しているのか、と訊ねた。「ああ」とエンゲルは言った。「わっしは三度続けさまに夢を見やしたんで。コーブレンツの橋の上、そこでお前の運が開ける、とな。だもんで、わっしはもうまる一日（いちんち）ちゅうものここをうろつき回ったんでがすが、運にはからきしお目に掛かりましねえ」。すると兵士はげらげら笑って、こう応えた。「夢なんかこれっぱかりも当てにしちゃいかん。たとえばおれはしょっちゅうこんな夢を見とる。リンツェンブルクの古い崩れ

た天水溜(ツイステルネ)めの中に黄金の詰まった釜があるのだ。けれど、おれが随分訊いてみたのに、リンツェンブルクがどこにあるか、だれにもおれに言えん。だからそんなとこは全然ありゃせんのだよ」。「あはあ、これでよおく分かったわい」と百姓は考え、急いで別れを告げて、遠い家路についた。そして家に戻ると、言われた場所でちゃんと宝を見つけた。

この伝説の源は案外ムゼーウスの「沈黙の恋」なのかも知れない。論者がそう思いついた根拠は次の三点に過ぎないのだが。

（1）主人公の（名ではなく）姓がわざわざ記されている。「エンゲル」とは「天使」という意味である。そして天使は「沈黙の恋」で廃兵の夢に現れてお告げをする守護天使を連想させる。

（2）主人公に宝の夢の話をするのは「沈黙の恋」の場合と同じく兵士である。なるほど、こちらは除隊兵ではなく、現役ではあるが。

（3）この兵士は橋の上で歩哨に立っている。「沈黙の恋」でムゼーウスは、物乞いたちが施しをしてくれる人たちを待ち受ける様子を再三兵士の立哨に譬えている。

民話の世界では、口承→書承→口承がかなり頻繁に繰り返されている。従って論者の根拠微弱な仮説も一概に捨て去りきれない。

注

（1）「ぞっとするとは何か覚えたがった若者」AT326. The Youth Who Wanted to Learn What Fear Is.

（2）「ぞっとすることを覚えるために旅に出掛けた男の話」KHM4. Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen.

（3）ルートヴィヒ・ベヒシュタイン Ludwig Bechstein. 一八〇一年ヴァイマルに生まれ、一八六〇年文書保管人としてマイニンゲンに没する。

彼は韻文物語、長編小説・短編小説を書いたが、特に民間伝承の収集と著作によって貢献した。ドイツ語圏の神話、伝説、メルヒェンの出版物多数。そのうちメルヒェン関係を挙げれば、『ドイツメルヒェン読本』*Deutsche Märchenbuch*（一八四四年）、『新ドイツメルヒェン読本』*Neues deutsches Märchenbuch*（一八五六年）がある。

(4) 「勇ましい笛吹き」Bechstein, Ludwig: Der beherzte Flötenspieler. ›*Sämtliche Märchen*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1972.

(5) 小作人 Pachter. 貴族や修道院のような荘園領主から土地を賃貸契約している農民。かつての我が国の小作農のように貧しいのが当然、という階層と考えることはない。

(6) 「亡霊の宴会」DS176. Geistermahl.

(7) 「宝は家に」AT1645. The Treasure at Home.

(8) アールネ／トンプソン『民話の型』Aarne, Antti/Thompson, Atith: *The Types of the Folktale. A Classification and Bibliography*. Helsinki 1964. Suomalainen Tiedeakatemia. p.469.

(9) 中東から移入され、ヨーロッパ各地に広く定着した伝説・昔話である　東京大学教授杉田英明氏により完璧に解明されている。『葡萄樹の見える回廊』（岩波書店二〇〇二年）第六章「橋の上の宝の夢」（二五九―三一七ページ）。これには櫻井美紀氏や、奈良教育大学教授竹原威滋氏など近年の関連研究も網羅されており、注の形で書き込まれている。

(10) アブラハム・ア・サンタ・クララ Abraham a Santa Clara.　本名ウルリヒ・メガーレ Ulrich Megerle. 一六四四年バーデンのクレーンハインシュテッテンに生まれ、一七〇九年ウィーンで没する。一六七七―八二年および一六八九年以降宮廷説教師。口喧しい弾劾者、機知に富んだ語り手、熱狂的カトリック教徒として、しばしば市場で怒鳴っているような文体で、同時代のウィーンを見事に叙述した。主著『大悪党ユダス』Judas der Ertz-Schelm（一六八六―九五）四巻。

(11) ドルドレヒト Dordrecht.　オランダ、すなわちネーデルラント王国の南ホラント州の都市。ユトレヒトの南方を西へ流れるワール河が、もっと曲がりくねっているがやはり西進するマース河と合流する地点に位置する。「ライン河のヴェニス」とも呼ばれる。町そのものが古い歴史を持つ港である。一二〇〇年頃年都市となり、中世のホラント伯爵領の最も重要な町だった。ブリールに次いで一五七二年イスパニア兵を追い出したホラント州最初の都市。

(12) ケンプテン Kempten.　南ドイツのシュヴァーベンの都市。イラー河畔にある。ローマの殖民都市カンボドゥヌムが起源。

(13) 出典　Musäus, Johann Karl August: *Volksmärchen der Deutschen*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1976. S.858.

(14) 櫻井美紀氏が……以下の事実を見事に解明した　これに先立ち一九八八年、岩手県の民話「大工と鬼六」が北欧の教会建立縁起の翻訳→翻案→口承→採録である、と劇的な出生証明をしたのも桜井氏である（櫻井美紀著〈「大工と鬼六」の出自をめぐって〉（『口承文藝研究』第十一

号所収。日本口承文藝学會、一九八八年)。論者も一九七三年にノルウェーのオーラフ王の教会建立伝説、および、スウェーデンのルンドの大聖堂建立伝説と「大工と鬼六」が酷似しているだけは指摘し得たのだが、そこまではだれしも言えること。そして論者には途中の経路を論証・解明することは能わなかった〔鈴木滿著「がたがたの竹馬小僧――グリム昔話の鑑賞――」(「比較文學研究」第二十三号所収。東大比較文學會、一九七三年)〕。

(15) 出典　櫻井美紀著〈昔話「味噌買橋」の出自　――その翻案と受容の系譜――〉(「口承文藝研究」第十五号所収、日本口承文藝學會、一九九二年)。

なお、櫻井氏の前掲二論文は次の単行本に収められている。

櫻井美紀著『昔話と語りの現在』、日本児童文化史叢書二〇、久山社、一九九八年

(16) 「橋の上の宝の夢」　DS211. Traum vom Schatz auf der Brücke.

(17) アグリコラ『格言』　Agricola: Sprichwort, 623. Der ungewissenhafte Apotheker, S.132.

プレトリウス『占い棒』Prätor. Wünschelrute, 372, 373.

(18) ヨハンネス・アグリコラ Johannes Agricora　本姓シュニッター Schnitter.。一四九四年(一四九二年?)ザクセンの都市アイスレーベンに生まれ、一五六六年ベルリンに没す。一五二六―三六年アイスレーベンで説教師および教師を務め、一五四〇年以降ブランデンブルク選帝侯ヨアヒム二世の宮廷説教師。ルターとメランヒトンに反対して、真の悔い改めは信仰から来るものでなければならないのだから、法を説くべきではない、とするアンティノミスムス論争を展開した。

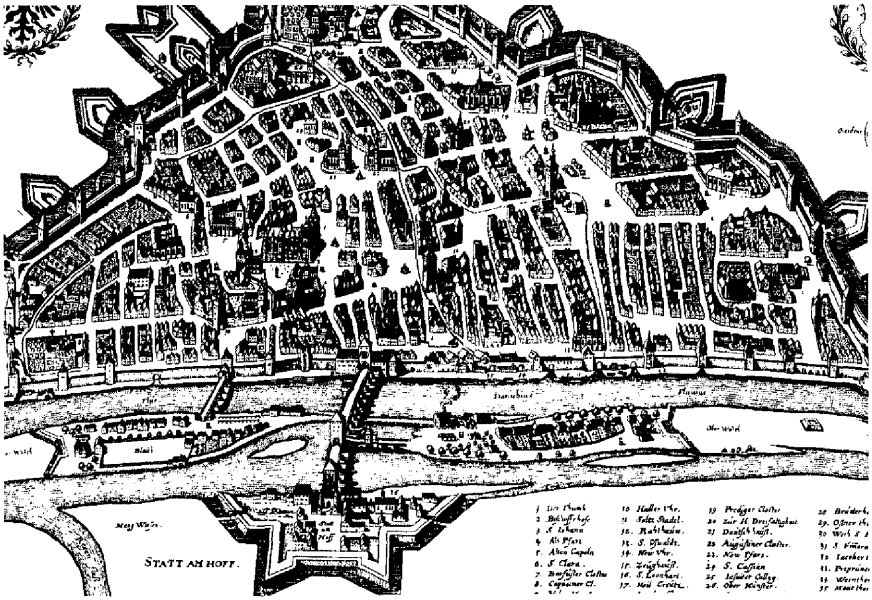
(19) 『七百と五十のドイツ格言集』*Agricora, Johannes: Siebenhundert und funfftzig deutscher Sprichwörter.* Wittenberg, 1529.

(20) ヨハンネス・プレトリウス Johannes Praetorius　本名ハンス・シュルツェ Hans Schultze.。文人。一六三〇年アルトマルクのツェトリンゲンに生まれ、一六八〇年ライプツィヒに没す。ライプツィヒ大学修士。彼の著作は価値のある民俗学的資料を含んでいる。特に同時代の民間信仰に関して。たとえば、『しれじあナルりゅーべつぁーるノ怪奇譚』*Daemonologia Rubinzalii Silesii*(一六六二―六五。五巻)、『ブロッケン山事跡』Blocksberges Verrichtung(一六六八年)など。

(21) 『宝探シノ愉シミ。これぞ占い棒の亀鑑』　Praetorius, Johannes: *Gazophilaci gaudium, das ist ein Ausbund von Wundschei-Ruthen.* 1667.

(22) レーゲンスブルク Regensburg.　バイエルンの都市。レーゲン川がドナウ河に合流する地点にある。大きな船の航行はここまで。ドナウ河はここで幾つもの島島によってふたつの流れに分かたれる。島島のうち大きいのは上ヴェルト、下ヴェルトだが、その間の河流が複雑に流れる箇所に十二世紀以来石造の橋が架かっている。この橋の下と下流でドナウ河は名高い渦を作る。もとよりレーゲンスブルクには他に三つ橋があるが、物語の舞台に相応しいのはここだろう。市庁舎、かつての司教宮殿、聖ペテロ大聖堂、マルクト・プラッツなどのある旧市街中心部のすぐ

レーゲンスブルク鳥瞰図。1572-1677年。



レーゲンスブルク平面図。1750年。

近くに架かる。ドイツ最古の石造の橋。これはその名も「石の橋」Steinerne Brücke である。左に南方からレーゲンスブルクを遠望する図を掲げる。これは一五七二―一六一七年に刊行されたゲオルク・ブラウン／フランス・ホーエンベルクの手になる『世界都市図帳』Civitates Orbis Terrarum に収録されている、とのこと（「中世都市地図集成」に拠る）。また、その更に下に掲げるのは一七五〇年の平面図である（近世ドイツ都市地図集成）に拠る。

(23) リュベック Lübeck. かつての自由ハンザ都市。旧市街はトラーヴェ川がバルト海に注ぐ二一キロ上流に位置する。西は上トラーヴェ川、ホルステン・ハーフェン（港）、ハンザ・ハーフェンに、東はザンクト・ユルゲン・ハーフェン、クルーク・ハーフェンに囲まれた丘の多い島の上にある。つまりぐるりが水で取り巻かれている。旧市街と外域を結ぶ橋は当然二・三に留まらないが、ブレーメンの象徴的存在であり、市の正門とも言えようホルステン・トーアに続く往時のホルステン・ブリュッケあたりが舞台になろうか。

(24) ケンペン Kempen. ラインラントの小さい町。デュッセルドルフの近傍。聖職者にして神秘主義者トマス・ア・ケンピス（一三八〇―一四一七）の誕生地。さて、有名な橋があろうか。ケンプテン Kempten（注7参照）の誤りか。

(25) メルケン Molken. 未詳。リュベックの一地区か。けれども現代のリュベックの地図では索引に見当たらない。

(26) Grimm, Jacob: *Der Traum von dem Schatz auf der Brücke.* Kleinere Schriften. III., S.414-428.

(27) カルロス・マグヌス＝カール大帝＝シャルルマーニュ Carolus Magnus＝Karl der Große＝Charlemagne. カール一世（七四二―八一四）。フランク王国国王。ローマ皇帝。短軀王ピピンの息子で、メロヴィング朝フランク王国の宮宰〔マヨールドームス。王国の行政・財政面の長〕カール・マルテル（大槌のカール）Karl Martell の孫。七六八年ピピンの死後兄弟のカールマン Karlmann と共に政権の座につき、七七一年のカールマンの死後はフランク王国の単独の支配者となる。やがてザクセン公国とランゴバルト王国を征服、西ヨーロッパで彼に臣従していないのはイングランドとイスパニアだけという強大な国家の君主となり、八〇〇年法王レオ三世によりローマ皇帝に戴冠され、西ローマ帝国を復興した。ギリシャ・ローマ文化がキリスト教文化に継承されて、西ヨーロッパの地で栄えることになる。これがカロリング・ルネサンスであり、カール大帝はこれを創始した功労者である。

(28) ホデリヒ　この名には、カール一世の父ピピンによって七五一年廃位されたメロヴィング朝フランク王国の最後の王ヒルデリヒ Childerich〔フランス語綴りではシルデリク Childéric〕を想起させる響きがある。廃王は王位を奪われてから三年後七五四年に死んでいる。

(29) ハンフラート「カールマイネート叙事詩」の原典に当たった杉田英明氏〔氏は「カールマイネット」と表記している〕は「ハエンフライト」と表記している。前掲『葡萄樹の見える回廊』二九三ページ。

(30) バルドゥーフ Balduch. ヤーコプは、この村は疑いも無く中世のバリアクム Balliacum、現今のバイイ Bailly（セーヌ・エ・オアーズ県、ヴェルサイユ郡、マルリ・ル・ロア小郡）を想起させる、と断言している。(Grimm, Jacob: *Der Traum von dem Schatz auf der Brücke.* Gelesen in

der Akademie der Wissenschaften am 6. December 1860. S.417.）中東生まれの原話に出て来る都市名バクダードという音の残響が微かながらここに聴こえるような気がする。

(31) パリなるかの橋　杉田英明氏は、この橋がパリのシテ島に架かる現在の「両替橋」（ポン・トオ・シャンジュ）Pont au Change、当時の「大きな橋」grande pont（グランド・ポン　原詩一二〇行に出る）であろう、と解明している。ここには多くの両替商や貴金属商が店を構えたので、「両替商橋」（ポン・トオ・シャンジュール）Pont-au-Changeurs――のちに「両替橋」――と呼ばれるようになった、とのこと。前掲書二九七ページ。

(32) 納屋の横手　「納屋云云」はヤーコプのドイツ語訳には見えない。

(33) ピピン Pippin.　ピピン三世、ピピン短軀王 Pippin der Kurze、または　小ピピン Pippin der Kleine（七一五頃―七六八）。カール・マルテルの息子。父の後を継いでネウストリアの宮宰（マヨールドームス）となり、アウストラシアの宮宰だった兄弟のカールマンが七四七年修道僧になると、フランク王国全土を統一。七五一年ソアッソンで既に名目だけの王に過ぎなかったメロヴィング朝の国王ヒルデリヒ三世を退位させ、これに代わって王に推戴される。ここにカロリング朝フランク王国が始まる。

(34) フランス Frankreich.　フランク王国 Frankenreich とは記されていない。

(35) 出典　Grimm, Jacob: *Der Traum von dem Schatz auf der Brücke.* S.416-419.

(36) ジョゼフ・ジェイコブズ Joseph Jacobs.　一八五四年オーストラリアのシドニーに生まれ、一九一六年アメリカ合衆国ニューヨーク州のヤンカーズで没する。オーストラリア生まれの英国人民間伝承研究家。十九世紀の子供向きお伽話の最も人気ある脚色者の一人。ユダヤ人史、ユダヤ文化の研究者でもあり、文学研究家でもあった。一八七二年英国に移住。ケンブリッジ大学卒業。一八八九年から一九〇〇年まで雑誌「民間伝承」Folk-Lore を編集。ジェイコブズは一般に次のような民間伝承の学問的および通俗的著作の多作な著者として最も知られている。『イソップ寓話』（一八九四）*The Fables of Aesop*、『英国お伽話』（一八九〇）*English Fairy Tales*、『ケルトお伽話』（一八九二）*Celtic Fairy Tales*、『インドお伽話』（一八九二）*Indian Fairy Tales*、『続英国お伽話』（一八九四）*More English Fairy Tales*、『不思議な旅の本』（一八九六）*The Book of Wonder Voyages*、『ヨーロッパのお伽話の本』（一九一六）*Europa's Fairy Book*。一九〇〇年家族とともに合衆国に移住、『ユダヤ百科事典』*Jewish Encyclopedia* の編纂などに当たる。

(37) 『続英国お伽話』　Jacobs, Joseph: *More English Fairy Tales.* London 1894.
なお、これに先立ちジェイコブズは『英国お伽話』*English Fairly Tales.* London 1890. を出版している。双方を纏めた現代の出版はたとえば次の通り。
Jacobs, Joseph: *English Fairy Tales being the Two Collections ›English Fairy Tales‹ and ›More English Fairy Tales‹, compiled and annotated by*

Joseph Jacobs. The Bodley Head. London/Sidney/Toronto, 1968.

(38) 「スウォファムの行商人」 The Pedlar of Swaffham.

(39) その論考　渡辺正著〈日英童話比較考　「スウォファムの行商人」と「味噌買橋」の場合〉（「比較文學研究」第十七号（特輯児童文学研究）所収、東大比較文學会、一九七〇年）

(40) ロンドン橋が……ずらりと店に蔽われて　これは二代目のロンドン橋。一七五〇年上流にウェストミンスター橋が架けられるまでロンドンの唯一の橋だった。一八三二年に取り壊される。現代のあまり個性の無い花崗岩の橋は三代目である。一一七六年、修理・改築を繰り返しながらそれまで一千年の長きに亘り役目を果たして来た初代の木造ロンドン橋に代わり、石造の橋の建設が着工された。一二〇九年漸く完成。十九の橋脚が支え、中央橋脚の上には聖トマス・ア・ベケットに奉献された礼拝堂が建立されたが、その後この礼拝堂の壁の周囲に家屋や店舗が群がり建ち、遂に橋を端から端まで蔽い尽くした。これら百数十軒の家屋・店舗は橋からテムズ河の上へ張り出しており、ロンドン市中で最も賑やかな商店街を形成していたが、もともと荷馬車が二列に並んで通行できるほど道幅が広かった中央の車道は極めて狭くなってしまい、頻繁に交通渋滞が起こった。尤も、全家屋・店舗が撤去されるのは十八世紀半ばを過ぎてからである。

(41) 鮭が……泳いでいた　紀元四世紀末頃までローマ帝国の属州ブリタニアのロンディニウムには、南側の市壁と西側の市壁の近くを流れるテムズ河とフリート川の他に、比較的小さなウォールブルック川が市の中心部を通ってテムズ河に流れ込んでいたが、これらの河川には魚が豊富に棲息し、雑魚ばかりでなく鮭や鱒が群がっていた。しかし、いつ頃まで鮭や鱒がロンドン橋の下を泳いでいたであろうか。トマス・ア・ベケットの秘書ウィリアム・フィッツスティーヴンによれば、十二世紀末あたりのテムズ河には魚が群がっていた、とのこと。ロンドンはまだのんびりした田園都市だったのである。エドワード・ラザファードはその長編小説『ロンドン』の第九章「ロンドン橋」の「一三六一年」と題した節で、少年リチャード・ウィッティントン〔あの「ウィッティントンと猫」の伝説で有名なディック・ウィッティントン〕にテムズ河の豊富な鱒や鮭を釣らせている〔E・ラザファード著・鈴木主税／桃井緑美子訳『ロンドン』、集英社、二〇〇一年、上巻四四五ページ〕。中世後期チューダー王朝時代にロンドンの巨大都市化が進行し始めると、フリート川やウォールブルック川はやがて臭気芬芬（ふんぷん）の汚泥で一杯になり、テムズ河も汚染されて行ったが、それでも潮流で駆動される揚水機が十六世紀半ばロンドン橋に設置され、近傍の多数の家屋に水を供給した。この揚水機は十八世紀半ば、ロンドン橋上の家屋・店舗が撤去された折の図でもなお稼動している。しかし、こうした不潔な水は度重なる疫病流行の原因にもなったくらいだから、人間はともかく、鮭には耐えられなかったではないかな。

(42) スウォファム Swaffham.　イースト・アングリア地方のノーフォーク州にあるサクソン時代からの町。ノーフォーク人は「ノーフォークの茹（ダンプリング）で団子」などと田舎者の代表視されている、とのこと。渡辺氏の論考に拠る。

(43) レアンダー・ペッツォルトは……纏めている　Petzoldt, Leander. Herausgegeben von: *Deutsche Volkssagen.* Verlag C.H.Beck. München 1978.

S.469.

(44) 東洋のある短い物語　十世紀のイラクの法官アブー・アリー・アル＝ムハッスィン・アッ＝タヌーヒー（九三八―九四年）のアラビア語による逸話集『悲しみのあとの喜び』の第六章「夢のもたらす福音ののち苦難を脱して安楽へと至った人々」三十五話のうち第十四話。杉田英明著『葡萄樹の見える回廊』二六二―二六三ページに拠る。

(45) 『千一夜物語』にある　イギリスのバートン版『千夜一夜物語』では第三百五十一夜の後半～第三百五十二夜の冒頭に収められている「おちぶれた男が夢のお告げで金持になった話」（大場正史訳『全訳千夜一夜物語』第九巻・角川文庫・昭和二十七年初版・九七―一〇二ページ）がこれに当たる〔なお、フランスのマリュドリュス版の邦訳である岩波文庫の『千一夜物語』には該当が無い〕。文庫版で僅か六ページの短い物語である。粗筋は以下のごとし。

バグダードに大金持ちがいたが、財産をすっかり遣い果たしてしまった。苦しい労働で暮らしを立てていたが、ある夜、幸運はカイロにある、そこへ行って探せ、との夢を見る。カイロに着いた時には日暮れだったので、あるモスクに入って眠る。夜盗の一団がこのモスクからその隣の家に侵入する。家人の叫びで警備頭が部下を連れて駆けつける。夜盗は逃げてしまい、警備頭はモスクで眠っているのを発見した男を逮捕、棕櫚（しゅろ）の笞でしたたかに打ち、牢獄に放り込む。三日後引き出して訊問。男は委細を話し、「幸運」というのは、受けた笞打ちだった、と悔やむ。警備頭は笑いこけて、「浅はかな奴め」と決め付ける。そして、自分も、バクダードのこれこれの家の花園風の中庭の噴水の下に莫大な財宝が埋めてある、との夢を三度も見たが、行きはしなかった、たわごとを真に受けおって、この馬鹿者めが、と男を戒め、路銀としていくらかの金を恵み、バクダードへ帰らせる。ところで、警備頭の話した家というのは男の家に他ならなかったので、男は財宝を掘り出して豊かになる。

主人公がフランツのように亡くなった父親から巨富を相続し、それを濫費した挙句貧乏になったのかどうか、物語からは全く分からないが、自宅の花園風の中庭の一角から財宝が出て来るところを深読みすれば、「沈黙の恋」と同様、これも亡き父の隠して置いた物、と解釈できないことも無い。

(46) 「カールマイネート叙事詩」Karlmeinetepos　この表題「カールマイネート」はヤーコプ・グリムの命名に拠る。ヤーコプは前述の「橋の上の宝の夢」なる論文冒頭でこう語っている。なお、〔　〕内は論者の補遺。

三十年代〔一八三〇年代〕にこれまで知られたことの無い古い下ライン・ドイツ語〔杉田英明氏によれば、中部ドイツ語の方言の一つリ

プアーリ語。『葡萄樹の見える回廊』二九二―二九三ページ）の詩の幾つもの断片が出現した。私はこれにカールマイネート Karlmeinet という適切な名前を付けた。なぜなら、これは幼少時代のカールの伝説を語っているものだし、既にレアリ・ディ・フランツィア Reali di Francia〔未詳〕がカールにマイネット Mainetto なる異名を与えているからである。

「カールマイネート」とは「小さなシャルルマーニュ」のことである。ヤーコプの論文朗読に二年先立つ一八五八年欠落部を補綴されてA・フォン・ケラー A. v. Keller により出版された。ゲルマニストにしてロマニストのカール・バルチュ Karl Bartsch（一八三二―一八八八）の注釈付きである。なお、バルチュは一八六一年「カールマイネートについて」Über Karlmeinet を刊行している。この詩は三五〇〇〇行以上に亘る。

なお、ヤーコプは「小さいシャルルマーニュ」という矛盾した表現（なぜなら、「シャルルマーニュ」は「大シャルル」、「大カール」という意味だから）について、このように述べている。（Grimm, Jacob: *Der Traum von dem Schatz auf der Brucke*. S.415.）

カールと同義である周知のカールマン Karlmann が誤って、しかしながらまた当然にもシャルルマーニュ Charlemagne やカロルス・マグヌス Carolus Magnus に発展したように、シャルルメーヌ Charlemaine の場合でもロマンス語の mains, minus を連想させ、更に縮小形の Mainet、イタリア語の Mainetto を形成するのは自然のことだった。

(47) フンスリュック Hunsrück. ライン粘板岩山地（シーファー・ゲビルゲ）の南西部。南西部をモーゼル河によってアイフェル山地から、東部をライン河によってタウヌス山地から、南東部をナーエ河によってファルツ山地から分かたれ、標高五〇〇―六〇〇メーターの高原を形成している。

(48) アルト・リンツェンベルク Alt-Rinzenberg. 未詳。

(49) コーブレンツ Koblenz. 父なるライン河に母なるモーゼル河が合流する要衝の地に位置する商工業都市。合流部には三角形の岬が突き出ており、「ドイツの角」das Deutsche Eck と呼ばれる。かつてローマ軍の砦があった場所に建設された。

(50) トリーアの選帝侯の城 das kurtrierische Schloß 現在のアルテ・ブルク（古城砦）Alte Burg。十三世紀の建築。橋の右袂に立っている。現在市立図書館。

(51) あの古い橋　バルドゥイン橋。選帝侯バルドゥイン Kurfürst Balduin が建設したアーチ型の石橋。ライン河に架かっていて左袂に広大な選帝侯の城 Kurfürstliches Schloß が聳えているプファッフェンドルフ橋 Pfaffendorfer Brücke ではない。「モーゼル河に架かる」と明記されているのだから。なお「選帝侯バルドゥイン」とはモーゼル河畔の古都トリーア Trier の大司教バルドゥイン・フォン・ルクセンブルク Balduin von Luxemburg, Erzbischof von Trier（一二八五―一三五四）のこと。神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ七世の兄弟。

訳者から一言。

アントウェルペンの旅籠で、フランツの質問に応えて商人連中の消息をいろいろ丁寧に教えてくれる食卓仲間の科白（「破の巻」）を、大阪の上品な船場（せんば）言葉に仕立て上げてくださったヨーロッパ比較文化学科の親愛な同僚西村淳子教授に、この場をお借りして心から御礼申し上げます。中世ヨーロッパの大商工業都市で流通機構の中心である海港アントウェルペンに相当する大都会を過去の日本に仮託するとなれば、これはもう大阪以外に考えられませんし、中でも船場言葉は好きなのです。

西村先生、どうもありがとうございました。

（二〇〇五年一月十一日　受理）